



日本中央競馬会平成30年度畜産振興事業 未来の畜産女子育成プロジェクト事業報告書



未来の畜産女子 育成プロジェクト



ニュージーランド酪農研修・
畜産アンバサダー活動報告書



公益社団法人 国際農業者交流協会

日本中央競馬会
平成30年度畜産振興事業

未来の畜産女子育成プロジェクト
事業報告書

海外の畜産業を学んで、

これからの日本の農業を考えよう。

畜産業の素晴らしさをもう一度確認して、

たくさんの仲間と一緒に取り組んでいこう。

Stop making excuses

and just do things!



目次

1	はじめに JAEC会長	P3
2	プログラム趣旨・日程	P4
3	訪問先 お世話になった方々	P9
4	写真でたどるプロジェクト	P11
5	意識調査 アンケートより	P21
6	参加者の報告 参加者20名、引率2名、メンター2名	P27
7	畜産アンバサダー活動結果	P81
8	女子高生のアイデア	P83



1 はじめに



公益社団法人
国際農業者交流協会
会長 野中 和雄

本会が1952年より手掛けている海外農業研修事業は、若い農業者の国際感覚を培い、また日本語が通じず知人もいないところで、人に頼らず自身の能力を生かして長期生活をすることによって個々の成長を促すという、他では得難い実務研修を通じた人材育成の手法をとっています。昨今、農業現場での担い手育成が課題となり、その抜本的な解決は、いかなる方法をもってしても難しい状況がある中で、若い人材の活躍の場の提供と農業を将来の進むべき道として思い描けるモチベーションをいかにして持たせるかがカギと言えます。

平成30年度日本中央競馬会畜産振興事業の助成により、畜産業の振興という切り口から、担い手と女性の活躍にスポットを当てた取り組みとして、未来の畜産女子育成プロジェクト事業を実施しました。これは、農業高等学校で農業を学ぶ女子生徒を対象に、海外の畜産現場を学んでもらい、そこから得た知識や体験をもとに、彼らの若々しい感性と情報発信力を生かして、広く我が国畜産業の重要性の再認識を促し、若い世代へエールを送る畜産アンバサダーとして活動してもらうというものです。

全国の多数の応募者の中から選抜された20名の女子高校生が、酪農の盛んなニュージーランドで10日

の研修を行いました。この経験は、彼女たちにとって何ものにも代えがたい経験になったことはもちろん、帰国後に各地で行った畜産アンバサダー活動の中で語った体験発表は、聞く人たちの心を強くひきつけ、畜産業の魅力と担い手となる若い女性のパワーを存分に証明する機会となりました。

この度の事業運営に関し、多大なご支援、ご協力を頂いたニュージーランド大使館、エデュケーションニュージーランド、サウスランドガールズハイスクールとインバーカーギル市の皆様、視察先の皆様、全国農業高等学校長協会、ご引率の先生、メンター、事業推進委員、ご応募いただいた全国の農業高等学校に深く感謝の意を表します。また、この事業に参加した20名の畜産アンバサダーに、未来の畜産女子としての大活躍を祈念するとともに拍手喝さいを送りたいと思います。

2 プログラム趣旨・日程

1 プロジェクトの目的

日本の少子高齢化が社会の重大な課題となり、一人一人の働き手の能力を上げ、その力を十分に発揮していくことが求められています。また、グローバル化が進む中、国や地域の間でFTAやEPAと言った貿易協定が結ばれる際に、日本の畜産業の発展と将来の展開をふまえて、次世代を担う若者たちが国際感覚を身に付けること、そして、女性の活躍という視点から、将来の女性農業リーダーたちを育てることが強く求められてきています。

将来の日本の畜産の展開を考えた時、次世代を担う若者が畜産業を学び、夢を持ってこの産業に関わっていくことが重要です。畜産を学ぶ若者同士のネットワークの中で、日本の畜産業の魅力と可能性に気づき、自信を持って将来の職業として畜産業を選択し盛り上げていくことが何より大切なことです。同時に、ともすれば男性主体の業界と受け取られる畜産業に、女性が活躍する場と機会を増やすことは、畜産業のイメージを変えることだけでなく、女性の感性を生かしたしなやかで繊細な経営を実現し、収益向上が期待されることから積極的に推進することが求められます。

その根底となる考え方を身に付けるために、日本国内の畜産業だけに目を向けるのではなく、外国の畜産業に携わる人たちがどう考え、どういう風に仕事をしているのかを見聞きし実感する機会が必要ではないでしょうか。畜産の魅力の本質や気が付かなかった可能性を見出す事ができるはずで、そして、女性参画が進んだ畜産業が盛んな国で、お手本となる女性就農者と言葉を交わし、アドバイスをもらえば、大きな勇気になるでしょう。

そこで、今回は、酪農を中心とした畜産業が盛んに行われるニュージーランドで、畜産業の実情を学ぶとともに、女性の活躍ぶりや実態を学ぶ海外畜産研修の機会を設け、将来の畜産業をリードでき

る若年層の女性（高等学校女子生徒）に焦点を当てて海外農業研修を実施することとしました。

そして、彼女たちには、学んだことを、日本の畜産に関わる人たち、これから畜産業を目指す若者たち、そして、畜産の魅力にまだ気が付いていない人たちへと情報発信していく畜産アンバサダーとして、所属する学校や地域、様々なイベントで畜産業の魅力を一歩アピールしてもらうこととしました。

なぜニュージーランドで学ぶのか？

ニュージーランドは、酪農や羊の育成で有名ですが、世界で初めて女性の参政権を認めたり、現在のアーダーン首相が女性であると共に、就任中に出産子育てを行うなど、世界でも特に女性の立場を理解した国と言えます。また、南半球であることから、日本と違う気候、季節で行われる畜産は、日本と違う風土や地理条件があり、異なる畜産を学ぶ上で良い条件と言えます。そこで培われてきた、放牧を中心とした酪農、季節分娩、農家の出資でできたフォンテラ社、輸出を強力に打ち出す畜産ビジネスは、畜産を学ぶ若者にとって素晴らしい刺激となります。また、畜産業で活躍する女性と直接言葉を交わしたり、同じく農業を目指す同年代との交流をするためには語学も必要となり、その意識が国際化に対応した人材の素養を育みます。



2 研修参加者

●畜産アンバサダー

	性	名	出身	農家・非農家	所属学校	学科	学年
1	道端	成美	北海道	非農家	北海道岩見沢農業高等学校	畜産科学科	3年
2	江頭	ひかる	北海道	農家	北海道帯広農業高等学校	酪農科学科	2年
3	高橋	六花	北海道	非農家	北海道士幌高等学校	アグリビジネス科	2年
4	森田	七海	北海道	非農家	酪農学園大学附属 とわの森三愛高等学校	アグリクリエイイト科	3年
5	川井	つむぎ	宮城県	非農家	宮城県農業高等学校	農業科	2年
6	小森	宥芽	栃木県	農家	栃木県立宇都宮白楊高等学校	農業経営科	2年
7	田中	萌絵	栃木県	非農家	栃木県立那須拓陽高等学校	農業経営科	3年
8	天沼	千華	群馬県	非農家	群馬県立勢多農林高等学校	動物科学科	3年
9	糸川	夏海	千葉県	非農家	埼玉県立杉戸農業高等学校	生物生産技術科	3年
10	春日	鈴音	東京都	非農家	東京都立瑞穂農芸高等学校	畜産科学科	3年
11	中西	千里	新潟県	農家	新潟県立長岡農業高等学校	生産技術科	2年
12	古河	風葉	長野県	非農家	長野県南安曇農業高等学校	生物工学科	2年
13	宮田	結衣	岐阜県	非農家	岐阜県立岐阜農林高等学校	動物科学科	2年
14	加藤	綾	愛知県	農家	愛知県立安城農林高等学校	動物科学科	3年
15	石塚	優花	京都府	非農家	京都府立農芸高等学校	農産バイオ科	2年
16	竹内	清花	兵庫県	非農家	兵庫県立農業高等学校	動物科学科	2年
17	三上	日和	島根県	農家	島根県立出雲農林高等学校	動物科学科	3年
18	重富	ひかる	佐賀県	非農家	佐賀県立佐賀農業高等学校	農業科学科	3年
19	今林	楓	熊本県	非農家	熊本県立熊本農業高等学校	畜産科	1年
20	戸塚	蒼依	熊本県	農家	熊本県立菊池農業高等学校	畜産科学科	3年

●引率者

福山 裕士 熊本県 副校長 熊本県立阿蘇中央高等学校
湯浅 維 京都府 教諭 京都府立農芸高等学校

●メンター

藤田 春恵 岩手県 酪農家農家
光成 有香 京都府 京都大学院生

3 プロジェクトの流れ



①選抜 5月下旬

全国から応募のあった農業を学ぶ女子高校生の中から20人を選抜し、今回のプロジェクトに参加してもらいました。また、同行して頂く高校教諭についても、全国で募集し、2名を選出しました。

②事前研修 6月14日(木)～16日(土)

8月に実施する現地研修に向けて、プロジェクトを良く理解し、渡航までの準備に向けてのオリエンテーションを目的とした研修を、国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都)にて行いました。20名の参加者に加え、引率の高校教諭、海外農業研修を経験した畜産業に詳しい女性指導員として2名のメンバーも参加しました。

【事前研修日程】

6月14日(木)
国立オリンピック記念青少年総合センター
13:00 集合
13:15 オリエンテーション(施設の使い方など)
19:00 自己紹介、プロジェクトの概要

6月15日(金)
06:45 体操
09:00 事業説明(現地研修の予定説明、
ニュージーランドでの生活)
13:45 ニュージーランド大使館訪問、講義
19:00 事業説明(畜産アンバサダー活動、
帰国成果報告での発表について)

6月16日(土)
06:45 明治神宮参拝
09:00 アンケート(1回目)の実施
10:00 メンターからのアドバイス(畜産の現場から)
11:00 意見交換
12:00 解散

事前研修ではニュージーランドでの研修を効果的なものとするため、参加者一人一人が誰かに頼ることなく学ぶことを目的にそれぞれが課題を持って取り組む

ことを確認しました。参加者同士で、現地ではどんなことに注目して学ぶことが一番良いか話し合い、次の4つのテーマを設けると共に、担当するメンバーを決めました。更に、それぞれが特に注目するキーワードを考え、その言葉を中心にテーマについて掘り下げることにしました。

- ①ビジネスとしての畜産(攻めの畜産)
担当者: 春日鈴音、川井つむぎ、宮田結衣、古河風葉、小森宥芽
- ②女性の活躍できる畜産(ワークライフバランス)
担当者: 重富ひかる、戸塚蒼依、三上日和、石塚優花、今林楓
- ③家畜や自然のための畜産(アニマルウェルフェア)
担当者: 道端成美、高橋六花、竹内清花、田中萌絵、江頭ひかる
- ④畜産の担い手(農家を育む政策)
担当者: 天沼千華、糸川夏海、加藤綾、森田七海、中西千里

事前研修までの期間で、各自それぞれのテーマについて少しずつ学びを深めることと、ニュージーランドでの英語によるコミュニケーションに備え、英会話を中心に準備をするようにしました。

③現地研修 8月18日(土)～28日(火)

実際に海外の畜産現場を学ぶ機会として、現地研修を行いました。主な拠点は、インバーカーギル(Invercargill)と言う南島南端の町でした。この地域は、酪農や羊の育成が盛んで、畜産をしっかりと学べる場所です。地域の農業を目指す女子高校生が通っているサウスランドガールズハイスクール(Southland Girls' High School)で、寮生活をしながら地域の農場や畜産の会社などでインタビューを行ないました。

また、南島最大の都市クライストチャーチ(Christchurch)と、北島最大の都市オークランド(Auckland)も訪れました。

【現地研修日程】

日次	月日	曜	発着時間	内容	宿泊
1	8月18日	土	14:00 18:30	成田空港集合、出発前オリエンテーション 成田空港発(飛行機)	機内泊
2	8月19日	日	14:00 14:30 14:45	オークランド、クライストチャーチ 空港乗継 インバーカーギル空港着 Southland Girls' High School (SGHS)へ 歓迎と寮の利用についての説明など	寮
3	8月20日	月	8:50 10:00 13:00 14:10	英会話ESOL 農場視察: Linnet Burns Farm (Woodlands) ※子牛育成と農場経営について視察 SGHS ゲストスピーカー Alexis Muirさんの話 英会話ESOL	寮
4	8月21日	火	10:00 14:00	Southern Institute of Technology (SIT) ゲストスピーカーのEric Royさんの話 チョコレート工場での実習	寮
5	8月22日	水	8:50 10:45 13:30	英会話ESOL by Ms. Sharee Ineson Queens Park ※歴史ある広大な動物公園 フォンテラ社 ※乳業会社、加工場	寮
6	8月23日	木	10:30 12:15 15:00	Southern Cross Produce ※露地野菜生産加工 Blue River Dairy ※羊・山羊の乳製品加工 NZ最南端のBluff HillとStirling Point見学	寮
7	8月24日	金	9:00 13:15 15:00	Thomas Family Farm見学 ※酪農場、Ms. Katrina Tomasさん (酪農女性ネットワーク代表)の話 Jackie & Herbie 農場 ※羊飼育 Southern Dairy Hub訪問 ※大規模研究酪農場	寮
8	8月25日	土	10:00 午後	Simon & Mo Tophams Dairy Farm訪問 研修取りまとめ	寮
9	8月26日	日	8:50 19:30	インバーカーギルからクライストチャーチへ(飛行機) クライストチャーチ市内の市場調査 研修とりまとめ	The Chateau on the Park Double Tree
10	8月27日	月	9:00 18:00	インバーカーギルからクライストチャーチへ(飛行機) クライストチャーチ市内の市場調査 研修とりまとめ	Auckland City Hotel Hobson Street

日次	月日	曜	発着時間	内容	宿泊
11	8月28日	火	8:55 16:50 20:00	オークランド発 成田空港着 事務連絡・報告会リハーサル	オリンピック センター(NYC)
12	8月29日	水	09:00 10:00	発表準備、アンケートの実施 研修成果報告会	

④ 研修成果報告会 8月29日(水)

現地研修の後半では、学んだことをそれぞれの発表グループごとに取りまとめ、発表原稿とプレゼンテーションを作成しました。

研修成果報告会には、ニュージーランド大使館、畜産関係団体、農林水産省、農業高校の先生、新聞や雑誌の記者、保護者等にお集まり頂きました。それぞれが学んだことを発表した上で、最後に引率頂いた福山裕士先生から総括して頂きました。

⑤ 畜産アンバサダー活動

ニュージーランドで学んだことをしっかり復習し、そして、それぞれの学校で学んできたことを合わせて自分の畜産に対する考え方にまで昇華させ、その想いを伝える伝道師として活動しました。

畜産の魅力のアピールする畜産アンバサダーであることを自覚し、母校や地域、国際農業者交流協会が主催する国際化対応営農研究会で、経験を踏まえて自分の考えを発信する、畜産アンバサダー活動を展開しました。

各校で実施された畜産アンバサダー活動は、同校生徒に向けて研修成果の報告を中心に行われました。また、教員、保護者、他校生徒(中学生を含む)、地域の農業者等の前でも話をする機会を得ました。海外研修に参加して感じたこと、日本の畜産との違い、環境問題や女性の活躍などにも触れて発表しました。

そして、国際化対応営農研究会は、以下の日程で実施されました。ここではまず、本プロジェクトの概要と現地研修で行った事をダイジェストで紹介した後、各畜産アンバサダーが、自分の考えを発表する形を取りました。海外研修に参加したことを自画自賛するのではなく、日本の畜産の問題やニュージーランドのやり方と日本とのギャップをふまえて、現実的などの

ように畜産を魅力ある職業にしていけることができるか、自分の言葉でしっかりと発表しました。

【北海道・東北ブロック】2018年1月25日、山形県山形市村山総合支庁
担当畜産アンバサダー
○道端成美 ○江頭ひかる ○高橋六花
○森田七海

【関東甲信静越ブロック】2018年10月25日、新潟県長岡市ホテルニューオータニ二長岡
担当畜産アンバサダー
○小森有芽 ○糸川夏海 ○古河風葉
○宮田結衣

【東海近畿北陸3県ブロック】2019年2月6日、石川県金沢市ホテル金沢
担当畜産アンバサダー
○春日鈴音 ○加藤綾 ○石塚優花 ○竹内清花

【中国・四国ブロック】2018年11月22日、広島県広島市メルパルク広島
担当畜産アンバサダー
○川井つむぎ ○田中萌絵 ○天沼千華
○中西千里

【九州・沖縄ブロック】2019年2月1日、熊本県熊本市水前寺共済会館グレースシア
担当畜産アンバサダー
○三上日和 ○重富ひかる ○今林楓 ○戸塚蒼依

3 訪問先

ニュージーランドでお世話になった方々

Southland Girls High School (SGHS、サウスランド女子高等学校)

- 校長 Browning Yvonne (イボンス・ブラウニング)
- 留学生担当部長 Megan McKenzie (ミーガン・マッケンジー)
- ESOL (英語) 授業担当 Sharee Ineson (シャリー・イネセン)、Pauline Grant (ポウリーン・グラント)

今回のプロジェクトの拠点として、英語の授業や視察先の手配、生徒たちが滞在する寮の手配をして頂きました。サウスランド地域の酪農を中心とした畜産を学習するとともに、学生寮では現地学生との交流の機会を設けて頂きました。

Southern Institute of Technology (SIT)

- 国際部プログラム担当部長 Chami (チェミ)
- 同行者 Paul Watts (ポール・ワッツ)

SGHSと協力して、農業視察や畜産に関するエキスパートとの交流の機会や、食品実習などをアレンジして頂きました。

Invercargill (インバーカーギル) 商工会議所

- 会頭 Richard Hay (リチャード・ヘイ)

地域の各産業の歴史や構造に詳しく、商工会議所の立場から酪農を中心とする地域産業の振興に勤める立場ですべての視察先に同行し、生徒たちの色々な質問に答えて頂きました。

訪問先農家・施設

①女性酪農家:

Linnet Burns (リネット・バーンズ)

酪農仔牛生産農家 (仔牛を繁殖・育成して酪農家に提供)。新規就農。現在は同農場の共同経営者。

②チョコレート製造販売:

Seriously Good Chocolate Company

酪農製品のひとつであるチョコレートの製造工程を学ぶとともにチョコレートの整形加工を実習。

③市立公園Queens Park (クイーンズ公園):

管理担当Kirsty Davies、動物担当 Jessy

同市で最大の歴史的公園を案内してもらうとともに、公園の役割 (環境保護、地域動物の紹介と保護、教育活動) 等について学習。

④乳業会社 Fonterra社:

マネージャー Julie (ジュリー)、Mel Tembou (メル・テンボウ)

酪農家が株主となって作られた組合組織のNZ最大の乳業会社で、サウスランド地域で最大の乳製品加工場を訪問し、同社の説明、工場見学を実施。

⑤野菜生産農場 Southern Cross Produce:

社長 Matthew Malcom (マシュー・マルコム)、
息子 Jessy Malcom (ジェシー・マルコム)、
現場監督 Regan Queale (リーガン・ケアーレ)

同農場が生産するパーシナップ、にんじんなどの収穫風景、出荷場の見学。外国人労働者 (特にアジアから) の雇用現場、NZの労働力の現状などの説明。

⑥羊乳加工会社Blue River Dairy:販売担当部長

Gareth Lyness (ギャレス・リネス)

羊、山羊、牛の粉乳をアジア、中東をはじめとする世界に輸出。アジア人に多い牛乳を苦手とする子供用に開発した羊乳、山羊乳を粉乳として輸出を始め、当初はニッチマーケットであったものが大消費地である中国での販売が急激に伸びたことで業績を大幅にアップ。

⑦酪農家Thomas Family Farm:Katrina & James Thomas (カトリーナ & ジェームス・トーマス)

かつての羊農家から酪農家に転換した背景と現在の経営について説明。羊農家と結婚してから酪農業を始めるまでの苦労、妊娠や子育てなどの女性としての考えや経験を披露。

⑧羊 (毛肉) と肉牛農家:Jackie (ジャッキー)、Herbie (ハービー)

NZの典型的な羊と肉牛の農家で、日本ではほとんど経験できない羊の毛刈り、牧羊犬の操作を見学し、犬笛操作を体験。牧草が少ない時期の飼料の工夫 (Swedes = Rutavegas の利用) や農家夫人の役割などの説明。

⑨研究酪農場 Southern Dairy Hub:マネージャー Guy Michaels (ガイ・マイケルズ)

Trust (信託) により、各企業・団体・個人からの寄付によって作られたフォンテラ社系の酪農場で、一般的な酪農業を行うとともに、各種の試験研究を実施し、その結果を関係団体にフィードバックしている。ここではマネージャー以下すべてが従業員 (被雇用者)。

⑩若手酪農家: マネージャー Mo & Simon Topham (モー & サイモン・トッフアン)

一人の女性がいかにして現在の酪農経営に携わり、また、今後の目標に向けて夫婦が協力して計画を推し進めているかについて、すべての数字を披露して説明。実践によって裏付けられた知識と経験による確固たる考え方に参加者一同感銘。

⑪畜産機材製造販売会社 TRU-TEST: (飛行機キャンセルによりやむを得ず訪問を断念)

ゲストスピーカー

①元国会議員、農場オーナー:

Erik Roy (エリック・ロイ)

②銀行員 (農業経営コンサルタント):

Alexis Muir (アレクシス・ミュア)

通訳

Invercargill

- 佐々木みどり
- 福田竜也

4 写真でたどるプロジェクト

事前研修

- ① 全国から集って来た畜産を目指す女子高校生たちが、はじめて顔を合わせた。自己紹介もなんだか緊張している。
- ② このプロジェクトがどんなことをするのか、また、ニュージーランドでの研修はどんなものになるのか、オリエンテーションを受ける。
- ③ だんだん打ち解けて笑顔も見られるようになった。自分たちが何をすることになるのか、少しずつ分かってきた様子。



- ④ ニュージーランド大使館を訪問。Stephen PAYTON 大使とお会いた。Carolyn Guy 参事官より、ニュージーランドの概要について講義を受ける。
- ⑤ Carolyn Guy 参事官より、ニュージーランドの概要について講義を受ける。
- ⑥ ニュージーランドのアフタヌーンティーを経験。お味はいかがですか？
- ⑦ 農林水産省より、日本の酪農について、そして、女性の活躍についての講義を受ける。
- ⑧ グループに分かれて、ニュージーランドでの学習について検討。メンターの話からもたくさんの学びがあった。



- ⑨ グループで考えたことを発表。充実した学習ができそう！
- ⑩ 明治神宮を参拝。研修の成功を祈願して。



現地研修 Day1



- ① 成田空港に集合。これからニュージーランドへ移動。
- ② オークランド、クライストチャーチと乗り継いで。南島の中央を走る山脈。平野には牧草地がどこまでも広がっている。

現地研修 Day2



- ① Invercargill に到着。空港のゲートで記念撮影。バックのタワーは町のシンボルの貯水塔 (Water Tower)
- ② Southland Girls' High School 校長 Browning Yvonne さん (左) 留学生担当部長 Megan McKenzie さん (右)
- ③ 滞在期間中の生活の場となった寮 (Enwood House)。町から離れたところからやってくる生徒や、留学生たちが利用している。
- ④ 寮の食堂にて。大体おいしくいただきましたが、苦手なものもあった様子。日本との味の違いに戸惑いましたか？



現地研修 Day3



- ① 英語学習 ESOL を体験。ESOL は、英語を母国語としない人（マオリ族や外国人）がコミュニケーションで孤立しないように、しっかりと英語教育を行うことを目的としたプログラム。Sharee Ineson 先生のご指導。
- ② 明るく楽しい雰囲気、英語を学ぶことの楽しさを感じる。
- ③ ニュージーランドで最初の農場訪問。女性酪農家の Linnet Burns さんに、子牛の飼育について説明を受ける。
- ④ 個別に各自がインタビューを開始。緊張しながら、英語に耳を慣らしていく。
- ⑤ Linnet さんとの記念撮影。子牛の世話が女性の方が得意だという、自信たっぷりの話に感銘を受けた。



- ⑥ Southland Girls' High School にて、銀行員（農業経営コンサルタント）の Alexis Muir さんに話を聞く。経営者を側面的に支えるカッコいい女性との出会い。
- ⑦ 2 回目の ESOL。海外からの留学生たちと、課題に取り組む。
- ⑧ 先生から渡された課題を解く。



現地研修 Day4

- ① Southern Institute of Technology (SIT) にて。ここでは、各種技術的な学びができる。ここで、元国会議員で農場オーナーの Erik Roy さんから、講義を受ける。
- ② Erik さんと、引率者福山先生。
- ③ なお、Erik さんは、ご多忙中にもかかわらず、生徒たちの為に6日目に再度登場して下さいました。移動中も、生徒たちから質問をたくさん受ける。
- ④ チョコレート会社 Seriously Good Chocolate Company にて、チョコレートの製造を学ぶ。地域の名産物となっている。
- ⑤ チョコレート加工の実習。もちろん味見も。



現地研修 Day5

- ① 3 回目の ESOL。今回は、日本語を勉強している生徒たちと一緒に、理想の牧場を工作。生活に慣れて、少しずつ会話もできるようになってきた。
- ② 生徒たちの手先の器用さに皆ビックリ。
- ③ Invercargill 市内の中心部にある、Queens Park。そこで、飼育されている動物たちの管理について、Kirsty Davies さんと Jessy さんに話を聞く。生憎の雨の中ではあったが、珍しい動物たちも見ることができた。
- ④ 乳業会社 Fonterra 社を訪問。マネージャー Julie さん、Mel Tembou さんらに話を聞く。輸出を中心とした乳業のあり方をしっかり学んだ。
- ⑤ 残念ながら場内は撮影禁止ということで、オフィスの外の駐車場で記念撮影。安全ベストや安全ゴーグルなどの着用義務があり、安全に対する意識の高さがうかがえた。



現地研修 Day7



① Thomas Family Farm の酪農家 Katrina Thomas さんとご主人の James Thomas さんを訪問。日本では見かけない子牛の集団飼育と、哺乳用の機器であるカフェテリアを見る。
 ② Katrina さんから、子牛の飼育について話を聞く。敷料にはウッドチップが使われていた。



③ 羊（毛肉）と肉牛農家の Jackie さん、Herbie さんの農場へ。初めて間近で放牧されている羊たちと、牧羊犬の働きを見る。
 ④ 冬の期間放牧中の牛たちのエサとなるカブの一種 Swede。栽培地区を電柵で区切りながら、直に全草を摂食させる。
 ⑤ 放牧場をバギーで移動。広大な牧場を実感した。



⑥ 研究酪農場 Southern Dairy Hub のマネージャー、Guy Michaels さんに話を聞く。
 ⑦ ロータリーパーラーでの搾乳。このタイプのパーラーをはじめて目の当たりにした生徒もいた。



現地研修 Day6

① 野菜生産の Southern Cross Produce。出荷調整の大型機械が導入されて工場の様。パースニップという野菜は、あまり日本では知られておらず、みな興味津々。
 ② 社長の Matthew Malcom さんや、息子の Jessy さんから説明を聞く。写真は Jessy さん。有機農産物に対する考え方や農地の利用などについて多数の質問が出た。
 ③ 道中パースニップの収穫を見る事ができた。機械で一気に掘り出していく。



④ 羊乳生産・加工会社 Blue River Dairy の販売担当部長 Gareth Lyness さん。チーズの実食をさせて頂いた。
 ⑤ Halloumi Cheese を食す。食べやすいと好評だった。
 ⑥ アレルギーの出にくい羊乳を使った粉ミルク。特に中国で大きな需要があり、重要な輸出先となっているという。
 ⑦ バスでの移動中、放牧地がそこらじゅうで見られたが、鹿を飼育している牧場も多数あった。鹿肉はレストランで高級なステーキ料理などになる。
 ⑧ ニュージーランド南島最南端の Bluff で記念撮影。
 ⑨ Bluff は牡蠣で有名な場所。漁船が行き交っていた。



現地研修 Day8



- 1 若手酪農家で、農場のマネージャーである、Mo Topham さんご主人の Simon さん。農場のオーナーになることを夢に努力をされている。
- 2 農場経営について、具体的な経理データを基にご説明いただいた。経営マインドという観点があまりなかった生徒たちの目には、すらすらと数字を説明する Mo さんがとてもスマートに映ったようだ。
- 3 Mo さんが作ってくれた NZ で人気なおやつ、チーズロール。チーズを巻いたシンプルなトースト。帰国後に自分で作ってみた生徒もいる。
- 4 寮に戻る。視察やヒヤリングでずっと同行して下さった、Invercargill 商工会議所会頭の Richard Hay さん。気さくで色々な話をしてくれた。
- 5 研修も大詰め。寮に戻ってこれまで学んできたことをグループごとに取りまとめる。分からなかったことや知識が不足していることについてはメンターにサポートしてもらう。



- 1 早朝のフライトで Christchurch へ移動。期間中通訳をして下さった、佐々木みどりさん、福田竜也さんが見送りに来て下さった。
- 2 Christchurch 市内
- 3 2011 年の大地震により崩壊した Christchurch 市内の大聖堂。まだ町の中でところどころ爪痕は残る。
- 4 Christchurch の市内にて記念撮影。



現地研修 Day10

- 1 予定していた Christchurch から Auckland のフライトがキャンセルになり空港で足止め。でもスペースと時間を活かして帰国報告会の準備。
- 2 Auckland 到着は夜になった。残念ながら、Auckland で予定されていた調査はキャンセルとなった。

帰国報告会

- 1 帰国後、翌日の発表に向けてリハーサル。
- 2 発表は 5 人 4 グループに分かれて実施した。出席された方々からは、わずかな時間でよくここまでまとめたとお褒め頂いた。
- 3 学んだことをしっかりと自分のものにして、畜産アンバサダー活動へと思いを新たにしました。



畜産アンバサダー活動

20人の参加者は、それぞれ畜産の魅力と女性の活躍の重要性を訴える、畜産アンバサダーとして活動した。

事例1



【事例1】群馬県立勢多農林高等学校の天沼千華さん。2018年9月22日に、同校での研修報告会は初めての試みであったが、生徒は酪農大国での研修内容に興味を持ちとてもよい報告会となった。

【事例2】2018年9月29日、栃木県立那須拓陽高等学校の田中萌絵さん。全校生徒750人に対して発表。内容はプロジェクトの目的、事前研修から現地研修、地域酪農への提案とし、発表後に、酪農とちぎ顧問の齋藤達夫氏に発表の総括をしてもらった。当発表会には農業経営科だけでなく、食品化学科、生物工学科、食物文化科、普通科すべての生徒が参加し、畜産業に対する理解を広く理解してもらうことができた。

【事例3】2018年11月7日、北海道岩見沢農業高等学校の道端成美さんは、全校生徒793人と保護者らに対して発表した。ニュージーランド酪農の現状と日本国内の酪農の現状を比較し、気候風土の違いや、ニュージーランド酪農の糞尿処理問題にも触れ、牛の体格、乳量や飼育方法の違いについて説明した。担当教諭のコメントとして、全国の農業高校生との交流により、生徒の考える幅が広がったとのことだった。

【事例4】長野県南安曇農業高等学校における、古河風葉さんの畜産アンバサダー活動(2018年11月9日)。全校生徒330名に対して研修の報告という形で発表。今後の女性経営者としてのあり方や自分が影響を受けたことなど自信を持って発表した。ニュージーランドで憧れる酪農の姿を目に焼き付け、酪農の良さをPRできた。女性としての役割や特徴を伝える事が出来た。

【事例5】兵庫県立農業高等学校の竹内清花さん。2018年11月23日文化祭にて、酪農研究会の部活動の一環で、来場者や生徒たちに牛をリードしながらニュージーランドと日本の乳牛の違いを説明した。大勢の来場者の前で畜産や酪農の魅力、日本とニュージーランドとの違い、日本が現在抱えている問題など、多くのことを発表した。

2018年12月18日には、全校生徒840人の前で、校内海外研修報告会としてニュージーランドで学んだことを発表。ニュージーランドでの研修内容や現在の酪農の実態、日本の酪農との比較などを説明し、海外に興味・関心を持っている生徒も多く、充実した報告会となった。

【事例6】佐賀県立佐賀農業高等学校の重富ひかるさん。農業科学科の1年生から3年生119人に向けて発表(2019年2月5日)。報告会を聞き、参加生徒の中には海外研修に行ってみたくてと言っている生徒もいた。

事例2



事例3



事例4



事例5



事例6



国際化対応営農研究会での畜産アンバサダー活動

北海道・東北ブロック



2018年1月25日、山形県山形市村山総合支庁にて開催。
担当畜産アンバサダー
○道端成美
○江頭ひかる
○高橋六花
○森田七海

関東甲信静越ブロック



2018年10月25日、新潟県長岡市ホテルニューオータニ長岡にて開催。
担当畜産アンバサダー
○小森有芽
○糸川夏海
○古河風葉
○宮田結衣

東海近畿北陸3県ブロック



2019年2月6日、石川県金沢市ホテル金沢にて開催。
担当畜産アンバサダー
○春日鈴音
○加藤綾
○石塚優花
○竹内清花

中国・四国ブロック



2018年11月22日、広島県広島市メルパルク広島にて開催。
担当畜産アンバサダー
○川井つむぎ
○田中萌絵
○天沼千華
○中西千里

九州・沖縄ブロック



2019年2月1日、熊本県熊本市水前寺共済会館グレースシアにて開催。
担当畜産アンバサダー
○三上日和
○重富ひかる
○今林楓
○戸塚蒼依

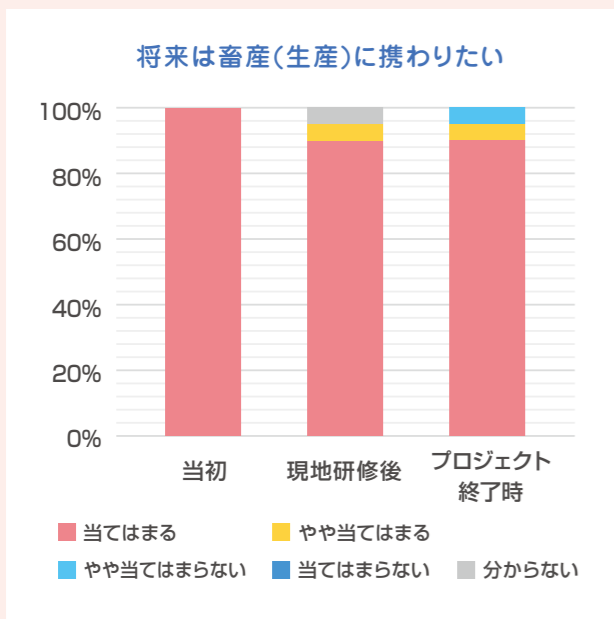
5 意識調査〈アンケートより〉

プロジェクトを通じて、参加者 20 人が、畜産業に関する考え方に関してどのように意識が変わるかアンケートによって調査しました。

参加者に対して本事業の主旨やプログラム内容等を説明した事前研修の当初（6月）、そして、ニュージーランドでの研修を終えた直後（8月）、最後に事業終了時（3月）に、筆記式のアンケートを取りました。設問について、当てはまる、やや当てはまる、やや当てはまらない、当てはまらない、分からない、のいずれかで答えて頂きました。

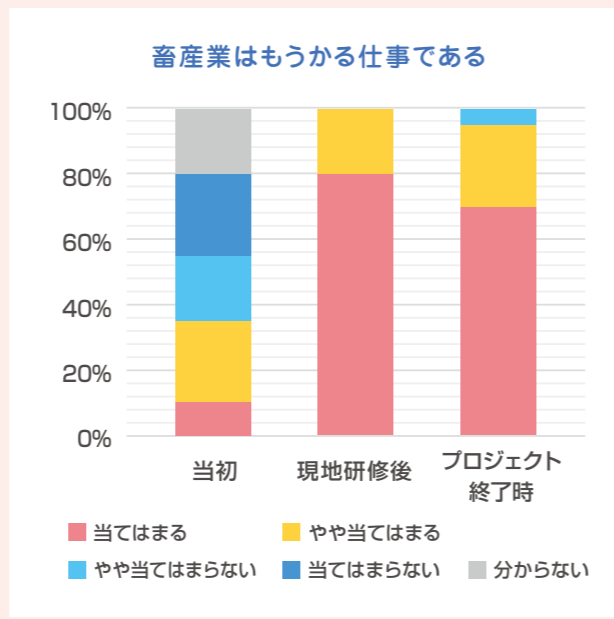
1 将来は畜産（生産）に携わりたい

畜産業への就農意識については、当初から高い就農意識があることが分かりました。これは、プロジェクト参加者の選抜に際して、各校から特に畜産業に対する興味が強い参加者が選出されてきていたことに関係があると考えられます。現地研修後には、やや迷いが生じている参加者がいたことがうかがえます。一つには、学校生活をする中で、卒業後の進路を具体的に考え、進路指導を受けていく中で思いが揺らいだ部分があった可能性があります。また、畜産アンバサダー活動等プロジェクトが終了した段階では、依然高い畜産業への就農意識があることと同時に、明確に畜産の生産現場には携わらない意向を示した参加者もありました。これは、生産法人等での仕事より、農業高校の先生になりたいという意思を示した参加者がいたためでした。



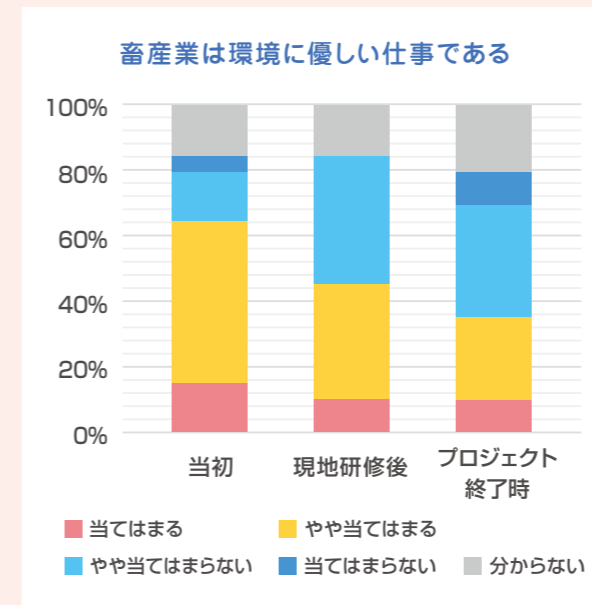
2 畜産業はもうかる仕事である

畜産業を生業とする際の魅力に関するアンケートでは、収入の良さに対する印象を尋ねました。当初、畜産業はもうかる職業とは考えられない参加者の割合が大多数でした。しかし、現地研修後では、ニュージーランドで農場主（オーナー）が大きな家に住み、裕福な暮らしをしていることを目の当たりにしたことや、生産現場を任されているマネージャークラスの従業員であっても、日本よりはるかに高い収入を得ていることを知り、畜産業自体が儲からない職業であるという認識は完全になくなりました。一方で、プロジェクト終了時には、日本の畜産現場の状況についてもう一度考えを改め、ややそう思わないという考えが再度現れるなど、現状と理想との間でさらに考えが構築されなおした様子が見られます。



3 畜産業は環境に優しい職業である

環境問題や持続可能な農業などは、畜産を学ぶ高校生たちにとって関心の高いテーマです。また、アニマルウェルフェア（家畜福祉）を学ぶ機会も増えてきている中で、従来の畜産業が取り組んできた取り巻く環境との関わりあいについて、当初畜産業が環境に対して優しいと考える参加者が半数以上を占めていましたが、現地研修、畜産アンバサダー活動と事業を進めていくにしたがい、そうではないと考える参加者の割合が増えていきました。一つには、ニュージーランドの放牧酪農を目の当たりにし、家畜排せつ物の河川汚染や家畜による草地の踏み荒らしの問題などを知ったことで、畜産による環境負荷が重要な課題であることを認識したことによります。また、それらを問題点として認識しながら日本の畜産の現状を考えた時、日本における畜産業の環境問題が存在することにも気が付いたと言えます。

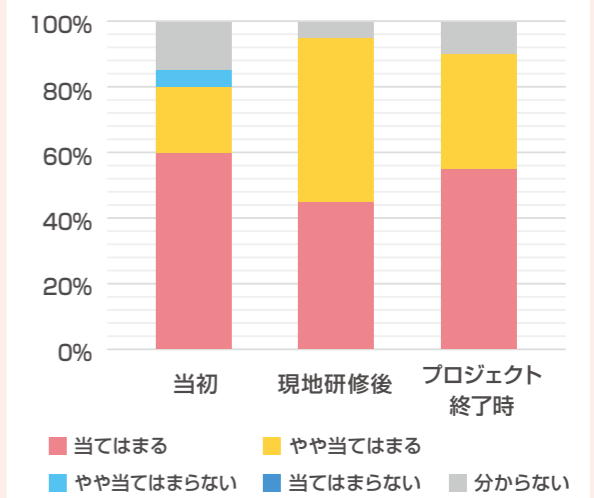


4 畜産業において6次産業化は有効な手段である

畜産農家が収入の複線化、付加価値等による農業収入の向上を目指すことについては、プロジェクトの全期間を通じて高い興味とポジティブな印象を持っていることが分かりました。ニュージーランドでは、羊の乳加工で乳児用の粉ミルクを生産している工場を見学し、その市場が急成長したという話を聞く中で、畜産生産以外にもビジネス展開ができる可能性が示

され、6次産業化に対する関心につながったと考えられます。一方で、一定数の参加者は6次産業化が畜産業において有効かどうか判断しかねているところもあり、学校の授業等で更なる学習が進められることで理解が深まると考えられます。

畜産業において6次産業化は有効な手段である

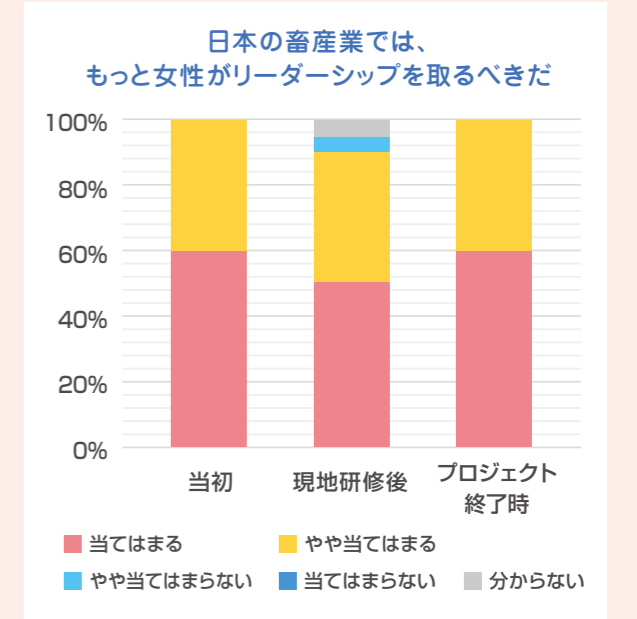


5 放牧は畜産作業の効率化に有効である

我が国で実際に放牧酪農を行っている農家が少なくないこと、また放牧を行えたとしても十分な広さの放牧地が確保できないことから、放牧が家畜たちに与える影響や畜産経営でどのような意味を持つのか実感できていない中で、畜舎作業で求められる多くの作業が楽になるという印象があり、当初は80%の参加者が、当てはまる、と回答していました。一方で、分からない、やや当てはまらないという回答もありました。ニュージーランドでの研修を通じて、放牧酪農がどのようなものなのかを知り、必ずしも作業が減るということではないことや、十分な知識と管理能力が求められることが分かったことで、当初より放牧が畜産作業の効率化に有効と考える割合が上がりながらも、やや当てはまるというトーンダウンした回答をした参加者がいました。

10 日本の畜産業では、もっと女性がリーダーシップを取るべきだ

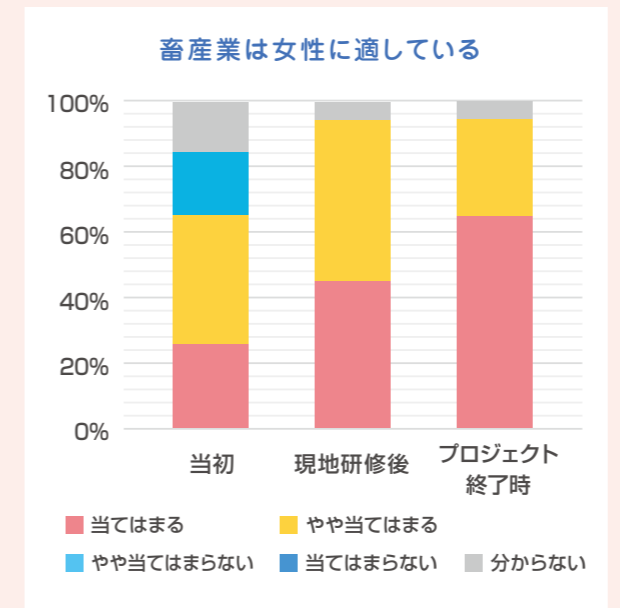
女性の活躍の促進が必要だという想いは、どの参加者にもありました。その中でも、女性リーダーとしての活躍を胸にイメージできるようになったのは、ニュージーランドで活躍している自立した女性就農者に出会ったことによると考えられます。必ずしも、すべての参加者が先頭に立ちリーダーシップを発揮するという意識ではない様子でしたが、女性だからという理由により、そのチャンスを得られないようなことでは、女性の活用のミスリードになりかねません。アンケートでは女性の活躍という意味の理解度の高まりを読み取ることはできませんが、各参加者と言葉を交わす中では、確実に、女性の主体性に関する意識に変化が起っていました。



11 日本の畜産物は世界中で価値を認められている

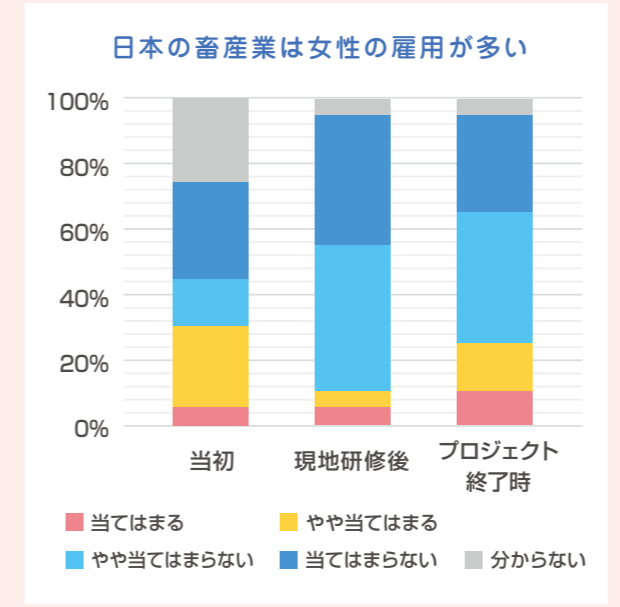
当初は、高校の授業の中である程度学習が進み、知識として日本の畜産物と世界の農産物との違いに関する認識があるかないかも影響して、分からない、の割合が多くなりました。ニュージーランドで様々な農産物、食品を目の当たりにし、実際に食べた経験から、味を通じて確実に日本の農産物の良さを実感しました。生乳の品質や衛生管理など、日本の優れた部分があることも再度確認しました。また一方で、国際

たびに、畜産業における女性の活躍を推進するべきと自分の言葉で発表してきたことから、その思いが強まったと考えられます。



9 日本の畜産業は女性の雇用が多い

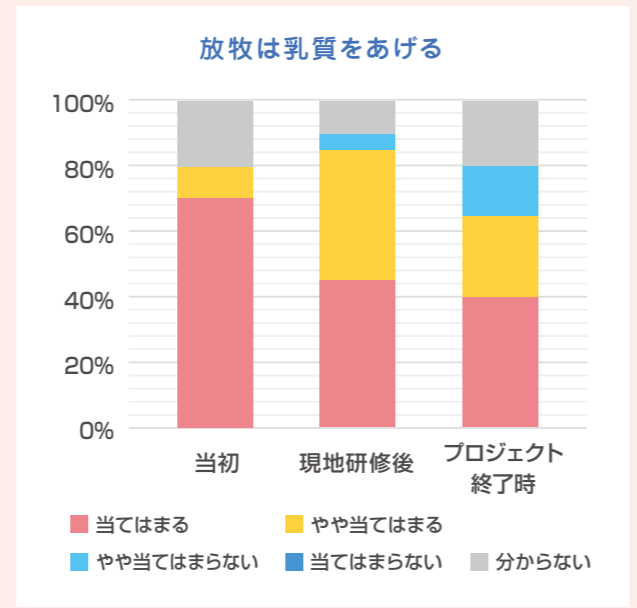
プロジェクトを通じて、ますます女性の活躍が必要だという意識が芽生えており、当初からもっと女性の雇用がしっかりとされていないという意識が強いグループでしたが、全期間を通じてその傾向に変化はありませんでした。



がら震えている様子を目の当たりにした参加者に同情心が生じた様子が見て取れました。さらに別の観点では、畜舎での管理の利点があることに気が付いたと考えられます。最終的には、放牧が最適とは言い切れないまでも、有効な手段であるという認識があります。

7 放牧は乳質を上げる

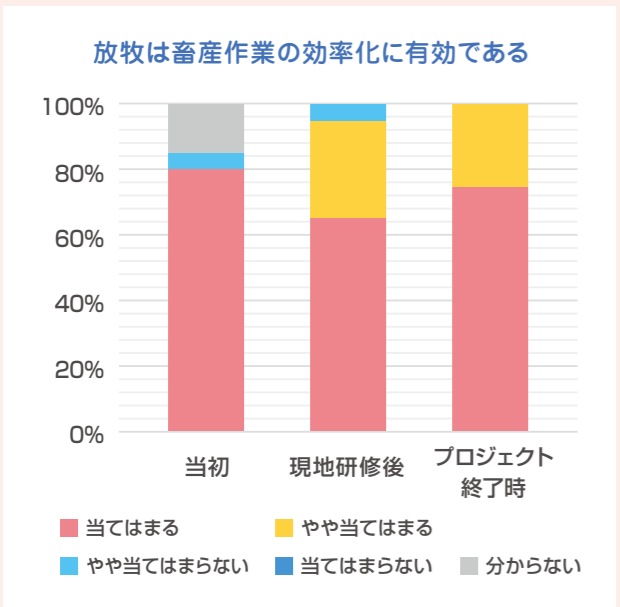
のびのびと牧草を食みながら健康的な乳の生産ができるという印象から、当初は80%の参加者が、当てはまる、または、やや当てはまると回答しました。ニュージーランドで、乳牛個体の乳量がそれほど重視されていないことや、乳価が乳固形分（MS）で計算されること知ると、生乳の重量（kg）で評価する日本とのギャップがあり、また、濃厚飼料を与えない飼育の乳質が必ずしも優位ではないのではないかとこの考えも生じました。



8 畜産業は女性に適している

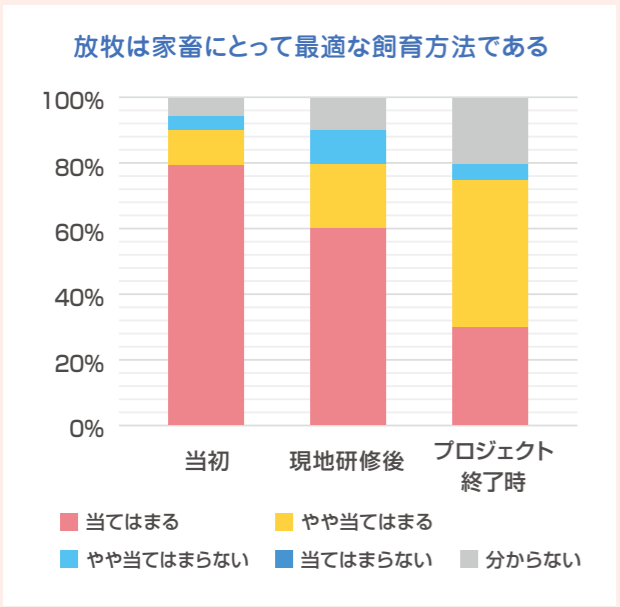
プロジェクトを通じて、畜産業では女性が活躍することの重要性を異口同音に言われてきたことが、このアンケートに如実に表れていると言えます。

特に、ニュージーランドで出会った農業現場の女性たちが、畜産（酪農）には女性に適した仕事があるとか、男性からも、女性の活躍が求められるとの説明を受けた影響が見られます。畜産アンバサダー活動でも、発表の



6 放牧は家畜にとって最適な飼育方法である

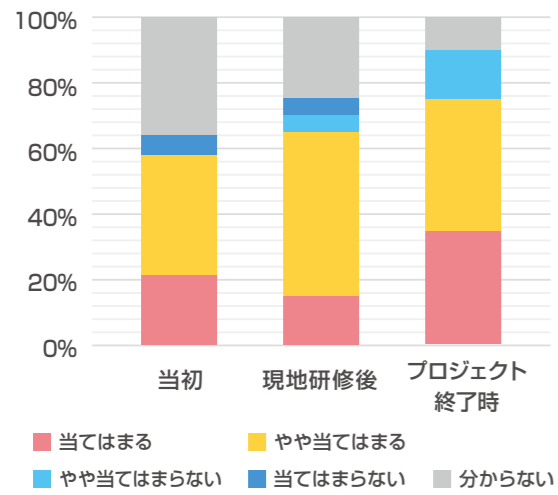
5での解答と同様、学習を進めていくにしたがい、放牧が必ずしも家畜にとって最も良い飼育方法とは言えないのではないかと考える参加者が増えました。日本においては、地域によって十分な土地を利用しての放牧ができないことや、夏季の気温の高さやアブなど害虫の影響もあることを加味すると、ニュージーランドと同じとはできないということが考えに浮かんでいるためです。



また、ニュージーランドの放牧現場では、ちょうど冬季の雨の中だったこともあり、仔牛がびしょ濡れになりな

価格とのギャップや食品安全基準、安定した生産力など、世界の中で評価されるポイントがさまざまあることについても理解を深め、各自に思うところで回答をしています。

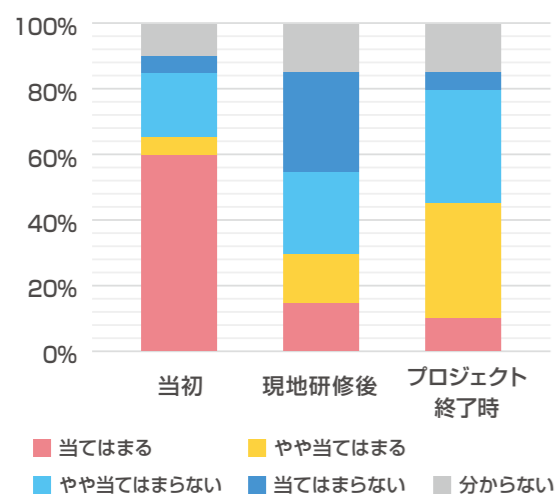
日本の畜産物は世界中で価値を認められている



12 日本農産物はもっと輸出されるべきだ

日本農産物の品質の良さを実感しているにもかかわらず、日本の農産物を海外へ輸出することについては、どちらかと言うとネガティブな変化がありました。ニュージーランドの乳価が、国際市場の中で大きく変動することや、日本との生産者価格の違いを知ったことで、単純に良いものがたくさん売れるというだけではビジネスにつながらないという現実を感じたことが一つの要因だろうと考えられます。

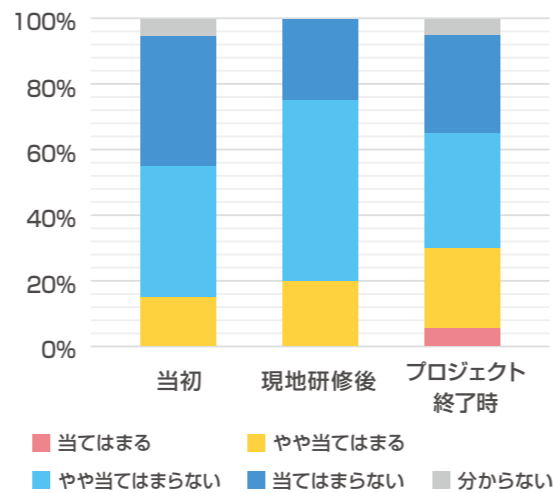
日本農産物はもっと輸出されるべきだ



13 自分は英語に自信がある

日本国内では実践的に英語を使う機会がないため、自信があると答える参加者は少いようです。実際に、現地研修に入って最初の段階ではまだ積極的に話しかけられない様子でしたが、日を追うごとにコミュニケーションを取ろうという意欲とともに、英語力の向上が見られました。全期間を通じてみると、現地研修での英語学習が、英語学習の意欲に影響を与えたと言えます。

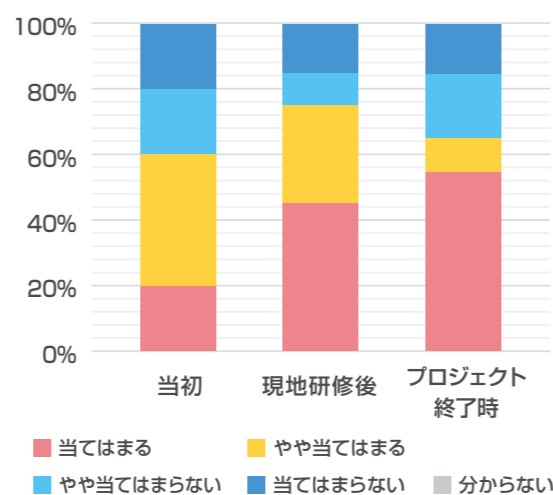
自分は英語に自信がある



14 自分は、英語で話をするのが好きだ

この項目では、当てはまる（暖色）と、当てはまらない（寒色）の割合があまり変化しませんでした。注目

自分は、英語で話をするのが好きだ



するべきは、当初と、プロジェクト終了時では、当てはまる、と、やや当てはまる、の比率が逆転していることです。これは、プロジェクトを通じて英語に対する興味が増したためと言えます。英語を得意とする（あるいは英会話が好きだという）参加者たちが、ニュージーランドで実践的な英会話の機会を得て、ますます英語に対し意欲的になったためです。一方で、英語に対して苦手意識や不安がある参加者たちのサポートについて、課題が残りました。

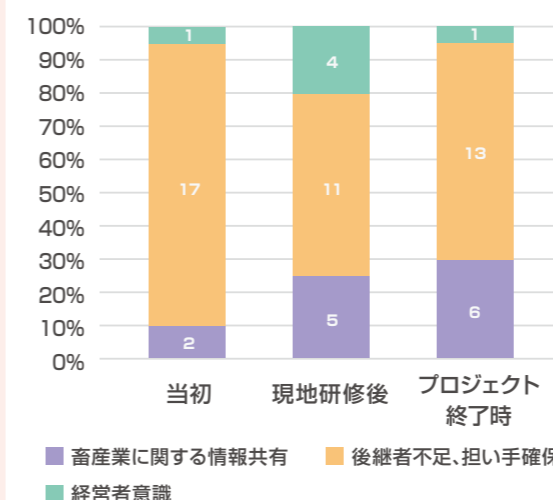
15 今、日本の畜産の一番の問題は何だと思いますか？

この問いに、自由記述式で答えてもらいました。色々な言葉で表現されていましたが、その中の特徴としてよく表れていることを3つに分類しました。1つが「畜産に関する情報共有」で、これは、消費者に対する情報が十分に行き届いていないことや、畜産の魅力が伝わっていないなどです。2つ目が「後継者不足・担い手不足」です。そして3つ目が「経営者意識」で、労働時間に関する考え方、効率的な作業やしかりとした経営意識が確立されていない等があります。

これらを3回のアンケートで見たときに、大きな差が現れました。

当初、本プロジェクトの主眼でもあり、一般に大きな問題として認識されている後継者不足や担い手不足が大きな割合を示していました。ところが、ニュージーランドでの研修を終えた後、他の問題点の割合

今、日本の畜産で、一番の問題は何だと思うか？



6 参加者の報告

引率者 熊本県立阿蘇中央高等学校 副校長 福山 裕士

1 はじめに

将来の女性農業者リーダーなりうる女子農業高校生20名に、酪農が盛んで女性就農者の活躍が目覚ましいニュージーランドの畜産を学ぶ事を目的とする。また、ニュージーランドは、女性の社会進出が盛んで、世界初の女性参政権を得た国であり、家庭を大切にしている価値観や女性の活躍を、同じ畜産に携わる女子高生が肌で感じ、日本での畜産アンバサダー活動に繋げる。参加者は、サウスランド・ガールズ・ハイスクール(SGHS)での英会話や訪問先での農業の実際を体感し成長し将来に繋がってもらいたい。

2 事前研修

- (1) 期日:平成30年6月14日(木)～16日(土)
- (2) 場所:オリンピック記念青少年総合センター
- (3) 内容

ア オリエンテーション、自己紹介、事業説明、日程説明

全国から選ばれた20名が初めて集い、緊張感漂う中事前研修が始まり本事業の詳細が少しずつ参加者へ浸透していった。一生懸命記録する姿や真剣なまなざしで説明を聞く姿に大きな期待を感じた。

イ ニュージーランド大使館訪問

ニュージーランド大使を表敬訪問し、国の概要、教育システム、農業や農業教育についての説明を頂いた。20名全員が目を見せ自分の将来の夢を描く様な高校生の姿を見ることができた。また、アフタヌーンティでの和やかな雰囲気の中でも積極的な質問をする事ができた。その後、農林水産省から日本の状況を聞いた後、メディアの質問対応にも堂々とした態度で臨んだ。

ウ 畜産アンバサダー活動

現地研修に参加するに当たっての班分けやテーマ設定等の検討を行い、帰国後の報告会や各地域でのアンバサダー活動についての準備を行った。班分けやテーマ設

定も手慣れたものでありスムーズに進行した。全国の農業高校の代表としての自覚や意欲を垣間見ることができた。

3 現地研修

- (1) 期日:平成30年8月18日(土)～28日(火)
- (2) 場所:ニュージーランド(インパーカーギル周辺)
- (3) 内容

ア Southland Girls High School 入寮

Mrs.Browning Yvonne 校長から歓迎の挨拶を頂き、留学生担当部長の Megan McKenzie から寮(Enwood Hostel)での生活について説明を受けた。ニュージーランドに到着して初めて聞く英語での会話に臆することなく緊張感を持って聞き入る姿によいよ始まる研修の意義をしっかりとらえているようであった。その後の、各部屋移動や寮生活についても心配する事を感じさせない20名であった。

イ 英会話(ESOL)

ニュージーランド到着後、2日目の研修がスタートした。移動の疲れから体調を崩す生徒がいなかったが、女子高校生のパワーがその心配を払拭してくれた。授業担当の Sharee Ineson、Pauline Grant 先生方の指導の下、SGHSの生徒との交流を笑顔で取り組む姿に高校生の適応力と柔軟さを感じた。最初は、会話も少なかったが時間と共に自信を持って会話に取り組んでいた。

ウ Burns Farm 訪問

酪農新規就農で子牛生産農家として活躍されている女性酪農家 Linnet Burns さんから女性の立場からの経営ビジョン等を学んだ。気温1度のなかではあったが、子牛を見た瞬間から、牛が大好きな集団へと変わり、輝いた目で子牛を見つめ熱心に質問を行っていた。Linnet Burns さんもそのことを感じとったのか、とても熱く語られたのが印象的であった。

エ Alexis Muir さんとの意見交換

ゲストスピーカーに銀行員であり農業経営コンサルタントの Alexis Muir さんとニュージーランドの若手農業者クラブの活動についての意見交換を行った。より詳しい経営内容について説明を頂いたので、質問もおのずと資金や経営についての素朴な疑問から高度な内容となった。日本との違いや牧場経営についてさらに詳しく知ることになったことは参加している高校生には価値あるものとなった。

オ Southern Institute of Technology(SIT) 訪問

国際部プログラム担当部長 Chami さんから今回のレクチャーされた内容について説明された。ここでは、ゲストスピーカーとして元国会議員であり農場オーナーの Erik Roy さんからニュージーランドの農業政策や経営について詳しい説明があった。とても気さくな対応に生徒たちもリラックスした雰囲気の中で多くの質問を行った。中には、積極的な質問ができない者も見られたが、意欲的に質問する人の姿を見て意識が変化していくのが感じられた。

カ Seriously Good Chocolate Company 訪問

酪農製品の一つであるチョコレートの製造工程を見学し整形加工を体験した。殆どが畜産を専攻しており、牛乳生産は経験しているが、食品加工は初めての生徒もおり貴重な経験となった。

キ Queens Park 見学

歴史ある広大な市立公園で、役割である環境保護、地域動物保護、教育活動等について学んだ。管理担当者の Kirsty Davies さんと動物担当の Jessy さんから説明を頂いた。本来、動物好きの20名なので触れたくて仕方ない気持ちを抑え、多くの質問を行い公園の役割等を学ぶことができた。

ク 乳業会社 Fonterra 社見学

酪農家が株主となって作られた組合組織でニュージーランドの中でもサウスランド地域最大の乳業会社である。マネジャーの Julie さん、Mel Tembou さんに世界6位の出荷額を誇る会社概要についての説明と工場案内が行われた。生徒たちも数字の大きさに戸惑いながらもしっかりと質問し成長の跡が見られた。

ケ Southern Cross Produce 訪問

野菜生産農場でパーシナップ、ニンジンなどの出荷場を見学し、社長の Matthew Malcom さん、息子の Jessy Malcom さん、現場監督の Regan Queale さんにより説明を頂いた。特に、アジアからの外国人労働者の雇用現場からニュージーランドの雇用の現状を実際に聞くことができた。女性労働者も男性と同じく雇用されていることや夫婦で職種を違えて労働する現状も知る機会となった。

コ 洋乳加工会社 Blue River Dairy 訪問

販売担当部長の Gareth Lyness さんから羊、山羊、牛の粉乳をアジア、中東をはじめとする世界に輸出している状況を聞いた。アジア人に多い牛乳を苦手とする子供用に開発したものを粉乳として輸出を始められ、中国での販売で業績が伸びた事を説明された。生徒たちも慣れない洋乳チーズに興味を持ち質問を行っていた。

サ Bluff Hill 見学

最南端の町で現在自分たちが活動している場所の認識を深めた。観光地でもあり、久しぶりにリラックスしてはしゃぐ姿が見られ、研修の合間の息抜きとなった。各グループごとに写真撮影するなど仲良くしている姿を見て、孤立することもなく活動を続けている事が確認できた。

シ Thomas Family Farm 訪問

酪農家 Katrina & James Thomas さんから羊農家から酪農家に転換した背景と現在の経営について説明を頂いた。自身が羊農家に嫁いで酪農を始めるまでの苦労、妊娠や子育てなどの女性としての経験などを聞き、女性としての活発な質問も相次ぎ研修が充実していることを伺わせた。

ス 羊と肉牛農家訪問

羊の羊毛と肉及び肉牛生産農場で Jackie さんと Herbie さんから経営の状況と管理の方法など実際に聞くことができた。牧羊犬を犬笛を使って羊管理する様子や飼料を工夫していることを詳しく説明頂いた。直接、羊の毛刈りや投薬の方法を体験してもらい、普段経験することがない事ができた。また、子羊に触れたときは本来の高校生の姿に戻っており、全員が優しい視線を送っていることにこの研修の素晴らしさを感じているようであった。

セ 研究酪農場 Southern Dairy Hub 訪問

マネージャーの Guy Michaels さんから説明して頂いた。ここはマネージャー以外全てが従業員であり、Trust(信託)により各企業、団体、個人からの寄付によって作られたフォンテラ社系の酪農場で、酪農のほか各種の試験研究を実施し結果を関係団体にフィードバックしている。大きなロータリーパーラーでの搾乳風景と放牧場を見ることができたことは貴重な経験であった。また、メディアの取材もあり英会話が堪能な2名が取材を受けることとなった。全員が英会話の重要性を知るいい機会となった。

ソ Mo & Simon Tophan Dairy Farm 訪問

女性として酪農経営に携わるためのヒントを頂いた訪問であった。夫婦で協力して経営を推し進めているかを訪問した生徒たちに丁寧に説明を頂いた。年齢も若く生徒たちには身近に感じられたのか、直接疑問に感じていたことを聞いたことが自信に繋がったようである。特に、実践によって裏付けられた知識及び経験による自信に満ちあふれた信念に生徒たちも引きつけられた。

4 帰国成果報告会

- (1) 期日：平成 30 年 8 月 29 日（水）
- (2) 場所：オリンピック記念青少年総合センター
- (3) 内容

ア 公益社団法人国際農業者交流協会 会長 野中 和雄 様

イ 成果報告

- (ア) ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）
発表者：春日鈴音、川井つむぎ、宮田結衣、古河風葉、小森宥芽
- (イ) 家畜や自然のための畜産（アニマルウェルフェア）
発表者：道端成美、高橋六花、竹内清花、田中萌絵、江頭ひかる
- (ウ) 畜産の担い手（農家を育む政策）
発表者：天沼千華、糸川夏海、加藤綾、森田七海、中西千里
- (エ) 女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）
発表者：重富ひかる、戸塚蒼依、三上日和、石塚優花、今林楓

ウ 質疑応答

エ 総括

熊本県立阿蘇中央高等学校 副校長 福山 裕士

現地研修から移動も含め時間のない中、各班員が協力して成し遂げた成果報告会であった。全国から集まった20名が各々のテーマやキーワードに沿って学んできた資料を出し合い、誰ともなくリーダーシップをとり班をまとめていった行動力、チーム力には感心するばかりである。プレゼンテーションの構成や発表準備と分担、パワーポイント操作等それぞれの持てる能力を最大限に発揮したことが成果となった。未来の畜産女子がアンバサダーとして活躍していくには必要となる力ではないだろうか。今後の活躍に期待したい。

5 畜産アンバサダー活動

(1) 北海道・東北ブロック

開催地：山形県山形市「山形県村山総合支庁」・「山形国際ホテル」
期 日：平成31年1月25日（金）
事務局：山形県国際農友会

(2) 関東甲信静越ブロック

開催地：新潟県長岡市「ホテルニューオータニ長岡」
期 日：平成30年10月25日（木）
事務局：一般社団法人新潟県国際農業交流協会

(3) 東海・近畿・北陸3県ブロック

開催地：石川県金沢市「ホテル金沢」
期 日：平成31年2月6日（水）
事務局：石川県国際農業者交流協会

(4) 中国・四国ブロック

開催地：広島県広島市「メルパルク広島」
期 日：平成30年11月22日（木）
事務局：広島県国際農友会

(5) 九州・沖縄ブロック

開催地：熊本県熊本市「水前寺共済会館グレースシア」
期 日：平成31年2月1日（金）
事務局：熊本県国際農友会

6 総括

- (1) 全国から選ばれた農業関係畜産女子高校生20名

は、個々の意識も高く事前研修から現地研修を体調を崩すことなく、お互い協力し合い本事業の目的を達成した。

- (2) 自らのテーマについて、研修から専門的な知識を深く掘り下げ、成果報告会へ繋げることができた。
- (3) 英会話学習により英会話力が向上し現地研修の成果を上げることができた。
- (4) 寮生活を経験することで SGHC の生徒や職員との交流が充実し、ニュージーランドの生活や文化を深く学ぶことができた。
- (5) 成果報告会の発表を達成しアンバサダー活動へ繋げることができた。

7 期待すること

- (1) 各県農業関係高校を代表して活動したことを各県農業高校生に伝えて欲しい。
- (2) 今回の活動で得たことを率先して実践し、リーダーシップのとれる生徒になって欲しい。
- (3) 未来の畜産女子アンバサダーとして、ニュージーランドで学んだことを女性酪農関係者や地域の方々に伝えて欲しい。

8 結び

JRA、JAEC関係者の皆様には、このような素晴らしい事業を全国の畜産関係農業高校へ提供頂きありがとうございました。畜産に携わる教員として、今後も未来の畜産女子育成に向けた本事業を継続頂きますようお願い申し上げます。生徒たちも出発前からは見違えるような成長を見せてくれました。このことは、この事業の貴重な体験が大きな影響を与えており、未来の畜産女子の活躍に繋がるものと確信しております。これからも全国の農業高校への応援をよろしくお願い申し上げます。



1 テーマ

家畜や自然のための畜産 (Animal Welfare)

2 キーワード

放牧

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①家畜や自然のための畜産というテーマで放牧について最初に考えたとき、放牧は自然にも畜産にもメリットが大きいと捉えていた。放牧地として耕作放棄地を利用すれば、痩せた土地が家畜糞尿に栄養分によって肥える。豊富な運動量と粗飼料給与で肢蹄や心肺機能などを強化し、家畜の身体の健康を保つ上に、太陽光を浴びるとセロトニンという心のバランスを保つホルモンが分泌されることから心の健康も保つことが出来ると考えていた。

②NZに行き放牧には、多くのデメリットもあることがわかった。特に土壌中硝酸態窒素含量の増加が深刻な問題だ。家畜糞尿が放牧地に大量還元されると付近を流れる川や土壌を汚染し、サケ・マス類に影響を及ぼす、土地生産性を低下させる、土壌に過剰に含まれた硝酸態窒素を牧草が吸収し、食べた牛が硝酸塩中毒を発症するなどの問題を引き起こす。放牧で家畜福祉を追求するには土壌中硝酸態窒素含量を増加・流出させない方法を明示する必要がある。



③利用できる土地の狭い日本では放牧圧がNZより高くなることは避けられないので、上記の問題はより深刻になると考えられる。このことから、土壌中窒素含量を増加・流出させない研究に尽力すること、少ない頭数での放牧を行うこと、放牧以外の方法でテーマの内容を追求することの3つの選択肢を考えた。どれにも理由はあるが、他国は家畜福祉の向上を志す中、つなぎ飼いを貫くことが彼らの目にどう映るのかと考えると放牧を行うことがこの先の日本において妥当な選択だと思う。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

ニュージーランドの農業に携わっている人はとても輝いているように見えた。日本では農業といえば3Kのイメージが強く、女性が新規就農したいとならば、周囲からの反対されることがほとんどな上に、農業は男の仕事であるという概念が根強く残っており、女性農業従事者は男性に比べてまだまだ農業をやりにくい環境にあると言える。さらに若者は農業に従事することを嫌がり都会に流れている傾向にある。農場の後継者はその家の長男という半ば義務のような考えが一般的だが、本当に農業に携わりたい非農家は一から農場を立ち上げなければならないので新規参入が難しい環境にある。対してニュージーランドでは農業を国としてとても大切にしており、社会からの偏見もほとんどない。女性は男性と対等な立ち位置にあり、仕事や会議などの面でも引け目を感じることなく男性と同じように従事することができていた。農場の後継者は長男という概念にとらわれない上に、他人であることも多い。そのため意志の強い人が新規就農していることほとんどで、実際に私たちが予期せぬ質問をしても数字まで具体的に出してすぐに回答してくれたのが印象に残っている。農業に従事している人が自分の仕事に自信を持っているのがニュージーランドの農業だと思った。今後の日本はニュージーランドのように農業従事者がもっと輝けるような環境を作りつつ、日本の農業の良い点は今まで以上に伸ばしていけたら良いと思う。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして家畜福祉の大切さを広めていきたい。今後グローバル化がより一層進められていく中で家畜福祉の改善は日本の畜産を守るために重要になってくると考える。海外では家畜福祉が見直され、様々な法律が制定されたり、GAP認証が求められていたり食に関する考え方が大きく変わってきている。そんな中日本の家畜福祉が進歩しなければ外国人に受け入れられず、海外へ輸出すること自体難しくなってくると思う。しかし日本では一般の消費者と生産者、所謂畜産の現場に関わる人が切り離されているように感じる。一般の消費者は日本で畜産がどのように行われているのか深く知らない人がほとんどだ。私は安いからという理由だけで購入するのではなく、普段食べている食料がどのように生産されているのかを知ってから購入して欲しい。消費者が家畜福祉を考慮した食品を求めることがなければ畜産農家もコストのかかる家畜福祉を考慮した生産方法に変更することは難しいと思うからだ。私が畜産アンバサダーとして家畜福祉の大切さについて広めることで、もっと沢山の一般の人に家畜福祉について知ってもらい畜産農家の方が家畜福祉の向上携わりやすくなれば良いと思う。

6 自分の夢、これからやりたい事

私は将来、産業動物における動物福祉の向上に貢献する獣医師になりたい。ニュージーランドに行く前は漠然とした目標だったが、今は明確な目標となった。私は大学に進学後、ニュージーランドでも課題となっていた放牧による土壌の硝酸態窒素含量の問題を解決するために研究がしたいと考えている。そして、家畜福祉の向上に獣医師として付与するとともに日本の畜産を支えていく者の一人になりたい。

7 畜産を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

畜産業は日本では疎遠されがちな職業ですが、命と向き合い、人間の生活の根本を支えるとても魅力に溢れた産業だと思います。自分の進む道、学んでいることに誇りを持って未来の畜産業を支える一員となれるよう頑張ってください。



1 テーマ

家畜や自然のための畜産 (Animal Welfare)

2 キーワード

有機農業

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

家畜や自然のための畜産というテーマで有機農業をキーワードとして考えたとき、日本では有機農業についてあまり認知されていないと思いました。それに比べ、ニュージーランドの生産者は有機農業について高い意識で取り組んでおり、消費者も食品を選択する際に重要視していると感じました。それは、実際にニュージーランドを訪問し、いろいろな方からお話を伺う中で「有機農業」について考えている人がとても多かったからです。これからの畜産業は、自然を破壊することなく常に環境を考え配慮した取り組みをしていく必要があると考えました。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

ニュージーランドを訪問し、最初に感じたことは、ニュージーランドの畜産業に関わる人は環境保全を意識した方がとても多いということでした。その理由として、環境対策と畜産経営を別に考えず、一体化したものとして考えていたからです。環境対策をすることにより経営向上に繋がっていくということをニュージーランドの生産者は教えてくれました。

ニュージーランドでは、畜産業を営みながら環境のことをしっかり考え、対策をとっていることに感動しました。特に印象に残ったことは、放牧酪農において放牧強度を規制することで環境へ負荷がかからないようにしていることでした。日本でも環境対策は考えられていますが、ニュージーランドの畜産農家ほどは意識されていないと思います。ニュージーランドの畜産業に携わる人たちの環境に対する考えがとても素晴らしいと思いました。そ

の考えを日本でも広めていきたいです。

また、研修を行う前は、放牧は家畜にも自然にもよいと思っていましたが、実際に行ってみて良いことばかりではなく、糞尿処理の問題があるということがわかりました。土地をたくさん必要として、日本で放牧を増やしていくことは難しいと思いました。

ニュージーランドでは、牛や羊以外に鹿も放牧して飼育していることに驚きました。また、羊のミルクパウダーなどとても珍しいものを生産し、新たな分野に取り組んでいることが良いなと思いました。チャレンジ精神を大切にして畜産業に取り組むことも必要だと思いました。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

私は、畜産アンバサダーとして、日本ではあまり知られていないニュージーランド畜産の取り組みを広めていきたいです。

具体的には、畜産を行っていく上で環境対策をすることは経営向上につながっていくということです。日本でも環境対策は考えられていると思いますが、畜産業をしていく上でついてくる重荷のようになってきていると思います。しかし、畜産業をしていく中で環境について常に考えて問題になる前に対処していくことで、環境および家畜に良く、経営にプラスされるというサイクルが生まれると思います。環境対策を行うことが経営向上につながっていくという考えを持ち、このようなサイクルを作ることができれば、持続的に畜産業を行っていけると思います。

また、元国会議員で農場のオーナーであるエリック・ロイさんは「農業をするにあたって女性は必要不可欠」と言っていました。女性の物事の考え方や家畜に対する接し方は畜産業の発展に重要だということでした。このような考えを日本に広め、女性が積極的に畜産業に携われるように発信していきたいです。

畜産業はニュージーランドにおいてあこがれの職業であり、収入も多く、社会における位置づけはとても高いと感じました。そして、身近に家畜がいて放牧地の風景が消費者の生活の一部となっていました。農業に携わる女性は、妊娠や子育てをしてもできる範囲で仕事に関わり、出来ない分野は酪農ヘルパーやベビーシッターを雇うという余裕のある経営をしていました。

私が考える、女性が活躍できる理想の畜産業は、性別に関係なく対等に意見を言い合い、その意見が反映されるような仕事だと思います。日本において、多くの女性が畜産業に興味を持ち、一人でも多くの方が携われるように畜産の魅力を発信していきます。

6 自分の夢、これからやりたい事

私の夢は、高校卒業後、帯広畜産大学に進学し、日本における持続可能な畜産業の在り方を学び、両親が新規就農で作上げた農場を継ぐことです。将来は、今回のニュージーランド研修で学んだことを糧に、化石燃料や農業に依存せず自然と共生する持続可能な農業を目指していきたいです。また、地産地消を経営の柱に据え、消費者一人一人とコミュニケーションがとれる地域に根差した農業を営んでいきたいです。

7 畜産業を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

畜産業は生き物相手で、一日でも気を休めることはできません。家畜を食糧となるまで育てることは大変ですが、消費者の方々の「おいしい」という喜びに接した時、とてもやりがいを感じることができる仕事です。畜産業を盛り上げるため、いろいろな農家の取り組みを学んだり、海外研修など視察したりして視野を広げていきましょう。そして、これからの畜産の担い手として一緒に頑張っていきましょう!



1 テーマ

家畜や自然のための畜産 (Animal Welfare)

2 キーワード

放牧以外の家畜福祉

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①日本のような放牧の難しい小規模な農家でも牛舎の設備を整えることや家畜への接し方によってアニマルウェルフェアに基づいた家畜の過ごしやすい環境づくりをすることができるのではないかと考えた。そして、放牧の盛んなニュージーランドでも放牧以外に家畜のためになにかしていることがあるのではないかと考え、知りたいと思ったことをきっかけに放牧以外の家畜福祉というテーマにした。

②NZは小規模な農家は見られず放牧がメインだったが、どの農家の仔牛の牛舎もおがくずによる肺炎が問題視されているらしく敷料は肺炎予防としてウッドチップが使われていた。ウッドチップはクッション性や吸水性もよく、動きの多い仔牛の安全に配慮されていた。また、仔牛たちの牛舎は走り回れるくらいに広かったため牛たちがのびのびとしていた。ドアや壁で四方を囲んでいないため風通しが良くにおいが気にならず清潔感があつた。NZではキウイクロスが多く見られた。



③繋ぎ牛舎がメインにある日本にウッドチップの利用を反映するにはコストがとてもかかるうえ環境保全のことを考えたらあまり良いとは思えないので、稲作が盛んなことを利用して稲わらなどを利用することが最善ではないかと考えた。牛舎の壁を取り除くことは降雪が多く気温が低くなりすぎるため北海道ではあまりに難しいと思った。代わりに大型扇風機や窓を増やすことで換気をよくすることはできるのではないかと考えた。また、日本でもキウイクロスのように気候や牛舎に合わせた品種改良を行って牛は過ごしやすく、人は作業しやすくしてストレスを軽減することができるのではないかと考えた。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

NZでは牛に尽くしたらその分返してくれるという考え方をしている人がいた。その考え方は牛のためを考えて作業することになるので、アニマルウェルフェア的にもよく、毎日朝早くから夜遅くまで作業する必要がある酪農家にとって働く活力にもなると思うのでとてもいい考え方だと思った。また、キウイクロスのように乳牛の品種改良を日本でも行うことができれば、地域によって気温や環境が大きく違う日本でも牛たちが快適に過ごすことができ、その上作業効率が上がるのではないかと考えた。NZでは除角前に麻酔をするという法律が適用されることが決まっていると聞いていたが、日本では家畜のための法律がほとんど無いようなので、日本でも家畜のために法律化されてほしいと思った。

NZの経営者の人たちはみんなが環境保全のためにできることなどを意識していたことがわかった。水質汚染や土壌の窒素含有量についての問題、その他環境への影響が大きい酪農をこれからもしていくには、日本の経営者たちも意識して改善策や自分たちにできることを考えていく必要があると思った。

一番印象的だったのはやっぱり土地の広さと空気の綺麗さだった。元々の土地を広げることはできないけれど、今ある土地で豊かな畜産をするためにはやっぱりまず考え方を考えることだろうと思った。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

尽くした分返ってくるというのは牛だけじゃなくて他の家畜動物や人間相手にも言えることだと思うので、横のつながりが大切な酪農家さんはもちろん、日本のあらゆる人たちにも広めて共有していきたい。帰国後に以前から行っていた学校牛舎のアニマルウェルフェア認証試験の準備のため帯広畜産大学に訪問した際、品種改良によって牛が生活しやすくなったり作業効率が上がってアニマルウェルフェアに繋がるのではないかと聞いた。その時にいい考えだと言ってもらえたので、土地が増やせないのであれば牛舎や牛を変える方法を考えて研究し、放牧によるアニマルウェルフェアだけではないということ、日本でもできるアニマルウェルフェアがあるということを発信していきたいと思う。

また、今回研修に参加したことによって視野が広がったり、学んだことが本当はたくさんあったので、これから畜産に関わる人たちや他の高校生にも体験してもらいたいのとこういった活動を多くの人に体験してもらうための情報を共有・拡散していきたいと思った。他にも、牛などの畜産動物の可愛さや魅力を子どもや大人、都会に住む人から田舎に住んでるけどあまり関わりのない人など、たくさんの人たちに知ってもらいたいのと、SNSの活用や農場見学などを通して広めていきたい。そして、酪農は牛乳を飲んでくれる人がいるから成り立つこと、牛乳が飲めるものになるまで酪農家さんたちが試行錯誤して牛を育てていることを、牛・牛乳が大好きな一人として発信していきたいと思った。

6 自分の夢、これからやりたい事

NZの女性経営者たちはみんな酪農をすることにも自分自身にも自信と責任感を持って働いていたのでかっこよかった。私もこれからの学校生活や行事、仕事をする上で彼女たちのように自信と責任を持って一生懸命に頑張りたい。将来なりたい職業はまだ明確に決まっていなくても、畜産に関わる仕事をしたいので今は帯広畜産大学に進学することを目標に勉強に励みたい。将来は畜産動物の魅力がたくさん発信して畜産を支える手伝いがしたい。

7 畜産を目指す仲間たち、 先輩たちにメッセージ

私は知識も経験も少ないのでとても不安でしたが皆さんの考えや夢などを聞いて、ほんとうに大切な経験になりました。全国から集まった皆さんとは普通ならきっと会うこともできなかったのをこれを機にまた皆さんと集まって話したいです。皆さんを見習って頑張ります。



1 テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2 キーワード

外国人労働力

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

① NZ は酪農が盛んだというイメージが元々ありました。畜産の担い手という面で考えると、そのイメージから連想されるのは、必然的に労働力に関しては悩んでいないのでは?という考えでした。NZ は日本の 4 分の 3 の面積に対し、人口は約 470 万人程です。人よりも家畜が多い国で、労働力を確保出来ているということは外国人を多く雇っているのではないかと考えました。しかし外国人を雇う上で、私は仕事内容はどのようなものなのか?と疑問に持ちました。だから、この疑問と共にどのようにして労働力を確保しているのか調べることにしました。

②実際に調べてみると、外国人労働力の利用は当たり前のようにありました。ですが、その裏には利用しやすくする制度や指標がありました。NZ には酪農の全てが書かれた、酪農のバイブルのような物があります。その中には、人を雇う上で 5 つのチェック項目や、面接方法などが記載されています。NZ の酪農家はこれを見て、採用するかを決めるそうで、1 つでも当てはまらないと雇わないそうです。これがあることにより、国籍に関わらず自分が求める良い人材を雇う事が出来ていました。

③日本でも労働力確保のために、外国人労働力を利用すべきだと思います。日本で利用するには、先程も言ったように仕事内容に対するイメージや言葉の壁があり、すぐには難しいかもしれません。ですが、農業労働力支援協議会で外国人材受け入れ制度を農業も対象にし、利用しやすい環境作りを進めています。国も外国人を雇い労働力を確保しようとし、農業の発展のために力を入れています。だから農家も、外国人を雇うことに一歩引くの

ではなく、積極的に取り入れ、労働力を確保していくべきだと思います。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

NZ の農業を見て、特に印象深く学んだ事は 3 つあります。1 つ目は、無駄を取り除いた経営です。どちらかと言えば、一石二鳥という言葉が当てはまっているかもしれません。各農家が自分の経営している農場で、この無駄を省き何か出来ないか?や、これを他に利用するためには?と考えていました。上手なビジネスの仕方というのは、このような経営の仕方をいうのだと思いました。2 つ目は、意識の高さです。今回視察させて頂いた農家全てで、意識が高いと感じました。現状に満足することなく、常に上を目指し経営をしていました。「今ある土地を広げて、もっともっと大きくしていきたい!」や、「将来はこういう風にしたい!」などと、必ず目標を持っていました。私も将来このように、常に目標を持ちそれに向かって努力する人になりたいです。3 つ目は、若手を育てる事に積極的である事です。自分の経営が良ければいいという考えではなく、積極的に若手を育てていました。シェアミルカー制度など、様々なチャンス (opportunity) を与え、農業に参入しやすくしていました。誰かに任せるとはせず、自分も若手を育てていく一員となり活動するという面が見られました。実際に NZ で研修をしてみて、とても感心することばかりでした。将来私も、周りの人に感心されるような経営者になりたいです。



養蜂農家と契約し、放牧地に蜂箱を設置。
放牧地ではクローバーが育てられていたため蜂はクローバーの花を移り渡っていた。
これにより、クローバーは蜂によって受粉され、結果的に良い牧草となっていた。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

まずは、酪農とはどのようなものなのかを広めていきたいです。酪農家になることが夢だと言うと、「え、酪農?」といった反応が返ってきます。それだけ、身近なものではなく、あまり良いイメージがないんだと思いました。努力した分だけ結果となって現れ、自分に正直になり働くことが出来る職業である。私はこのような魅力を感じ、誇らしい職業だと思っています。だから、まずは酪農という職業を広め、興味を持ってほしいです。興味を持つことにより、自分で調べたり牧場を訪れるようになる。そうすると結果的に、将来酪農を目指すきっかけの場も増え、酪農従事者も増えていくと考えられます。そしてもう 1 つ、広めなければいけないのは、若手が参入しやすい制度です。せっかく酪農を目指したい人がたくさんいても、制度がきちんとしていないと参入しにくく、結局若者の従事者は増えていきません。国はこのことを問題視していますが、実際に参入しやすい制度が無いので、日本独自の制度を考えてほしいです。そして農家も、国任せではなく行動に移すことが大事だと思います。若者が近くに就農したら、周りでサポートしてあげて良い学びの場を作ってほしいです。そうすると、更なる発展が見込めると思います。他に女性が畜産で活躍するためには、女性に意見を求めるのがベストだと思います。女性でも力のある人ない人様々で、出来る仕事も変わってきます。女はこれをやれという決めつけではなく、その人にはどんな作業があるか考えた作業内容をしてもらうことがいいと思います。女性だからというのではなく、男性も女性も良い意味で対等な立場で働ける事が理想となると思います。



Mrs. Mo (女性酪農家 27 歳)
コンサルタントとして働いた後、酪農家となる。夫婦間で意見を出し合い、より良い経営を目指していた。自分の経営している牧場の全てが頭に入っていて、「もっと牧場を大きくしたい!」という強い思いを持っていた。そして、日々挑戦・努力をし経営をしていた。

6 自分の夢、これからやりたい事

私は将来、酪農家を目指します。今回 NZ に行き、努力をする事の大切さを教えられました。様々なことに挑戦をし、常に上を目指して歩める酪農家になりたいです。それに加え、もう 1 つやりたい事があります。それは世界の国々の酪農も学び、日本だけに留まらず世界にも酪農を広める事です。私は、その地域の文化や風土によって異なる酪農の魅力に魅せられました。たくさんの方に、酪農は実はこんな面もあったり、やりがいがある楽しく誇りある職業だと知ってほしいです。

7 畜産を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

私はとても、酪農に魅力を感じている。牛が可愛く、酪農家がカッコよく見える。もっと酪農が魅力ある職業であることを知って欲しい! 若者が活発的に活動し、日本の将来の畜産を明るくものとしよう! 酪農が身近な職業になるように、頑張るぞー! オー!



今回プロジェクトに参加した 20 名
「牛が好き!!」「もっと酪農を盛んにしたい!」という思いを持った女子高校生が集まった。NZ で日本とは違った酪農について学び、より一層酪農の魅力に引き込まれた。この学び事を通し精一杯努力していきます!

川井 つむぎ



1 テーマ

ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）

2 キーワード

コストについて

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）でコストについて考えたとき最初は、プレゼンテーションなどまとめるときに簡単にまとめられそうという理由で選んだため、餌代や乳価、一年間の利益など、日本とニュージーランドの酪農を比べたときに図やグラフでまとめやすく、分かりやすい情報だけ聞ければ良いと思っていました。そのため、テーマとキーワードについて考えても結局それについての考え方ではなく、まとめ方のほうによってしまっていました。

②しかし実際にニュージーランドで研修をしていくうちにちゃんと考えるようになっていきました。まず私はビジネスの意味を分かっていませんでした。ビジネスというのは牛にかかるお金だけ考えるだけでは成り立たないということでした。例えば、従業員やヘルパーにはらう人件費も含めなければいけないし、一から畜産業のオーナーをするというのは牛や牛舎、放牧をするための場所も何もないということなので、費用がかかるばかりで赤字から始まるということです。そんなことも私は実際、経験した方からお話を聞くまで考えることはありませんでした。

③日本の畜産（酪農）には、ニュージーランドの酪農が身近に感じている人達が日本より多い所。そして、人口に比べて面積が広いことから一つ一つの農地が広いなどの国独自の考え方や環境を反映させることはできないけれど、ビジネスの一般的な考え方はじめ方などは、反映させることはできると考えました。例えば、日本では一般的に酪農家の子供は後を継ぐ、嫁入りした人は手伝いをするといった家族経営が多いです。しかし、ニュージー

ランドでは、継ぐという考え方や手伝うといった考えよりも酪農をやりたい人を雇い最終的にオーナーの権利を譲ったり、シェアミルクカー制度をしたりなどのビジネス的な考え方が一般的です。その為、日本で問題視されている後継者不足、高齢化、方策放棄地は現状では聞いたことがないです。なかなか放牧などの管理の仕方を反映させることは難しいとは思いますが、このようなビジネス的な考え方なら反映できると考えました。

4 ニュージーランドの農業を
目の当たりにして考えたこと

ニュージーランドでは、使っていない土地を農地にすることで方策放棄地をなくしていたり、新しくチャレンジしたりする人が多いこと、またその制度が整っていること。そしてなにより、牛の事だけ大事にするのではなく、働く自分たちのことも同じくらい大事に考え、経営していることがわかりました。日本では牛と接した時間が大事と考えられています。しかしニュージーランドでは、牛と接している時間と家族と過ごしたり趣味を楽しんだりプライベートの時間は同じくらい大事だと考えている農家さんが多くいました。その為、経産牛が乳量を出すピークと牧草のよく伸びるピークの時期を合わせることで本来牧草の手入れを行う時間をほかの作業を行ったり、IoT・機械化を進め、例えば耳標と一緒にICチップをつけたりなどを行うことで作業が簡略化され、人手があまりかからなくなることで人件費が安く抑えられたりすることがわかりました。また、除角の時には麻酔をかけることが来年には法律で定められることが決まったことで牛に痛みやストレスを軽減させること。それと同時に除角する側もしやすいので、効率化とアニマルウェルフェアがきちんと考えられているのだなと思いました。

また、日本でホルスタインと和牛の掛け合わせのF1がいるようにニュージーランドでは乳量が出るホルスタインと乳質の良いジャージーの掛け合わせ、キウイクロスという品種が主流でミルクパウダー・バターなどの加工品にされることが多いことからそれに合った品種改良がされていることがわかりました。

5 畜産業を目指す仲間たち、
後輩たちにメッセージ

私の家は非農家で、新規で酪農をするなら一から始めるしかないと思っていました。

でも、シェアミルクカー制度や、従業員からオーナーになれるところもあるということを知りました。研修中に「酪農場と一緒に経営しよう」という、夢を持ちました。もし、その四人の夢は叶わなくても私は必ず牛と関わる仕事につきます。

今回、研修を通してさらに牛が好きになりました。皆さんも機会があればチャレンジしてみてください。私がたくさんのを学び夢が変わったように何か変わると思っています。





1 テーマ

ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）

2 キーワード

IoT / 機械・施設

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①我が国とニュージーランドにおける酪農及び畜産業の就業人口を比較するとニュージーランドの就業者は多く、酪農及び畜産業の社会的にも求められている。また、飼養管理の特徴として放牧があげられ、我が国と飼養管理体制や機械化及び経営規模に関して大きな違いがある。我が国の酪農及び畜産業の向上のためには、ビジネスや就業者の問題を解決しなくてはならない。そのため、テーマに「ビジネスとしての畜産」とした。

②見学をした農家は、子牛の健康管理・搾乳量など全てにおいてコンピュータ管理をしていた。我が国で最も拘束時間が長い搾乳については、ニュージーランドでは「ロータリーパーラー」を用い労働力の効率化を図っていた。また、特徴的な仔牛の「カフェテリア」飼養管理では、「ICチップ」を利用し給餌量や健康状態など個体管理をデータ化することで、計画的な飼養管理および家畜の生理生態や風土に合わせた飼養管理方法を確認していた。

③酪農先進国で機械化されている飼養管理やデータ化されているものは、我が国の酪農及び畜産業において全て取り入れるべきであると考えていたが、見学をしたことで先進国と同様にするのはなく、我が国に適合する飼養管理に改善することが重要であると感じた。特に、家畜の個体管理において病歴・治療暦・乳量、血統等の管理をコンピュータで行い、電子データを容易に活用できる「ICチップ」の活用は取り入れるべきである。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

インバーカーギルの農村部を見学すると見渡す限り牧草地が広がっており、ヒツジやウシが放牧されていた。日本で家畜がおかれている環境とは違い、広大な放牧地に家畜が伸び伸びと草を食べる光景を目の当たりにし、本物の放牧を見た驚きと興奮を隠せなかったことを覚えている。日本でも放牧をすればと簡単に考えていたことを反省した。ニュージーランドの搾乳は、ロータリーパーラーを利用している。飼養管理頭数の規模から日本とは比較にならない。しかも、生乳の含有量を向上させるための品種改良をしたキウイクロスのため飼養管理も容易であるとわかった。また、生乳の表示が日本とは異なり、ミルクソリットで表示されるため収入が得やすい品種であることも理解できた。このように、ニュージーランドは、自国の酪農と向き合うことで、家畜の生理生態を理解するだけでなく、風土に適した品種を改良することで、生産品向上をするための改革を進めた。更に、飼養管理の1つとしての放牧と考えるのではなく、環境に負荷を与えない配慮が多くあった。例えば、堆肥の散布時期や河川近くでの放牧を避けるなど1人ひとりが環境を考えた管理をしていた。私は、良いことは全て取り入れれば良いと考え研修に参加をしていた。しかし、参加したことでこの考えは間違えであったと痛感した。私は、その地域に適した酪農をすることが大切であることに気づいた。気候や飼養管理だけでなく環境を考えた酪農をすることが産業人として最も素晴らしいことだと思った。



5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

私は、畜産アンバサダーとして、酪農先進国のニュージーランドで研修した飼養管理と我が国の飼養管理の違いを説明し我が国の酪農に興味関心をもって欲しいと考える。特にニュージーランドでは、家畜のICチップを活用した個体管理や機械化された搾乳、そしてデータ化された情報を活用した飼養管理方法を目の当たりにした。この管理方法は、日本に普及させる意義があると思った。その理由は、職業として一次産業を選択する人口が減少している。しかも、酪農従事者も高齢化が進んでいる。この問題を打開するためにも、飼養管理をデータ化することで技術の伝承を担えるのではないかと考える。更に、導入時のメリットやデメリットを説明することで酪農を楽農としていきたい。また、生産品の安全性や含有する脂肪含有量の見直し等、家畜の品種改良にも取り組むことの大切さも説明することで我が国の酪農を発展させたい。最も重要なことは、家畜を管理することだ。管理環境の変化に大きく生産量が変化する乳牛は、人間の子育てと同じように感じた。特に、ニュージーランドでは男女差別が無く、「女性無しで酪農を営むのは難しい」と女性を歓迎していた。しかし、日本では、男女の格差があると思う。だからこそ「女性がする飼養管理」を取り入れていきたい。ウシは、表現方法に声を持っている。ある女性がウシの鳴き声で異変を感じることができると教えてくれた。女性が本能で感じることや女性だからこそできる決め細やか作業などを取り入れた管理方法を普及することで、女性が活躍できる酪農を確立することがこれからの酪農業に必要なことだと思える。

6 自分の夢、これからやりたい事

私の夢は、我が家の酪農を発展させることです。その為には、今回研修した内容を取り入れることはもちろんですが、酪農を専門に学習できる酪農学園大学に進学し、より多くの知識や経験を身につけたいと考えています。そして、我が家の酪農を受け継ぐだけでなく、地域の酪農家の方と情報交換をすることで、互いの酪農を発展させる組織作りをしたいと考えています。研修の仲間を通し、仲間の大切さを痛感しました。同じ目標をもつ仲間は心強いものです。また、アンバサダーの経験を活かし、知見を広めより良い酪農家になるために頑張ります。

7 畜産業を目指す仲間たち、 先輩たちにメッセージ

世界人口が増加している現在、食糧生産としての畜産業は重要です。特に、畜産業は、1人で行う作業にも限界があります。だからこそ、コミュニケーションを図りながら協力体制の確立が必要不可欠だと思います。とても大変な仕事ですが、どの仕事よりもやりがいがあり、命のありがたさが分かる仕事だと考えています。これからの畜産業と一緒に盛り上げていきましょう。





1 テーマ

家畜や自然のための畜産 (Animal Welfare)

2 キーワード

牛の体つきと健康

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

家畜と自然のための畜産というテーマで、自然のための畜産と家畜のための畜産を考えたとき、最初は家畜のためを思っている酪農家が多いと思っていたこと、家畜に割く時間が多いと思っていたこと、環境対策がしっかりしていると思っていたこと、放牧は牛にとってとてもよいものだと思っていたことだ。

実際にニュージーランドで研修をして、環境のことについては法律やルールが決まっていなくても、畜産業をしていく上で、いつでもひとりひとりが環境について考え配慮していく必要があると考えた。日本では放牧で家畜福祉は難しく、土壌の問題は日本でも問題になる。案として、土地が少しでもあるならば少しの頭数で、日ごとに外に出して、身体機能を上げ、ストレスを減らし、乳量をあげられるのではないかと考えた。

自然のための畜産に関しては、畜産業に関わる一人一人が環境を考え配慮した取り組みをしていく必要がある。未利用資源の活用や有機農業などの、ほかに依存せず自然や身のまわりにあるもので循環していくやり方があり、そういった自然と共存していく持続可能な農業を反映させたい。家畜のための畜産に関しては、手を加えるほど牛が返してくれるという考えをどの農家さんでもこの考えをもってほしいと思った。ニュージーランドでは、休む時間もしっかりしていて、人間も身体的に働きやすい環境で、それにより家畜に対して優しくいられることがわかり、日本でも労働時間については改善していかなければならない。畜産業界のイメージを変えることが必要になると考えた。土壌に関しては、日本でも放牧をするにあたり窒素の問題については考えていかなければならない。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

私がニュージーランドの農業を目の当たりにして考えたことは、女性の活躍についてだ。今の日本の酪農の問題点に人手不足がある。酪農に限らず、農業全般で人手不足は問題になっている。酪農に関してはその対策として、放牧を利用した省力的な酪農をすることによって、女性でも働きやすい場を作ることが大切になると考えた。ニュージーランドに行って、実際に放牧を学んで、土壌の問題であったり牛の個体管理について学んだが、放牧の一番の良さは、何より人手が少なくそれに加えて女性でもできることが増えることだ。若手酪農家の Mo&Simon Topham のもとを訪れたとき、Moさんの牛に対する思いや経営管理を聞き、とても憧れを抱き、夫婦が協力して、男女平等に経営している仕組みは日本でも広めていきたい。今の日本でも、農林水産省で農業女子プロジェクトと呼ばれている、若手女性の就農者を増加させることを目的としたプロジェクトができています。女性の活躍は、今後の日本を発展させると考えた。



5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、女性の活躍を広めていきたい。それは、経営をすることだけでなく、女性がいかに畜産に関わって、畜産という仕事が好きかを広めていきたい。まだ今の日本の畜産は男性主体の仕事場で、大変・つらそうなどの考えがあるからそれを変えたいと

思った。今回の研修で、20名の畜産女子を見てわかったのは、全員が畜産という仕事を好きであることだ。誰一人として、畜産に関わっていることを苦だと思っていない。ニュージーランドで見た女性の畜産に対する熱い思いを今度は私たちが日本で伝えていきたい。

女性の活躍を広めることができると、日本の畜産はもっと活気づく。特に、放牧を利用した省力的な酪農に関しては、人手不足を解消するだけでなく、労働時間の削減もでき、女性が酪農に参入しやすくなると考えた。実際に私が、SNS 上で牛に関しての活動を載せると、多くの人から「牛がかわいい」「畜産ってすごい」と言われる。なにより、女性がここまでできることに驚かれることが多くなった。女性が畜産に今よりもっと参入することで、日本中の畜産に対するイメージが変わる。

女性が活躍する理想の畜産業とは、女性でも働きやすく、持続的に農業を続けたいと思うことができる環境が必要になる。今、日本で人手不足が問題になっている理由として、途中でやめてしまう人がいることだ。畜産がすきという人が多い中、実際は大変な面のほうが多い。そこを変えることができると、もっとこれからの日本の酪農は発展していき、女性が活躍できるようになる。

6 自分の夢、これからやりたい事

私はこれから、人工授精師の資格を取得したいと考えている。酪農女性として、多くの酪農家の方との会話を大切にし、酪農家の方に信頼され、技術者として活躍していきたい。そして、技術者として活躍していく中で、酪農を仕事にしていきたい高校生などにアドバイスなどもできる人になりたい。そして、ゆくゆくは私が育った栃木県の酪農に貢献する。私が酪農を引っ張っていくんだという強い気持ちをもって、これからもずっと牛とともに頑張っていきたい。

7 畜産業を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

女性だから無理、力がないから。でも、動物が好き、牛が好き。という人がいたら、女性でもできることはたくさんあることを知ってほしいです。私自身もいろいろな工夫と努力を重ねてきました。好きならばできます。畜産に関わることをあきらめずに、頑張ってください。





1 テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2 キーワード

ニュージーランドで酪農家になるきっかけと年齢層

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①畜産の担い手というテーマで、日本の担い手不足の問題について考えた時、最初は酪農へのイメージがよくないために将来酪農家を志す若者が少ないのかと考えていました。酪農大国ニュージーランドでは担い手不足の問題はどうやって改善しているのかを知りたいと思いました。そして、ニュージーランドと日本の違いを見つけようと思いました。その違いの中で日本の酪農担い手不足の改善につながることはないのかを考えながら研修に参加しました。

②ニュージーランドの酪農＝儲かる仕事というイメージがあるということがわかりました。さらにニュージーランドは酪農などの畜産業が身近にあるため、酪農家になることへの抵抗や周囲からの反対がないのだと思いました。日本は3Kなどのマイナスイメージが酪農に定着しています。なので、酪農家がイメージアップのために新しいことへチャレンジしたらマイナスイメージを払拭できるのではないかと思います。

③ニュージーランドで実際に畜産業に携わっている方や、牧場のマネジメントをしている方にお話を聞きました。そのお話の中で、新しいことにチャレンジできる人がオーナーとして成功することができるということを聞きました。なので、担い手不足の問題がある日本も、新しいことにチャレンジすべきだと思います。例えば酪農体験や、中高生のインターンシップを積極的に受け入れるなど、少しでも酪農を身近に感じ興味を持ってもらうことが大切だと思います。受け入れる側も初めは抵抗があると思いますが、若者の新しい考えや提案を受け入れることで、よりよい牧場になると考えます。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

私がこの研修で1番感じたことは、日本とニュージーランドの酪農業への考え方（イメージ）の違いです。ニュージーランドは酪農収入が良く、儲かる職業として酪農をやりたいとプラスのイメージが多いです。これから先もニュージーランドでは酪農家が減ることはないという聞いて驚きました。一方日本は、きつい、汚い、危険、儲からない、酪農ってどんな仕事なんだろう？などマイナスイメージの方が多いです。そのため、後継者不足や離農につながってしまっています。それ以外にも、牛の飼いや考え方、気候や土地など、日本とニュージーランドは180度違うということをととても感じました。まず日本は酪農がどんな仕事なのかを知ってもらうことが必要だと思いました。そして何より、ニュージーランドは女性の活躍している姿が印象に残りました。女性の柔軟で新しい発想や、活躍できる場がしっかりあるからこそ、ニュージーランドの畜産はどんどん発展しているのだと感じました。日本も女性が活躍できてこそ、酪農が良い方向へ発展していくでしょう。



5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

1番は酪農の魅力伝えていきたいです。家が酪農をやっていない非農家の人は、牛乳がどういう過程を経て食卓に届くのかもわからないと思います。なので、まずは酪農を体験してもらいたいです。私の家は非農家で、高校入学前は搾乳も全くやったことがなく、知識もほとんどなかったです。ですが高校での当番実習や酪農家でのインターンシップを通して、牛と酪農が大好きになりました。こうして、実際に身を以て体験することで、牛や酪農の魅力に触れられると思います。まずは興味を持ってもらう為にも、日本中に酪農教育ファームを広めていきたいです。酪農教育ファームの存在を知ってもらうことによって、興味がある方が気軽に体験できると思います。なので、私はこのような体験できる牧場があるということ伝えていきたいです。私たちの食卓に畜産物が並ぶことは決して当たり前ではありません。生産者がいるからこそ私たちは畜産物を口にすることができます。生産者や家畜達の為にも「いただきます」「ごちそうさまでした」の気持ちを大切にしてほしいです。

6 自分の夢、これからやりたい事

私はこの研修で、放牧について学びたいと思っていました。実際にニュージーランドの放牧酪農を見て、雨の降る中や地面がぐちゃぐちゃの中でも放牧されている牛たちは本当に幸せなのか疑問に思いました。私はずっと牛たちに1番良い飼いは放牧だと思っていました。自分の住んでいる群馬県は土地が少なく放牧することが難しいです。なので、放牧以外にも本当に牛たちが幸せに過ごせる飼いや探したいです。専門学校卒業後は全国各地の牧場で研修をして、たくさんの知識を身につけたいです。畜産アンバサダーとして、同世代の人に酪農の魅力伝えていきたいです。そして、日本も女性が活躍できる酪農にする為に、私が先頭に立って引っ張っていきたいです。

7 畜産業を目指す仲間たち、 先輩たちにメッセージ

将来畜産業を目指す皆さん！一緒にこれからの日本の畜産業を盛り上げていきましょう！消費者の方々には日本のおいしくて品質の良い素晴らしい畜産物を届けましょう！



糸川 夏海



1 テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2 キーワード

日本の酪農の現状を知ったうえでNZの酪農の現状を知って、後継者がいない場合は、どうするのか

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

私は、酪農の後継者不足問題は、早急に取り組むべき重要な問題だと考えた。事前研修に参加した際、私の住む地域の酪農の後継者問題が、日本全国どの地域でも問題となっていることがわかった。そして私は、日本の後継者問題を解決したいと思い、NZでは後継者不足の問題はあるのか、その解決に向けてどんな対策、政策をしているのか知りたいと思った。NZに行く前のイメージは、国全体が酪農という仕事を支え、酪農に対して意欲的な人がほとんどだというイメージが強かった。また、後継者不足の問題も少なく、若い人も、子供もやりたいと思っている人が多いと思っていた。

しかし実際に研修し、たくさんの人の話を聞いていると、NZにも日本と同じような問題があるということがわかった。例えば、若い人は酪農をやりたいと思わず、都会に行きたいという考えが多いこと。以前は、酪農家になりたい人が少なかったこと、酪農に対してのイメージがあまり良くなかったことなど、日本での課題は、日本に限らずどこでも問題になっていることがわかった。

日本もNZも共通した問題をかかえているが、対策には大きな違いがあった。NZでは1つ1つの課題に対して大きく問題視し、一刻も早く解決できるように対策を実施していた。例えば後継者問題についてあげると、酪農についてよく考えてくれるように酪農家が自ら酪農について講演したり、小中高校で酪農に関する学習する授業を行うなどの試みが行われている。もちろん身近に牧場があり、酪農業が身近な存在であることも、国民が酪農業の問題を重要視している理由の一つだと思う。

私は、この方法は日本でも活用できると思った。もっと酪農家が酪農のことをもっと発信し、酪農業について

学ぶ“ファーム教育”を活性化させたいのではないかと思った。小学生向けのファーム教育だけでなく、中学校進学の時、高校進学の時、大学進学の時など進路を考える時期に行うことで酪農に興味を示す人は増えるのではないかと思った。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

NZの農業（畜産業）を見て一番感じたのは、大きいということ。土地の面積はもちろん、日本と違って一つ一つの牧場が大きいと思った。しかし何よりも感銘を受けたのは、NZの人の芯の強さ、自信、気持ちの強さであった。女性であろうが、小柄であろうが、そんなものは関係なくて、女性にしかできないこと、男性にしかできないこと、女性にもできることを一人一人がよく考えて仕事をしていると思った。女性だから...と弱気にならず、しっかりと自信をもって仕事をしていると思った。

日本では、周りからの意見や考えに押されてしまい、本来自分がやりたいことができないときが多いと思う。だから、一人一人がもっと強い意志をもって、「絶対に実現させる!」という気持ちで取り組むことが大切だと思う。また、NZの人たちは、自分たちで新しいことに取り組んで、チャレンジして、畜産業を発展させてきた。日本人はどちらかというと、昔ながらの考えや伝統的な方法に縛られすぎて、新しいことに挑戦するというに抵抗があると思う。しかしそれではいくらたっても、畜産業な発展にはつながらないと思う。

だから、今回NZに行って学んだ新しいこと、方法を多



自分の牧場の説明をするKatrinaさん

くの人に広めることが大切だ感じた。日本の酪農がNZの酪農から学べることはたくさんある。それらを一人でも多くの酪農家に挑戦、実践してほしいと思う。NZから取り入れた技術は、日本流にアレンジすることで、より良い方法が見つかるはずである。そしてそれらを広めることにより日本全体で畜産業の発展につながると思う。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

まず一つ目は、酪農についてたくさんの人に知ってもらえるように、酪農についてたくさん講話をして広めていきたい。NZで一番大切なのは酪農についてたくさん広めることだということが分かった。だから、小学生や中学生、高校生など幅広い世代に酪農のことを知ってもらえるようにたくさん話をしていきたい。今回の研修で学んだことはもちろん、日本の酪農の現状や、仕組、仕事の内容など、現場のことをよりリアルに伝えたいと思った。

二つ目は、酪農が与えるイメージの大切さを広めたい。日本で酪農と聞くと一番最初に3Kが浮かんでくる人が多いと思う。汚い、きつい、危険...それ以外にも臭い、儲からない、借金が多い、など悪いイメージが多い。だから、酪農が与えるイメージを少しずついいものに変えていくことが必要だと感じた。例えば、少しでも畜舎をきれいに保つために敷料を工夫したり、糞尿の処理は自然環境に配慮する方法をとるなど、酪農の欠点を少しずつ減らしていくことが必要だと思う。

しかし、これらを一軒や二軒の数の酪農家がやってもほとんど意味がない。酪農業、畜産業全体で取り組んでいくことが重要で、酪農業、畜産業の発展には必要不可欠である。その重要性を今後、アンバサダー活動を通じ、広めたい。

6 自分の夢、これからやりたい事

私の夢は、都市近郊に酪農体験のできる牧場を経営することだ。私は、父のヘルパーの手伝いで現場を見る機会があり、どこも高齢の人が多く、後継者などの人手が足りないという現実を知った。それを解決したいと思い、この目標、夢ができた。

観光牧場はたくさんあるが、一般の人が気軽に体験できる牧場は聞いたことがなかった。

少しでも酪農に興味がある人、専門の学校に行くまで決心はついてないけど興味がある人、そんな人が気軽に体験できる牧場を作りたい。一日一緒に仕事をする中で、現場の仕事を知ることができ、それとともに会話を交えながら今の酪農について知ってもらいたい。そして少しの興味から大きな夢にかわるよう、少しでも未来の畜産の活性化につなげたい。

7 畜産業を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

畜産はとても魅力的な産業です。時には大変なこと、難しいこと、苦しいこと、たくさんあります。ですがそれ以上に牛や豚などの動物たちが与えてくれるものは比べものにならないくらい大きいものです。人間が汗水流し、努力をすれば、愛情を与えれば、必ず何かで返してくれます。それはいつになるかはわかりませんが、必ず返ってくると思います。

もちろん産業動物なので、いつかは別れがあり、命の終わりを決めてしまうのは人間です。

時には残酷かもしれませんが、私たち人間が生きていくためには必要なことです。

だからこそ生まれたとき、成長しているとき、生きている間は家族同然のように大切に育ててあげることが重要なのです。将来畜産業を営むときは、自分の仕事に誇りをもってほしいです。



理想の酪農について学習している様子



1 テーマ

ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）

2 キーワード

放牧（コスト、労働力、流通、IoT/ 機械・施設）

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

ビジネスの面から畜産を見たとき、最初はいかに効率よく大量生産ができるか、いかにコストを抑えて利益を増やせるかを重視した経営をすることではないか、と考えていました。なぜなら、ビジネスという言葉には「利益を得ること」という意味があることを知り、利益を得るためには費用を抑えつつ、生産をする必要があるのではないかと思ったからです。

テーマ、キーワードをもとに現地で研修をしてきました。ニュージーランドは気候に合った放牧型畜産にすることで、家畜は牧草を食べるため飼料代がかからないことがわかりました。

施設はロータリーパーラーといった大規模搾乳施設、家畜の個体管理にはICチップを導入していました。

これらのインターネットを利用した機器を導入することで家畜の体重、泌乳量などの情報がスマートフォンで簡単に管理ができ、労働力やコストが削減されていました。また、酪農に関して言えば、流通でもほとんどの牛乳が海外に加工品として輸出されているという特徴があり、酪農家の利益は出荷した生乳の質に比例しているため、より高品質な乳生産が目指されていることがわかりまし



放牧場の様子

た。私は、これらのことから、ビジネスとしての畜産とは、まず自らが経営をしている土地の特長や流通のシステムを十分に理解し、その上でそれらに沿った経営方法、付加価値のある生産方法を見出し、コストを抑える工夫をすることだと考えます。そうすることでより利益を得られるのではないかと思います。

日本でニュージーランドの技術を全て取り入れることはできませんが、反映できることとしてインターネット機器の導入が挙げられます。まだ全ての農家で普及していませんが、一部では取り入れられています。私たちがニュージーランドで見てきたインターネット機器導入のメリットを広めていけば、日本での普及も可能ではないかと考えます。



飼料用作物「スイーズ」

ロータリーパーラー

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

ニュージーランドでの研修を通して、特に印象残ったことは、農家が強いということです。

研修中には酪農家や羊農家など様々な農家を訪れ、いろいろなことを見たり聞いたりしましたが、どの農家でも共通していたことがあります。それは、自分の農業という仕事に誇りをもっている、ということです。ニュージーランドの方々、海外である日本から来た私たちに、堂々と自分の農場や仕事内容を話していました。その姿から、畜産は立派な仕事で、その職業に就いている自分に自信をもっていることが伝わってきました。

今回の研修では女性農家との交流が多かったのですが、交流をしていくうちに女性は畜産にとって必要な存在であるという意識が強くなりました。ニュージーランドでも日本と同じように、女性が農家になるイメージが定着しておらず、中には就農を反対されたと語った方もいます。しかし、そんな逆風の中でも自分の農業に携わり

たいという思いを貫いて農業を始め、今では経営を成功させています。

「女性だからといって畜産ができないわけではない」「女性だからこそできる仕事がある」

このような言葉を聞いて、女性は畜産にとって必要不可欠な存在であることがわかり、畜産に携わっていることに自信をもつことができ、勇気をもらいました。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、畜産業の可能性や楽しさ、女性の重要性を広め、今日、日本にある畜産のマイナスのイメージを変えたいです。なぜなら、私がニュージーランドで感じた畜産業の可能性や、農家の誇りを多くの人に広めて、日本の畜産業を支え、盛り上げたいからです。私がニュージーランドで見聞きしたことは、日本に留まっていたでは知り得なかったものばかりです。ニュージーランドの農家の代わりに、私がそこでの盛んな畜産業の様子や農家の姿、女性の活躍を伝えられたらと思います。

もし、日本中に共感の輪ができたら社会の畜産業に対するイメージが変わり、畜産業に興味を持つ人や女性就農者が増えるかもしれません。農家にもさまざまな意見が生まれ、畜産業が発展していくかもしれません。さらに女性と畜産のつながりができ、女性の活躍の幅を広げることができると思います。それが社会に農業ブームを巻き起こすきっかけになると考えます。

女性は畜産業にとって必要不可欠です。女性だからこそできる仕事があります。女性が畜産業に参入することで農家同士のコミュニティが生まれ、農家同士のつながりができます。それによって農家間での情報交換が盛んになり、それぞれの農家でよりよい経営を目指す糧になります。これはニュージーランドの畜産業が発展していることを裏付ける理由の一つです。男性と対等に経営に携わり、女性が新しい基盤となる畜産業が理想の畜産業ではないかと考えます。

6 自分の夢、これからやりたい事

私は将来、酪農家を支える仕事に就きたいです。今回のニュージーランド研修をきっかけにそう考えるようになりました。

ニュージーランドではさまざまなことが聞けましたが、中でも農業経営コンサルタントのアレクシスさん

から農場の課題解決に農家と一緒に取り組むお話を聞いて、農家を支える仕事に憧れを抱きました。

高校卒業後は大学に進学し、農業経済学を学びたいです。環境問題などの農業が抱える問題を研究し、解決する力を身につけたいと考えています。

7 畜産業を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

海外研修で私の世界は大きく広がり豊かになりました。海外研修のみならず、いろいろなことに一緒に挑戦してみませんか。自分が豊かになって、いつの間にか力がついていることに感動する日がくるはずです。



1 テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2 キーワード

ニュージーランドの酪農の問題点とその対策

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

日本の畜産の担い手が増えないのは、畜産の問題への対策が不十分で、悪いイメージを与えているからだと考えた。日本の畜産は昔からのやり方を変えず、他の意見を聞き入れられないようなことが多いと感じている。このような職業に若者は魅力を感じるだろうか。結果的に現代の畜産の波に乗れず、衰退していく。だから、今回の研修でニュージーランドの畜産を学び日本と比較し、担い手を増やしていくために問題をどのように対策していくべきか調査した。

ニュージーランドでは特に放牧による環境の汚染が問題となっていて、多くの農家や企業が環境保全のために対策を練っていた。だから、ニュージーランドの酪農は「きれい」というだけでなく、「やりがいのある仕事」というイメージをもった。よって、ニュージーランドは「やりたい!」と思えるような酪農だった。対して日本は、昔ながらのやり方・考え方がはびこり、廃墟のような牛舎をそのまま利用している農家も多い。このような問題への対策が不十分のように感じる。だから、「汚い」「儲からない仕事」などという悪いイメージがあるのだと思う。この酪農は誰も「やりたい」とは思わないだろう。

結果的にニュージーランドの畜産は担い手が確保でき、日本の畜産は担い手不足につながっていると考えた。これの対策として日本に必要なことは、新しいことにチャレンジすることだ。ニュージーランドは多くの人々が様々なことにチャレンジし実行しているから畜産が成長してきている。日本も、頑なに意思を貫くのではなく周りに耳を傾け、失敗をおそれず新しいことにチャレンジしていくことが必要だと思う。そうすれば、日本の畜産は活発化し、若者も興味を持つのではないだろうか。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

畜産に関する、国や企業の情熱が日本よりも強いと感じ、私はその情熱の強さに感動した。今回お世話になった農家の方々はみんな、やりがいを感じているキラキラとした目で話をされていたので、やる気に溢れているのが感じられた。国は環境の保護のための規則や、アニマルウェルフェアのための規則などがあり、国全体が畜産に力を入れていることがわかった。日本の畜産は、伝統を頑固に守り新しい考え方を取り入れず、停滞しているように感じる。畜産を活発にしていこうと思いがけないと思う。ニュージーランドにも、今の日本のような状態だったときがあるそうだが、今日のように活発な畜産があるのは、情熱的な心を持った人たちの努力の積み重ねだと思う。誰か一人変えようと思う人がいれば、それは連鎖していき最終的には国全体が活発な畜産を目指そうとするのではないだろうか。そうすれば多くの人が、自然と畜産に興味を持ち、身近な職業になっていくと思う。だから、今回のプロジェクトに参加した情熱的な心を持った私たちがこれからの畜産を変えていかなければならない。そして、私は日本全体がやりがいのある活発な畜産になるように頑張っていこうという気持ちがニュージーランドでの研修でよりいっそう強まった。



5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

私は日本に男女平等な畜産を広めていきたいと思う。日本の畜産の問題の一つは、昔ながらの考え方がこびりついていることだ。日本は高齢化が進み、昔ながらの考え方を貫く農家が多く、畜産が停滞していると感じる。その考え方の中で特に、「女は弱く、男の言うことだけ聞いていればいい」という男尊女卑のような考え方が大きい。畜産だけでなく農業業界全体でもこのような考え方がこびりついており、農家の主になっているのはほぼ男性のような気がする。たまに女性がいると、珍しがられ「女には無理だ」と陰口を言われることも少なくないと思う。これでは、女性はただの道具のようで自由にやりたいこともできないし、誰か一人の意思だけで経営してもより良い経営には繋がっていかない。ニュージーランドの畜産は世の中の進化と共に新しいことにチャレンジし、活気あふれる畜産になっていた。男性も女性も平等な関係で話し合いや仕事をするそうで、それが当たり前になっていた。このような男女平等は日本にとっても大切な考え方だ。男性も女性も分け隔たりなくそれぞれの意見を言えば、互いに新しい考え方を発見し、より良い経営を目指していけるだろうし、互いにできること・できないことを知っていれば仕事の分担ができ、効率の良い経営をしていけると思う。つまり、男女平等な畜産はより活発な経営をしていけると思うのだ。そうすれば、日本の畜産は男性も女性も働きやすく変化していくと思う。その男女平等な畜産をつくるのに必要なことは、まず会話だ。食卓を囲んでの団欒でもいいから、男女関係なくコミュニケーションをとり、相手を受け入れていくことが大事な一歩だと思う。

6 自分の夢、これからやりたい事

自分は将来、家業である畜産を継ぎ、経営の仕方を変え自分らしい畜産をするのが夢だった。このように今までは自分で自分の経営ができれば満足だと思っていた。しかし、ニュージーランド研修により「それだけでは、結局日本中に畜産の魅力が伝えられず、畜産が衰退していつてしまう」ということに気づき、自分の畜産経営以外の活動も必要だと感じた。だから、私は将来、自分の畜産経営だけでなく、それをSNSで発信したり、機会があるたびに畜産の魅力を発信したりしていきたいと思った。そうすれば、

なくてはならない畜産の今も未来も守っていけるのではないかと思う。

7 畜産を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

畜産は一見、個々で経営していく仕事のように思えますが、その中には他の人とのたくさんの「つながり」があると私は思います。だから、同じ畜産を目指す者たちとして互いに手を取り合い、また自分の軸をぶらすことなく、協力し「みんなが夢見る畜産」を実現しましょう!





1 テーマ

ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）

2 キーワード

流通

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①日本の酪農は国内生産を主目的としていますが、日本における乳製品に対する需要が少ないため、生産量を増やしてもあまり意味が無く、乳業メーカーが利益を得るような買い取り方法では酪農家の収入がよくなるという欠点があります。一方、ニュージーランドでは積極的に海外へ輸出を行っていることが、収入を安定している要素ではないかと考えました。このことから、日本において加工や流通方法を考え直し、酪農家に対してさらに安定した収入になるように、ニュージーランドの流通の仕組みや目的を学び、日本の流通の問題点を洗い出すことでビジネスとしての畜産に繋げようと考えました。

②ニュージーランドでは乳質にこだわり、生産された生乳のほとんどが大規模乳業メーカーであるフォンテラ社に運ばれています。フォンテラ社は乳製品の売り上げが世界第6位で、生乳を粉ミルクなどに加工し、そのうち約93%を世界に輸出しています。加工乳にすることで長期保存と流通が可能になり、世界中への販売が可能になりました。そして、フォンテラ社は酪農家が出資して設立した会社なので、牛乳を生産が増えれば乳価プラス配当金が貰えるため、酪農家の収入が高いことが分かりました。

③今の日本が輸出をしても、飼料のほとんどが輸入に頼っており、国際市場価格の変動に影響を受けるので、酪農家の収入が不安定になるため輸出を考えなくてもいいと思います。しかし日本全体として、乳質にこだわる生産を目指し、また栄養価の高い地元の自給飼料を生産することが、コスト削減効果や品質向上の突破口だと思います。ニュージーランドのように、乳質が良い牛乳を

生産するほど配当金が貰える制度や大型農業機械のリース会社などを作ることで、酪農家の収入を向上させていきたいと思いました。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

特に印象に残っているのは、Moさんがお話で言っていた「夫と一緒に酪農場を経営しているが、お互いに対等な立場で自分の得意な作業をしている。」という言葉でした。畜産業は男性中心だというイメージがありますが、女性だからできないと考えている人はいませんでした。特に自信を持って仕事をしていました。女性は精神的に強く、頭を使うビジネス系の作業や仔牛の育成は男性より向いていると思います。

そして、インバーカーギルで約20年間議員だった方に、女性が就農していることに関して考えを聞きました。その男性は、「女性が畜産業にとって必要不可欠な存在である。」と教わりました。このことから、女性が畜産業に携わり必要とされていることが分かりました。このことから女性とは計画的な人が多く、緻密で経営者向きなので成功しやすいのではないかと考えました。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

私は今感じている畜産の魅力と攻めの畜産について広める活動をしていきたいです。そのためには、まず日本の酪農をもっと見学し現状を知る活動も行いたいと思います。攻めの畜産として、女性が活躍する酪農の実現には、ロータリーパーラーといった大型搾乳機の導入による省力化や時間短縮、人件費コストの削減ができます。またIT化による個体管理としてICチップで固体の情報（給餌量、乳量、体重、病歴、治療歴）を管理し、スマートフォンの活用による情報の一元化や誰でも見られる便利さが重要な要素になります。私たち女性が酪農を行うためには、飼料代を抑えるためにも機械化による労働力や人件費の削減、酪農の軽作業化に取り組むことで私たち女子高生を含む、若い女性を取り込めると思いました。このことが同性の女性に対して、女性が就農

し活躍することが皆の自信になると思います。ニュージーランドでは、必要不可欠な存在になっている女性就農者です。彼女らは自信に満ちあふれていて、仕事でも男性を引っ張っていく様な女性農業者リーダーを日本でも実現できると私は感じました。女性が酪農を仕事とする上での障害になることは、妊娠や子育てがありますが、良きパートナーと巡り会うことで、経営と子育てが両立出来る環境を整えて行くことが大事だと思います。常に男性と女性では、対等な立場で経営することが重要だと感じています。男女におけるジェンダーギャップをまずは酪農の世界から無くなるような実践を私がしていきたいと思いました。

6 自分の夢、これからやりたい事

この研修を通して、「研修の仲間と女性のみの酪農場をつくる!」という共通の夢が出来ました。同じ夢に向かって進める仲間がいることは、私の中の励みになります。研修中にたくさん話を聞いて、女性として就農することに自信を持つことができました。今後は、農業経済分野における畜産ビジネスと、牛の改良の研究などを目指し、4年制大学に進学したいと考えています。この学びを活かし、酪農家として新規就農出来るように様々なことに挑戦し、経験を積んでいきたいと考えています。

7 畜産業を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

畜産業は決して大きく儲からず、仕事して楽ではありません。しかし私は酪農を始めとする畜産業がカッコいい仕事だと思っています。ビジネスや人間関係、動物のことを考えるなど、様々な出会いからすべてにやりこなす仕事であり、牛が大好きな私にとって、常に動物と一緒にいて仕事ができる魅力いっぱい詰まった職業です。自分の好きな世界を描ける仕事として、誇りを持って笑顔で楽しんでほしいと思います。





1 テーマ

ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）

2 キーワード

労働力

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①最初は放牧することで、人が行う給餌や糞の作業をしなくてもよくなるので、一人当たりの労働量が少なくなっており、日本よりも大規模で飼養頭数が多いニュージーランドでは機械類が発達していて、より楽に作業ができるようになっていたと思っていました。それが人件費の削減に繋がり、ビジネスとしての畜産に繋がるのではないかと考えました。

②実際にニュージーランドで見学に行かせていただくと、放牧をしている牧場が多かったので、働いている人自体が少なく、一人当たりの作業量も少ないように感じました。農場で働く人を減らすことで人件費の支出を減らして、より効率的に利益を得ていることがわかりました。また、基本的に濃厚飼料は与えていないので、飼料代も日本に比べて抑えられていました。

③できるだけ支出を減らして多くの利益を得るという考え方は日本にも広げるべきだと思いました。日本に「放牧」という選択肢がないのは、土地の広さが違うのでしょがないことだと思います。しかし、放牧をすれば労働力の削減にも繋がるし、足腰が強くなることにより、怪我を減らすことができます。田中萌絵さんが言っていたように、多少狭くても放牧場を作り、日替わりで違う牛を放牧していけば、怪我の治療費による支出を減らすことができると思います。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

特に印象に残っているのは、Moさんのお話の中にあっ

た「酪農業を経営するのに性別は関係ない。それぞれが自分の得意な作業をすればいい。」という言葉です。女の人でも力仕事で得意な人がいるし、男の人でも事務で得意な人がいると思います。性別ではなく得意不得意で作業内容を決めるのは、スピードと正確さを追求できるのでとてもいい事だと思いました。

私の学校では式利付きのスタンションで飼料の個体管理をしているので、日本にいるときは放牧でどのように個体管理をしているのか分からなかったのですが、ICチップを使っていると聞き、納得できました。

ニュージーランドでは放牧が主流で、牛にとっても、人間にとってもいい飼育方法だと思っていたけど、実際に農家さんや研究所の方のお話を聞いていると、環境面で問題点があることを知りました。しかしそのような問題に関してそれぞれの農家さんが問題と向き合い、きちんと対策をとっているのが日本にはないところだなと思いました。

日本では、ほとんどの生乳を牛乳として生産していますが、ニュージーランドでは、ミルクパウダーにして加工品を生産しています。そのため生乳の取引価格は、キログラムではなくミルクソリッドという単位を使って取引していました。今までに聞いたことのない単位だったので、慣れるのに時間がかかりましたが、それだけ乳質にこだわっていることがわかりました。またキウイクロスというホルスタインとジャージーを掛け合わせた品種が主流になっていました。



5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

今回の研修でビジネスとしての畜産について調査し、考えた中で得られた、支出をより少なくするという考え

を広めていきたいです。この考えが広まれば、今よりも効率よく酪農経営ができると思うからです。

今、日本の酪農家さんの多くは、どちらかという収入を増やして、利益を増やそうとしている気がします。しかし、ニュージーランドでは放牧をしているので、濃厚飼料を与えずに飼育していました。そのため日本に比べて、飼料代が抑えられており、ミルクパラーを導入することで、労働力を少なくし、人件費による支出を抑えていました。日本でも、支出を減らすとすれば、今より多くの利益が得られると思います。

放牧ができればそれが一番なのですが、国の人口密度的にも、気候的にも放牧に適していない地域がほとんどなので、ICチップの使用し、全頭血統や乳量の管理をする、などの工夫を取り入れるほかに、飼料作物の自家生産などのニュージーランドとは違った工夫をすることも必要です。それにより、飼料代を少しでも浮かせることができ、上手なビジネスにつながると思います。

これを日本中の酪農家さんが行うことができ、成功したら、酪農はうまくやれば儲かる仕事、と思われれば酪農のイメージアップをすることができると思います。

今回のニュージーランド研修で学んだことの1つである、自分の得意な仕事、好きな仕事ができる畜産業が、女性にとってはもちろん、男性にとっても最高の環境だと私は考えます。その前に、女性でしか気づけない改善点を見つけられたり、作業が丁寧だったりなど女性も畜産業に欠かせない存在だということに気づいてもらい、女性の意見を取り入れてみたりすることが、女性が畜産業で活躍していく第一歩だと思います。

6 自分の夢、これからやりたい事

一緒にニュージーランドに行った3人のメンバーと、畜産女子で農場を経営する、という夢を持つことができました。子牛の育成、事務、成牛の管理、共進会への出場などの自分の得意なこと、好きなことを仕事にできて、女性が活躍できる牧場にしたいです。そのために、私はまだ放牧や子牛についての知識が足りないので、実際に学校に放牧場を作り、もっと詳しく勉強をしていかなければいけないと思いました。

7 畜産業を目指す仲間たち、 先輩たちにメッセージ

牛が大好きな私にとって、牛と一緒に作業ができる酪農という仕事が自分にあった最高の仕事だと思っています。畜産業は決して楽な職業ではありません。しかしその中で、やりがいや癒しを見つけることができれば笑顔で楽しく仕事ができると思います。



1 テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2 キーワード

新規就農

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

新規就農というキーワードのため、まず日本の新規就農について知らなければならぬと思い、調べてみました。主に農林水産省のホームページを見て、たくさんの制度があることはわかったのですが、私が知っているものは何一つありませんでした。私が勉強不足なだけかもしれませんが、どちらにせよそういう制度があることが広まっていないのは明らかなのではないかと思いました。

ニュージーランド（以下：NZ）大使館でのお話では、NZでは新規就農をするにあたって補助金は出ないと聞きました。私はそれに驚き、こう思いました。補助金が出ないのなら、どうやって就農をするのだろうか。借金を抱えてうまくいくのだろうか。

しかし、NZの酪農は私の想像していたものと全く異なり、日本とは比べものになりませんでした。無償でもらえる奨学金、シェアミルク制度、ヤングファーマーズ……。学ぶ場所がきちんとあって、経験もたくさん得られるのです。借金もあって当然のようなもの。NZではもうみんな「知っていて当然」のようにその制度について話していて、情報や制度がきちんと行き届いており、整備されているんだと思いました。新規就農をするには、正直日本よりも適していると感じました。

このことから、情報があまり行き届いていない日本では、まず知ってもらうことから始めるしかないと思います。日本の酪農、農業の現状を知って、「あ、そうなんだ。」ではなく、「どうすればいいのだろう。」と考え、自分から農業について知ろうとする必要があります。そうしないと、消費者、若い人の酪農に対する関心が薄くなっていく方ではないでしょうか。

新規就農の制度をより一般化するとともに、消費者を主とした地域住民の人たちの酪農に対する意識を変えな

ければいけないと感じました。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

日本の4分の3程度しか面積がなく、しかもその3分の2を山などが占めているというのに、見渡す限り放牧場が広がっていて、「すごい。」としか思えませんでした。それと同時に、日本とは考え方が180度違うんだなと思いました。日本では農家、農場は減る一方なのに、NZでは逆に人気で増えている。農業への力の入れ具合が違うというより、農業に対する関心が全体的に高いのである。

日本では最近意識し始めたアニマルウェルフェアが、NZではすでに普通であり、法律として制定される間近までに浸透しており、正直驚いています。除角は麻酔を使って行うとか、肉にするオスの子牛はかわいそうだからアメリカに輸出する。そういう考え方は日本には無いと思いました。でも、牛に優しく接するかしないかでは絶対するほうがいいに決まっているので、この考え方は普通であるとも感じました。しかし、日本ではまだ普通というわけではありません。

私が日本でインターンシップに行った牧場では、搾乳する場所に牛を追い込む際、鞭のようなものでたたいてしかも大きな声で怒鳴りつけていました。私はそれを見た時、何も感じませんでした。今思えばあの行為はとてもひどいことだったとわかります。でも、それはアニマルウェルフェアを学ぶ前だったので、悪いことだとは知らなかった、思えなかったのです。もし、私がそれを知らな



いまだったら、同じことを違う場所でもしていたかもしれません。そう考えると、とても怖くなります。なので、日本ではもっとアニマルウェルフェアというものを知ってもらう必要があるといえます。特に、古い考えを持った年輩の方が経営している牧場に積極的に伝えるべきだとも思いました。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

日本の酪農は、正直消費者からはあまり良くないイメージを受けていると思います。例えば今でも3K（危険・汚い・きつい）や借金が多い等の声が聞こえています。私も、高校に入学するまではそう思っていた一人でした。しかし、そう思うのは乳生産の現場を知らないからなのでしょう。ですから、私はまず牛や酪農のことを消費者に伝えたいと思いました。

酪農を知ってもらうためには、どうすればいいのか。私の場合は、当番実習や畜産の授業で少しずつ酪農というものを知り、興味や疑問点が沸いてきました。そして、酪農についてもっと知りたいという知識欲が出てきたのです。このことから、日本で主に飼養されている乳牛の品種や、搾乳に使う器具の名称など、本当にちょっとしたものを知ることによって、酪農というものを「知ることができた」、「触れることができた」という達成感が芽生えるのではないのでしょうか。そうして知ること、あのよくわからない臭いところで何が行われているのか、わかるようになるでしょう。なんで臭いのか、汚いのか、うるさいのかを知ることで、きっと受け入れてくれるようになるはず。そのためには、当然コミュニケーションも大切ですが、まずは知ってもらうことに力を入れていきたいです。

また、牛乳がどれだけ苦労して生産されているかわかることで、牛乳の価値も上がるのではないのでしょうか。以前テレビで、薬局などでとても安く売られている牛乳について話していました。酪農家や牛が一生懸命牛乳を生産しているのに、そんな安い価格で売られていては酪農家も困ってしまいます。本当にその通りなのです。やはり、安い価格で牛乳を売り出すというのは、販売者が牛乳の価値を知らないからだだと思います。そういう人が酪農について知ること、牛乳の価格を上昇するだろうし、それを買う消費者も、状況を知ることによってその価格に納得してくれるでしょう。

結果、収入が増えた酪農家は、より良い乳質を求め飼料を変えたり、評判をよくするために牛舎をきれいにしたり、機械を導入して肉体労働を少なくしたり

と、経営を有利に進めていくことができるようになると思います。そして、酪農という職業がより一般に理解されるようになるのではないのでしょうか。

また、NZで学んだシェアミルク制度のことも考えていきたいです。この制度は、資金はないけれどやる気のある酪農を志す若者にとっては、ごく少ない資本で酪農に新規参入でき、自己の技術を磨きつつ、将来の農場オーナーを目指して、必要な資金を貯えることのできる制度です。こんな制度が日本で普及でき、動物好きな若者達に常時情報提供できればと考えています。

6 自分の夢、これからやりたい事

牧場に就職後は、人工授精師と受精卵移植師の資格を取得し、積極的に経営にかかわっていきたいと考えています。また、私は第6次産業にも興味・関心があるので、将来的には新規就農をしてチーズやヨーグルト、ハム・ソーセージなど、乳肉加工品が作れるような牧場をつくりたいと考えています。従って就職後は、高度な知識・技術を手に入れるために勉強や経験をさらに積み重ねていきたいです。

畜産アンバサダーとしても、卒業後にツイッターなどを通じて畜産に関する情報を発信していきたいと思っています。



7 畜産を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

畜産は動物の生死にかかわる仕事です。自分の行動で家畜が死ぬこともあれば、成長することもあります。悲しいこともあります。それに対応できる柔軟な心をもつことが必要です。

目標に向かってへこたれずに進んでいけば、いつかは自分の目標を達成できると思います。



1 テーマ

女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）

2 キーワード

畜産に関わるきっかけ

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

このテーマを選んだ理由は、女性が畜産業のオーナーとして経営できるのか、家事と仕事を両立できるのか、何より「なぜ畜産に携わろうとした」のかを知りたかったからです。また、どうやってニュージーランドでは女性が就農するきっかけを作っているのかに興味がありました。日本では動物が好きだからという理由や、親族が酪農を営んでいるため後継者として受け継ぐというのが一般的なもので、ニュージーランドも同じなのではないかと考えました。そして、日本では女性が畜産、家畜に関わることがとても少ないため、ニュージーランドでの女性の活躍を見て、日本の女性の就農のきっかけ作りに生かしたいと考えました。

ニュージーランド研修をとおして、女性の農家さんからたくさん話を聞いていて感じたことは、ニュージーランドの女性は強いということです。ニュージーランドでは女性だから畜産経営はできないという考えはありません。家族や友人などの周りの人からの反対もないため自分自身がやりたいことを貫けます。困難が立ちただかっても、畜産に携わって輝人が周りにいて助けてくれ、そして女性のしなやかな考えで問題解決を図れるという考え方で。また、もし周りに畜産業をしている人がいない場合も、女性が畜産をしているコミュニティが存在するため安心です。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

ニュージーランドの農業を目のあたりにして考えたことは、自然豊かな広大な土地があり、機械化が進んでいるので効率が良いと思いました。

まず、広大な土地の一番のメリットは、放牧ができることです。牛の体が鍛えられ健康にも良いし、採草や給餌の必要がないため労力やコストの低減にもつながります。また、牛が自ら管理が必要なだけ草を食べるので牧草も少なくてすみますし、草を食べた後の糞尿を片付ける手間が省けて肥料としてそのまま土に還元されるので一石二鳥です。このようなことはニュージーランドの広大な土地があるからこそできるのです。また、ニュージーランドは冬にも青々とした草原があり、空気が澄んでいてとても気持ち良かったです。京都では味わえないような体験ができました。

続いて、機械化についてです。機械化が進んでいるのは日本も同じです。二学期から私の学校でも搾乳実習が始まりました。ミルカーを装着したり離脱したり作業にはまだあまり慣れていませんが、やりがいがあります。ニュージーランドではロータリーパーラーという大規模な機械があります。その言葉は現地ですぐに知り、初めて見ることができました。日本のように消毒をしたり、前搾りや乳房などを丁寧に拭くという行程が見当たらなかったのが衛生面ではどうなのかなと思いました。しかしコンピューターが一週間の健康状態を管理しているので心配はないそうです。それでも日本の搾乳作業における前搾りや乳房を拭く作業は一頭一頭に対して丁寧で、人間が牛をよく観察しているので清潔そして安全・安心だと思いました。

研修をとおして感じたことは、日本にニュージーランドのような効率の良い方法を取り入れたいと思う一方で、土地の大きさや広さは変えられないということです。なので、日本のような狭い放牧地でも少数頭だけを放牧することで、牛乳の品質を高めることができればいいのかと思いました。国によってできることは限られるので日本は自国にあった畜産をしていけば良いということがわかりました。



5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

畜産アンバサダーとして日本に広めたいことは、「女性でも畜産業ができる」ということです。畜産業に携わるメリットは、自然が相手なので臨機応変に対応しなくてはならないため、すばやく対応できる力や、責任感が生まれます。しかし、女性が畜産を仕事にすることは、力仕事や家事や育児の両立、収入が安定しないということもあるし、周りからも反対されるかもしれません。畜産業に気軽に参入することは難しいと私は考えました。まず畜産は「しんどい、汚い、かわいそう」という固定観念があります。それに、参入しても何をすればよいのかわからないことだらけになると思います。しかし動物が好きで人の進路の選択肢になりやすい、動物園の飼育員や獣医さんはどうでしょうか。飼育員でも力仕事は必要になるし糞の処理もしなければなりません。獣医さんは、生死の判断をしなくてはなりません。実際のところ、畜産業も動物園も仕事内容は、ほぼ同じだと思います。でも畜産業には畜産業にしかない魅力があります。たとえば、畜産は産業なので動物を殺して肉や二次製品になりお客様に提供しなくてはなりません。ですが食べ物という生活には欠かせないものを提供するやりがいに加え、家畜が私たちの生活の一部となって生きてくれるという命や食べ物に対する感謝の気持ちが生まれます。それが畜産業の魅力であり、多くの人に知ってもらいたい事実です。

だからこそ、女性が畜産をするにあたっての気持ちの持ち方を、女性で牧場を経営している人や私たちアンバサダーが、全国にPRするべきだと考えました。そうすることで、若い人や仕事を探している人に畜産業といった新しいタイプの産業に興味を持つことができるのではないかと思います。

この魅力を伝えるためには、SNSを駆使して伝えるべきです。若い女性のコミュニケーションツールのTwitterやインスタの画像、動画の投稿で楽しさや家畜のかわいさを伝えていき、それで興味を持った若い女性がDMなどで連絡を取り合えばいいと思いました。そして畜産業をはじめた女性が、きちんと畜産で活躍し、長く続けていくためには、おなじ経験や考えを持つ周りの女性が手厚くサポートをするべきだと思います。女性が抱える不満や不安を改善していき、男女の意見も入れつつ一緒に経営していければ日本の畜産業が今まで以上に盛り上がると私は信じています。

6 自分の夢、これからやりたい事

私の将来の夢は、北海道で羊牧場を開くことです。そのためには畜産を学べる大学に進学します。特にサフォーク種について勉強したいと思っています。理由は、日本の羊肉の需要は少ないため、羊肉のおいしさを広めていきたいと考えているからです。そして日本の気候で一番合った羊がサフォーク種だと思ったからです。ニュージーランドから帰ってきたときは行く前よりも「羊ともっとふれあいたい」という思いが強くなりました。だから、今年中に北海道に行き、羊の牧場や観光牧場に訪問して現状を視察しに行きたいと計画を今立てています。



7 畜産業を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

今は大きな壁に当たっても諦めないことが大切です。私も現在、畜産実習で反省点がたくさんあって心が折れそうな時もありますが、「できない」と思い込まずに前向きに頑張るべきです。このような農業研修があるのならば絶対に参加したほうがこれからの進路にも役に立ちます。私はこの研修で日本との農業の違いや言語の違い、そして異文化交流をととても視野が広がりました。そして、私のすすむべき進路がはっきりと見えるようになってきました。



1 テーマ

女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）

2 キーワード

地球温暖化に配慮した飼育方法

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①日本酪農は施設内での飼育で、工場の生産ラインのように牛乳生産が行われているのが現状。

また、堆肥処理が適切に行われていないところが多い。農業は収益が少なく利益優先で行われている。環境や家畜のことは後回しになっている。

②NZ酪農は放牧主体で、環境の整った放牧地で牧草生産を行い、粗飼料主体の飼育方法で乳用牛の耐用年数が伸び、Animal Welfareの面からみても牛たちにとっては最高の環境が準備されている。

また、放牧飼育によって循環型農業が成り立っていると感じた。しかし、乳量や乳質ではやはり日本より劣るが、労力やコストの削減はすごく感じた。

③日本人の気質である丁寧さや安全、安心なものづくりで酪農は成り立っている。

日本の舎飼いでAnimal Welfareに考慮した飼育方法は見出せると思っている。現在、ロボット搾乳の導入が増えつつあるなかで、労力削減や牛たちのストレス削減につながり、女性でも働きやすい環境整備が整いつつある。堆肥は自治体による堆肥処理施設の建設で本格的な堆肥生産により、耕種農家との連携強化しながら循環型農業の実践で環境問題に取り組みたい。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

NZは自然との共生を求める人々のため、環境問題には尽力されていることが理解できた。また、国土の大部分が丘陵地のため家畜の放牧が盛んであった。日本より

小さな国だが農業大国だと感じる事ができた。また、どこに行っても女性の方々の活躍があった。酪農ではホルスタイン×ジャージーのF1キウイクロスを見て見ることができ、管理しやすい体型や飼料効率、乳質にあった地域ならではの酪農形態があることも分かった。日本の酪農業界は共進会による体型改良での大型化や、利益に直結する乳量を求めてしまい、扱いにくい家畜へと変貌しているのが現状だ。これでは持続可能な農業への道筋は途絶えてしまう。そこで、地域資源の有効活用や地域の特性を生かした牛乳生産や六次化が魅力となり、後継者問題や女性の活躍の場面が増えると考えた。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

現在、学校教育現場として酪農教育ファームを実践している。近年、牛乳の消費が減少し酪農家として乳価が下がりつつある。また、農家と住宅街の距離が縮まり悪臭問題も増えつつある現状で、私たちが酪農の魅力伝えることで、消費拡大を図り、地域に根ざした酪農現場でなくては将来がないだろう。

日本酪農は転換期にあると思う。利益を求めつつ環境問題を考慮した持続型の酪農を目指さなければならぬ。これから耕種農家の離農で耕作放棄地が増える見込みである。そうなれば、農地は荒れ景観も保つことができない。NZのような広大な放牧地にはならないが、小規模放牧や飼料作物の栽培を行うことで、Animal Welfareや安全安心な牛乳生産につながると思っている。

この提案がうまく循環することで、畜産のイメージ



はかなり変化していくのではないだろうか。また、農場のIT化や近代化で重労働は削減され、女性の活躍現場が増え、女性の持つきめ細やかさや、丁寧さでより家畜の健康管理に時間を割くことができ安全安心な畜産物の生産が可能になると思う。

6 自分の夢、これからやりたい事

酪農業を支える人材になること。日本酪農を世界一にすること。将来は私の牧場を持つこと。

そのためには、知識や技術を高め、酪農のすべてを知り尽くしたいという思いで励もうと思う。

乳牛共進会も挑戦したい。いろんな方面から酪農を伝えることで私自身も成長していくと確信している。

7 畜産を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

今回の研修で世界の酪農事情を知ることができました。このような研修にどんどん参加し、知識をつけることで新たな挑戦となり、将来明るい日本の畜産業界に変貌すると思います。それが家畜のため、人間の食糧となりみんなの幸せにつながると思います。





1 テーマ

女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）

2 キーワード

理想の畜産

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

女性の活躍できる畜産というテーマで、理想の畜産について考えたとき、最初はニュージーランドで実際に畜産業を営んでいる女性たちにとっての理想の畜産を知りたいと考えていた。そしてそれを日本での理想の畜産につなげたいと考えていた。実際にニュージーランドで現場を見てみると、ニュージーランドでは女性が活躍しやすい環境が整っていて、男女が平等に経営を行うことは当たり前であるようにみえた。このニュージーランドで行われている畜産がまさに日本の理想像であると感じた。

日本でこの理想像を実現するために、情報発信をし、畜産が好きな女性たちを勇気づけたい。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

まず、ニュージーランドの畜産業はイメージしていた通り広大な土地に家畜たちが広々と放牧されていた。また、日本で多く使われている濃厚飼料にはほとんど依存しておらず、国内で牧草や飼料作物を自給しており、日本よりも国土面積が小さいのにも関わらず、資料自給率が高いことにも驚いた。

ニュージーランドで生産される牛乳は国内で必要とされている量の五倍を生産しており、乳製品として海外への輸出がとても盛んに行われており、まさに酪農大国であると感じた。また、牧草の生育に泌乳ピークを合わせるために国内全土で牛の種付けの時期が決まっており放牧が盛んなニュージーランドならではの畜産経営だと感じた。放牧には、良いイメージしか持っていなかったが、実際に現地で話を聞くと、デメリットもいくつかあった。糞尿による水質汚染や、土壌の窒素含有量が多いことな

どが問題視されていて、様々な対策方法がとられていた。日本でも放牧を行うとなれば同じような問題が発生する可能性があることも知識として広めるべきだと思った。また、ニュージーランドは、アニマルウェルフェアがとても充実していた。畜産経営におけるアニマルウェルフェアが法律で定められており、具体的には2019年から去勢や、除角をする際には麻酔を用いることが義務づけられると知った。すでに麻酔を使用し始めている農家もいくつか見られた。日本では麻酔を使わないのが当たり前なので、アニマルウェルフェアの点でも海外に遅れをとっていると思った。



5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

放牧の普及や、飼料自給率の向上などは、今すぐに日本で応用することは難しいかもしれないが、日本でもできると感じたことは他にもたくさんあった。特に、女性の活躍できる環境作りは、人の考え次第で実現することが可能であると感じた。私は女性の活躍できる畜産というテーマを中心に調査を行ってきた。現地で畜産を営んでおられた女性たち全員に共通していたことは、自分の仕事に自信や誇りを持っておられたことだ。現地で訪問した牧場ではほとんどその牧場の女性経営者が説明や案内をしてくださった。その際、どの方もみんな堂々としておられ、強くてタフな方ばかりだと感じた。ニュージーランドでは夫婦で牧場経営を行うのが主流で、夫婦が平等なビジネスパートナーとしてお互いに意見を出し合いながら経営を行っているようだ。夫婦の間でお互いの得意なことや不得意なことを理解しあい、尊重しあう

ことがニュージーランドの持続的な農業につながっているのではないかと感じた。どの牧場の女性も男性も、女性だからできないという日本にありがちな概念を全く持っておらず、自信を持って畜産をしておられる姿がとてもかっこよかった。男性にインタビューした際も、女性がいないと経営が成り立たないなどという声もあり、女性の必要性の高さを感じた。

日本では、少しずつ女性の畜産就農者が増加しているものの、経営を行っているのは男性の割合が圧倒的に高い。ニュージーランドのように、男女がお互いに助け合い、お互いの得意なことを尊重しあうことで働きやすい現場づくりや、女性の活躍の場の拡大につながると考えた。そのために、これからの畜産を担う女性の代表として、私たちがニュージーランドで学んだ、畜産経営における女性の活躍や必要性を発信していくことで、畜産をやりたいと感じている女性に勇気を与えられると思った。

6 自分の夢、これからやりたい事

私は将来、地元の畜産業を活気づけられる県職員になりたいと思っている。県職員として、学生たちに畜産の魅力や知識を知ってもらえる機会や、行政の立場から畜産を営む若い人たちが繋がる場を提供できる存在になりたい。また、ニュージーランドで学んだことを生かし、女性が活躍できる畜産の実現を目指し、積極的に活動を行いたい。また、自分が畜産をけん引する女性として自信や誇りを忘れず、畜産を目指す女性を勇気づけられる存在になりたい。

7 畜産業を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

現在日本では畜産業が著しく衰退しています。その畜産業を支えていかなければならないのは私たちです。畜産業を目指していると、周りの人に反対されたりすることもあると思います。畜産業は大変だというイメージから途中であきらめてしまう人もいます。でも、私は畜産はとても楽しくておもしろい仕事だと思います。自分次第で可能性はいくらでも広げることができます。畜産を目指している人がいたら、ぜひ色々な視点から畜産を見てみてください！畜産の魅力にもっと気づくことができると思います。



1 テーマ

女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）

2 キーワード

新規参入

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①女性の活躍できる畜産というテーマで新規参入について考えた時、NZは日本より畜産への関心が高く、新規参入者数が多いのではないかと考えました。また、NZは女性の社会進出において優れているため、畜産を始めやすい環境が整っているという事を考えていました。逆に、畜産を始めやすい環境で大変な事もあると思い、それはどんな事なのかを知りたいとも思いました。

②NZで農業を始める時は、まず農場経営について専門の学校などで学び、次に農地を借り自分の家畜や機械を手に入れます。そして、徐々に農場の規模を拡大していきます。NZでは農業を始める時に日本のように補助金などはありませんが、このような環境の中でも男女関係なく、「自分の農場を持ちたい」という強い意志や計画性、自信を持った若者がたくさんいました。また、畜産を始める事に対して周囲からの反対もないそうです。

このことより、女性だからできないという考え方はNZには無く、日本でも女性が自信を持って畜産を始められる環境が必要だと感じました。

③女性が畜産をしやすい環境を作るために必要な、

- ・女性の障害に対する男性や周囲の人の理解
- ・女性が自信を持って畜産を始められる環境づくり
- ・男女それぞれの得意分野や意見を尊重しあうことで、仕事をする上での昔ながらのジェンダーギャップを無くしていくこと

この3つを私達のアンバサダー活動で広め、日本の畜産で反映することが大切だと考えます。また、農業での女性の必要性を多くの人に知ってもらう必要があります。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

NZの農業を現地で学び、初めて聞く事や驚いた事などがたくさんありました。その中でも特に印象に残ったのは、「女性の活躍」と「放牧」についてです。

Thomas Family Farmのカトリーナさんは「酪農は誰でもできる。男も女も関係ない!」とおっしゃっていました。牧場などで女性が実際に仕事をしている姿を見たり、その方たちから話を聞いたりして、NZの女性の力強さや畜産に対する強い意志を感じました。畜産における女性の役割は年々変わっていて女性自身が自分の仕事に自信を持っています。女性が一人加わるだけで視点や考え方が変わるという意見や、女性は農業において必要不可欠であるという男性の意見を聞き、女性の必要性を実感しました。また、NZは女性が仕事をするうえでの障害である妊娠や子育てに対する周囲のサポートが充実しており、女性が働きやすい環境が整っていて、これは日本が見習うべき点であると思いました。

また、NZの酪農は、機械を上手く取り入れて仕事量の削減が出来ていると思いました。耳標についているICチップでの様々な牛の情報管理やロータリーパーラーでの搾乳により、効率的に作業が出来るのだと思いました。日本は機械化において先進国だと思っていましたが、畜産では仕事の量や時間が長く、NZと比較すると機械化を導入している地域は少ないと感じました。



5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

私が畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいことは、NZで学んだ女性が畜産をしやすい環境づくりや、性別関係なく男女が対等に意見を言い合えるというジェンダーギャップのないNZの考え方、畜産の経営形態や新規就農の手順の違いなどです。

女性が畜産をしやすい環境が整えば、女性が畜産を始めやすくなり、さらに就農してからも仕事をずっと続けられることができるようになります。ジェンダーギャップのないNZの考え方が広まれば、女性の意見も重視されることが増え、昔のやり方や固定観念に捉われずに新しい考えでも取り入れてもらえるようになるのではないかと思います。NZでは、農業を始める時は農地を借り始めるのが一般的です。日本でもこの方法が一般的になれば、新規参入の人でも畜産を始める事に対して金銭面などの不安は減り、気軽に農業を始められるようになると思います。

日本の畜産業界全体で女性が自信を持って畜産ができる環境をつくり、男女が対等な立場で経営をしていけるようになることが、女性が活躍する理想の畜産業であると考えます。女性だけで経営する農家も出てくれば、より女性の活躍が世に出ると思います。少しずつ、「女性に畜産は難しい」という固定観念や昔ながらのジェンダーギャップを無くしていくことが大切になってくると思います。女性の障害に対する男性の理解ももちろん必要ですが、女性は女性だからこそできる仕事を見つけていき、自分の仕事に自信を持つことが何より大事になってくると思います。

6 自分の夢、これからやりたい事

私の夢は、農業高校の教師になり、たくさんの若い人達に畜産の魅力伝えていくことです。そして、日本の畜産における後継者不足問題の解消に少しでも貢献出来ればと思っています。このNZ研修で得た様々なことを強みにして、私にしかできないことをしていこうと思います。また、卒業後は大学へ進学し、畜産についてより深く学び日本の畜産の現状などの知識を多く身に付け、そのうえで畜産の魅力をたくさん発見したいと思っています。畜産に携わりたいという人たちに自信を与えられるような教師になりたいです。

7 畜産を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

日本の畜産の未来は私達若い世代にかかっていると思います。若い世代でも、女性でも、畜産には必要不可欠だということを私達から発信して、畜産アンバサダーのみんなで日本の畜産の未来を明るくしていきましょう!



1 テーマ

女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）

2 キーワード

女性の仕事

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①女性の活躍できる畜産というテーマで女性の仕事について考えました。日本では男性が中心となり、畜産業を営んでいる牧場が多くあります。畜産業が盛んなニュージーランドでは、日本と同じように男性が中心となり畜産業を営んでいるのか、それとも女性が中心となり畜産業を営んでいるのかを現地で調べることにしました。またニュージーランドで畜産業に携わる女性の方は主にどんな仕事をしているのか、女性が一人で畜産業を営んでいるのかも研修中の課題として研修に参加しました。

②実際にニュージーランドでの研修に参加し、テーマとキーワードから導かれた考えは、ニュージーランドでの畜産業では女性が不可欠だということです。研修中に4つの牧場を営んでいる男性の方に質問をしました。畜産業を営むにあたって「女性が必要であるか」と尋ねると、その方は「必要だ」とおっしゃっていました。ニュージーランドの畜産業に携わっている女性は牧場の経営に関わる事務処理やミルク給与など丁寧に行う必要のある仕事をしていました。男性にもできる仕事だと思いますが、力の弱い女性に向いている仕事だと私は考えました。

③日本の畜産（酪農）には、ニュージーランドの女性が働いていくための環境を参考にし、反映したらよいと思います。日本の畜産業に携わる女性は、そのほとんどが牧場長を手伝っていくスタイルですが、ニュージーランドでは男女がビジネスパートナーとして牧場経営をしていくスタイルだったため、それを反映することで女性が活躍できる畜産業を実現できるのではないかと考えました。

ニュージーランドの牧場は牛舎の作りに日本と違うところがありました。研修中酪農仔牛生産農家のリネット

さんの牧場へ行きました。その牧場は、子牛の育成を経営のメインにしている、子牛を一頭一頭カウハッチで飼育するのではなく子牛を数頭ずつに分けて飼育していました。ニュージーランドのように数頭に分けて育成することで広いスペースを与えることができ、少しでも子牛にストレスがかからないようになるのではないのでしょうか。その部分を日本の畜産業にも生かし子牛へのストレスを抑えられるのではと考えました。



4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

ニュージーランドの農業を目のあたりにして考えたことは、やはり畜産業をしていく上での環境が日本とは違うということです。ニュージーランドの酪農家では多くの牧場が放牧をメインに行っていました。その中で、子牛を放牧している方もいましたが、子牛に関しては多くの方が舎飼いをしていました。私が酪農家であるカトリナさんの牧場を訪れた際、子牛を見る機会がありました。日本では牛舎の中にくずくずもみながらなどを敷いていますが、その牧場では、餌として給与した粗飼料の残渣を牛舎内に敷いたり、ウッドチップのような木かすやそれを細かく切ったものを敷いていました。それを敷くことで牛舎の床面をドライな状態に保つことができ、子牛にとって衛生的で良い環境が作れるのだと思います。さらに、残った粗飼料を再利用しているので敷料代等の経費削減になるのでこのような方法も活用できないかと考えました。

ニュージーランドの女性は畜産業に対してとても関心が高いということが分かりました。私が訪れたサウスガールズハイスクールの寮に入っている生徒は皆実家が牧場を営んでいます。その女性たちは小さいころから動物が好きで自主的に畜産業に携わりたと思って勉強をしている人ばかりでした。さらに、ニュージーランドの畜産業

をしている女性は計画的に牧場経営を行っており、女性だけでの経営が成り立っていることを知りました。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

私は、畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいことは、やはり畜産業をしていく楽しさと畜産業があることの大切さです。現在飲料用生乳の需要が減ってきています。私の通っていた中学校では給食の牛乳は選択制で、多くの生徒が牛乳を飲んでおらず、美味しくないという人や味が苦手という人がいました。現在は畜産業の後継者が不足しているのも問題になっています。日本では後継者が減少している理由として若い人の畜産業に対する関心がなくなっているのではないかと思います。もし、このまま畜産の後継者が減少していくと給食や家庭で牛乳を飲むことが難しくなってしまうかもしれません。そうならないためにもいち早く後継者を増やす必要があります。だからこそ私は、今回のニュージーランド研修で学んだ女性でも畜産業をしていけるということを広めていきたいです。ニュージーランドの子供たちは、とても動物が好きでサウスガールズハイスクールの寮に滞在していた時も羊や牛、鹿などの動物の写真を見せてくれました。その話してくれる時も動物が好きという気持ちが伝わってきました。日本でも動物が好きだという人も多くいますが、苦手という人もいました。私が高校に入学ししばらくたって、現在の中学三年生の生徒の方が体験入学にきました。その時、中学生はあまり動物を触っておらず、「怖い」と言っていました。私は、子供に対して動物は怖くないということを知ってほしいです。そのためには、観光牧場などでふれあいの機会を作り多くの子供が動物に対する恐怖心をなくし、畜産業とはどんなものか知ってもらいたいです。そして、一人でも多くの畜産業を継いでいく後継者を増やしていくことが大切です。畜産業をしたいと思っているたくさんの方と出会うことができたので、そう思う人々と協力し、酪農女子で日本の第一次産業を引っ張って行きたいです。

6 自分の夢、これからやりたい事

私はこの研修に参加し将来の夢への気持ちは強くなりました。それに、これからどんなことをしたいのか変わった部分がありました。研修前は祖父の牧場を

継ぐという考えだけでしたが、観光牧場を作り多くの子供たちに家畜について知ってもらおうこと、動物と触れ合い命の大切さを知ってほしいという思いが強くなりました。そして、六次産業化もしていきたいと思えます。六次産業化では牛乳が苦手といった子供でも食べられるような乳製品を作り牛乳の消費拡大に貢献し、さらに多くの人に牛乳を好きになってもらいたいです。そして、祖父や曾祖父が築いてきた牧場を継ぎ、日本の第一次産業に貢献していきたいです。祖父のような優しくかっこよい酪農家になっていくために、今後の学校生活では農家研修や資格取得に挑戦していきます。

7 畜産業を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

これから畜産業をさらに活性化させていくためにもやはり、日本の畜産業を支えていく後継者が必要だと思います。今の日本は女性が畜産業をしていくことは体力的にも難しいと思っていた人が多くいました。しかし、今の日本は後継者不足のため私たち女性が積極的に畜産業をしていくことが後継者不足を解決するためのカギになるかもしれません。だからニュージーランドの女性のように日本にも畜産業をしていく女性を増やす必要があると考えます。そのことを私たち酪農女子が広め第一次産業を引っ張っていくことが大切です。日本の畜産業のためにも私たち酪農女子の活動で日本の畜産業の後継者不足に貢献できるかもしれません。これからの日本の畜産業を支えていきましょう。





1 テーマ

女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）

2 キーワード

女性が畜産業をする上での障害

3 テーマとキーワードの繋がりと考察

①「女性の活躍できる畜産」というテーマで、女性が畜産業をする上で障害となりうることについて考えたとき、最初に頭に浮かんだのは妊娠・力仕事だと考えました。日本では、妊娠していても代わりに働いてくれる人がなかなか見つからないため仕事をしなければならず、畜産現場で力仕事をする場面も多々あります。これらのことは、どこの国でも女性がぶつかる問題だと思い、女性も活躍できる環境づくりが海外でどう工夫されているのを知りたいと思ったからです。

②実際にニュージーランドで研修を行い、テーマとキーワードから導かれた答えは、NZは妊娠しても他のスタッフが仕事内容を把握しているため、滞りなく農場が動いていました。また、出産後は、ベビーシッターや祖父母が面倒を見てくれるため、出産後も女性がすぐ仕事に復帰しやすい環境が整っていることが分かりました。妊娠中、人獣共通感染症にかからないよう防疫を徹底した上で、体調に合わせて仕事をしている強い女性もみられました。

③日本の畜産（酪農）も、女性が働きやすい安心して妊娠出産できる環境を整えていくべきだと思いました。妊娠、出産の場合、酪農ヘルパーを雇うことがありますが、日本ではヘルパーが不足しているのが現状です。また、ベビーシッターに子供の面倒を見てもらう方が酪農家のライフスタイルに合っていると思いますが、日本ではまだあまりベビーシッターが普及していません。この酪農ヘルパーとベビーシッターの人員を確保するためには、収入や社会的保障が確立され、安心して働ける環境が必要不可欠だと思います。これらの職業が普及してくる

ことで女性が畜産業をする上での障害が取り除かれると私は考えます。

4 ニュージーランドの農業を 目の当たりにして考えたこと

まず初めに思ったことは土地の広さです。上空から見ても放牧地ばかりと言っているほど広大でした。日本のような牛の休息場になっている牛舎はなく、牛舎の中にあつたものは搾乳室のみでした。牛の生活場所は放牧場で、のびのびと過ごしていて、幸せそうだなと感じました。日本でもそのような放牧を…と言いたい、広めたいところですが、日本には、放牧が出来る土地の確保、NZのように涼しい環境ではないため、さまざまな問題が生じます。NZのやり方をそのまま活かすことはできませんが、日本には、日本にあったストレスのかからない酪農の方法を模索し、各地域の環境に適した飼育方法を考える必要があると思いました。

また、日本は、後継者不足問題があるのに対し、NZは農業をしたい人がたくさんいるという現状に驚きました。後継者だけではなく、日本ではヘルパー不足の地域も多くあります。日本の畜産業は、大変だ!というイメージが世間の人には強いと思います。そのイメージを少しでもなくすため、畜産業に興味を持って楽しいものだと思ってもらうためにも、教育ファーム活動はとても重要で、もっと全国各地で盛り上げていくべきだと思いました。普段体験できないことだからこそ、興味を持たせられる、家畜の存在を知ってもらいたい機会にしたいと思いました。

これらのこと以外にも、女性が畜産業をしやすい環境づくりや、仕事をする上でのジェンダーギャップのない環境づくりを考え、畜産業がしたい!という意志の強い人が増えるように日本の畜産業の発展につながる活動をしていきたいです。

5 畜産アンバサダーとして 日本に広めていきたいこと

【どういうことを、なぜ広めたいのか】

①女性が畜産業をする上で障害となる、妊娠、子育て、力仕事などの仕事に対する障害を、男性やパートナーにっ

かり理解してもらうこと。

②男女それぞれの意見を尊重し合うことで、ジェンダーギャップをなくすこと。

③畜産業の魅力（家畜の魅力、農家の魅力）の3つを広めたいです。理由は、日本では妊娠した場合、出産後の仕事のフォローやサポート環境があまり整っていないと思ったからです。

仕事をする上で、もっと女性の意見を取り入れてもらい、女性が仕事をしやすい環境づくりが進めばいいと思います。家畜、農家の魅力を知ってもらうことで、少しでも畜産業に興味を持ってもらえると考えています。

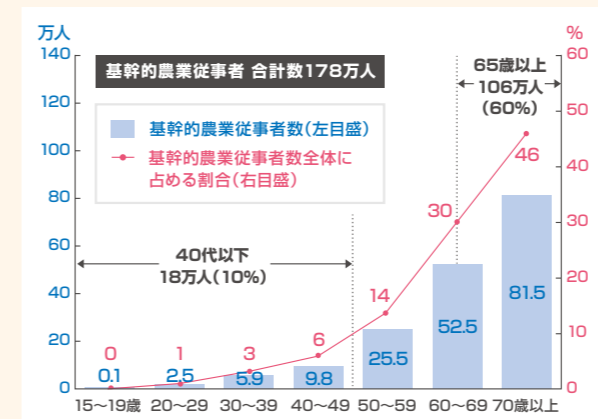
【それができると、畜産業はどうなっていくのか】

- ①女性でも安心して畜産業が出来るので、女性経営者が増えるかもしれない。
- ②畜産経営において女性の意見が加わることで、今までにない経営が生まれるかもしれない。
- ③年々高齢化が進み後継者が減少の一途を辿っている今、ヘルパーなどの畜産業関係の仕事をしたいという人を増やすことが出来るかもしれない。

【女性が活躍する理想の畜産業はどのようなものか】

日本は男性が上位に立つ経営が多くみられます。そこで、ジェンダーギャップを無くし、女性が妊娠、出産しても安心して仕事出来る女性が意見を出しやすい職場環境を整えていくことが大事だと思います。また、教育ファーム活動をとって畜産=男性、きつい、大変というイメージを払拭し、女性が中心となって体験活動や講話をすることで女性でも畜産業が出来るというイメージを持たせ、次の世代を担う女性を増やせる活動になると思います。

年齢階層別の基幹的農業従事者数(平成24(2012)年)



出所:農林水産省「農業構造動態調査」(組替集計)

6 自分の夢、これからやりたい事

私の夢は、実家で経営している酪農を継ぎ、祖母の名付けた楽しい農業という意味の「楽農」を自分の経営スタイルにし、同時に楽農を広めることです。そのために次の2つのことに取り組みたいと思います。1つ目は、NZで学んだ酪農を日本でも広める事です。2つ目は、子どもたちに酪農を少しでも知ってもらい酪農の楽しさ、牛の魅力を知ってもらう事です。牛は普段は穏やかで、のんびりしていますが、そんな牛のことを知ってもらって、もっと牛乳を飲んでもらいたいです。口の周りに牛乳を付けて、「おいしい!」と言ってもらえることが経営をする上で自信につながります。



←この看板にあるように
楽しい農業をしたいです!!

7 畜産業を目指す仲間たち、 後輩たちにメッセージ

海外の農業経営、規模の広さなど、実際に行ってみるべきだと思います。自分の考えとは違う多くのことも学べました。また、各地域の農業をする環境の違いを本やインターネットを使って見るのもいいですが、現地でもしか学べないこと、その場の空気に直接触れることが、一番いい経験になりますし、自分の自信にも繋がります。全国各地に沢山の素晴らしい仲間を作って下さい!!

「ニュージーランドに学んだ農村女性の役割と活躍について」

「未来の畜産女子育成プロジェクト」

この研修にメンターとして同行させていただくにあたり、日本の未来の畜産女子はどのように育まれるべきか？という事を考え続けている。

私は実家に就農して14年になるが、これまで酪農をしている上で「女性」はさほど重要なキーワードではなかった。

寧ろ若い頃は「嫁（婿）はまだか?」、結婚して娘を授かってからは「2人目ないと子供がかわいそう」、酪農関係の世界は父世代の大先輩ばかりで自分はいつまで経っても「〇〇牧場の娘」であり、更に家事育児は基本的に「おかあさん」の仕事…が当然の農村地域に暮らしていると、家娘が家業を継ぐことがそんなに大変なのかと女性である事は不利だと思っていた程だ。

過疎や高齢化による人口減少問題も表面化している。今後10年で地域内に後継者がいる酪農家は我が家を含めて2戸しかない事も、早急に対策を講じなければならない課題である。

そのような視点から酪農大国ニュージーランドで実際に多くの視察をし見聞すると、かの国は女性が様々な場所できいきと輝いて活躍している国でもあった。

ニュージーランドは1893年に世界で初めて女性の参政権を認めた国であり、現在歴代4人目である女性首長のジャシンダ・アーダーン首相は38歳という若さ。出産後6週間の産休を終え現在職務に復帰している事は日本でも注目されて記憶に新しい。

この事について国民はどう受け止めているのだろうと、滞在中に出会った人数名に聞いてみたがネガティブな意見は全くなく、更に彼女が未婚の母である事についても少なくとも私が話した人達にとっては大した問題ではなさそうだった。結婚は本人たちのつながりで、家や土地へのこだわりは日本ほど濃密ではないのだろう。

研修で出会った畜産関係の女性達も同様である。

子育てしながら農場のマネージャーを務め、様々な若手農業組織のリーダーでもある Linnet Burns は、結婚や出産、育児が仕事のハンディになる事はないと言う。農場では仔牛および育成牛の飼養管理と事務的な仕事を担当していたが、農場の全ての牛にはIC チップ内蔵

の耳標が取り付けられており個体毎の投薬歴や繁殖の確認の他、900頭の搾乳牛群の分娩後の乳量や乳成分などの情報もアプリを使って手元のスマートフォンで把握する。自分の担当以外の部分の情報もきちんと共有出来ている事から彼女が「農家のお母さん」ではなく、経営に欠かせない「ひとり」である事がわかる。

Alexis Muir は銀行で資金を貸した農場の経営が良かったかどうかをチェックし時に農場へ行ってアドバイスする部署で働きつつ、彼女自身も婚約者と農場経営をしている。ニュージーランドにも高齢の男性農場主は多く、仕事に就いた当初は女性で若い彼女の話は誰も聞かなかったという苦労話をしてくれたのだが、発想の転換や新しい事にチャレンジし続け結果を出す事で、27歳の現在では多くの顧客からの信頼を得ている。「大型の機械を扱う事が多い畜産業で確かに力仕事は男性に比べて大変だけど、女性にも使いこなせる姿勢やコツはある」と、明るく話してくれた。

Mo Topham は奨学生としてリンカーン大学を卒業後、4年間農場コンサルタントの経験を積んだ後夫 Simon と共に両親の農場をリースして経営する傍ら、引き続き酪農コンサルタントの仕事も続けている。夫妻にはまだ子供はいないが、デイケアやナニーという子守をしに家に来てくれるサービスがあるので、彼女が今後出産や育児の理由で職業や人生を変える必要はなさそうである。

ニュージーランド全体では畜産経営「主」の9割は男性である。しかし経営方針や業務における役割分担などは、男女が良く話し合い両者の合意を確認してから決定され、これは日本の農家ではまだ少ない例だ。

子育てしやすい（女性が生きやすい）社会を創る事は畜産業に関わらず重要だが、同時に歴史的、文化的な要素が複雑に絡み合っていて今すぐに改革するのはとても難しいと、私は自分の日常や（地方・都市部に関わらず）同世代の女性の友人、知人から聞こえる声の中で実感している。

ニュージーランドでは、女性達は皆、今の彼女達になるまでに一生懸命勉強し、経験を積み、努力していた。そしてその彼女達を認め、受け入れるパートナーや社会の空気と云った男性側の意識の両輪で成り立つ公平の

世界であった。

「原始、女性は実に太陽であった。～中略～ 今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のやうな青白い顔の月である」

と綴ったのは明治の女性解放運動家の平塚らいてうだが、かつて平等を手にした日本の女性は、今その「平等」の前に必要以上に苦労しているようにも見える。

男性と同じ立場で同じくらいの仕事をするために、家事や育児、教育から交際まで全て片付けてからでない社会に出て行けないのが日本の多くの働く女性の現状である。

その中で、世間がどうしても目的に向かって自ら行動し、前進しようとするニュージーランド女性の強さは私達も見習うべき部分だと思う。ひとりひとりの女性の意識が、女性が活躍できる社会全体の形成につながる要因のひとつなのだろう。

今回研修に参加した女子高校生たちも、将来は社会に出て仕事や家庭など大きな人生イベントに遭遇するはずだ。その時にこの事業での体験が本人の糧になる事を願うし、また私自身も、彼女たちが農村や畜産の世界に入って来た時に、少しでも快適にその能力を発揮出来るような環境が整っているよう、微力ながら貢献していきたい。

まずは海外へ一歩飛び出した勇気ある若き畜産女性の卵が、これから孵化、成長し、生産の現場で同業者として再会する事は、今の私の大きな楽しみのひとつである。

1 はじめに

ニュージーランド（以下、NZ）は、国土面積が日本の約7割と小さいものの、温暖で穏やかな気候を生かした周年放牧によって低コスト生産を実現し、少ない泌乳量も飼養規模の拡大でカバーしてきた。人口が少なく国内市場規模が小さいため、国内生乳生産量の9割超が輸出に仕向けられる。

これに対し、農地の確保が困難な日本では、戦後、国内需要拡大を背景に、酪農経営の大規模集約化と生乳流通の合理化が国策的に推し進められてきた。しかし一方で、輸入飼料への依存、環境・動物福祉への配慮等、多くの点で問題を抱えるに至った。また、牛乳の風味よりも効率を追求した画一的な乳質・製法の牛乳が席巻し、世界的にも特異な消費者市場を形成している。TPPやEPAといった農産物市場へのグローバル化圧力が高まる中で、酪農経営と牛乳の画一化・ガラパゴス化は大きな不安要素である。

さらに、担い手確保も喫緊の課題であり、畜産現場における若者の参入や女性の活躍、その環境整備が急がれる。しかし、世界経済フォーラムが発表した男女格差を表す指標「ジェンダー・ギャップ指数（GGI）」によれば、NZが144か国中9位なのに対し、日本は114位と、先進国の中でも女性の社会進出の遅れが目立つのが現状である^[9]。

本事業は、こうした状況を踏まえ、国際市場で強い競争力を持ち、女性の活躍も目覚ましいNZ畜産の現場に、将来担い手となりうる農業女子高校生を派遣し、現地視察や女性農業者との交流を通して、日本酪農の発展のヒントを得ることを目的に実施された。以降は、筆者がメンターとして本事業に参加して得た成果として、日本とNZの酪農の相違点及び参考とすべき点について考察を述べる。

表1 日本とNZの比較

	日本	NZ
国土面積(万km ²)	37.8	26.8
人口(万人)	1億2650	488
主な飼養形態	舎飼い	放牧
飼養戸数(戸)	1万5700	1万1700
経産牛総頭数(頭)	85万	486万
平均飼養数(頭)	80	414
平均泌乳量	8,500	4,259
GGI	第114位	第9位

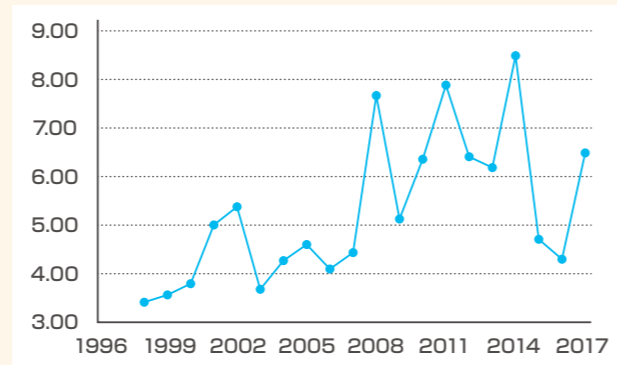
出所: LIC & Dairy NZ、総務省、農林水産省、Global Gender Gap Report 2017
注: 数値は2017年時点

2 研修成果と考察

(1) 乳価形成システムとそれに由来する乳質評価基準

日本の生乳は、国内消費を前提とした飲用向けが多い。乳価形成は、生産費や需給動向を考慮の上、指定団体と大手乳業メーカー間で価格交渉が行われ、飲用・加工用ごとの用途別乳価が設定される。他方、NZは海外輸出を前提に、生産生乳の9割以上が乳製品に加工される。特に、全粉乳とバターは世界貿易の6割強を占めている。輸出乳製品仕向けが多いことに由来して、歩留まりを重視した乳質評価基準である「ミルクソリッド（乳脂肪・乳たんぱく質の総量、以下、MS）」が採用されている点に大きな特徴がある。乳価は、国内集乳シェアの大宗を占め、世界4位の売上を誇る巨大乳業メーカー・フォンテラがプライスメーカーとなり、MS1kgあたりの乳価が決定される。したがって、同量の生乳でもMS含有量によって乳代は異なる。こうした理由から、日本で飼養される乳牛の99%が高泌乳のホルスタイン種であるのに対し、NZはホルスタインとMSの多い乳質のジャージー種のクロスブリードである「キウイクロス」が採用されている。また、輸出がほとんどのため、国際市場の影響を受けて乳価が乱高下しやすいことも特徴として挙げられる。2014年、中国で乳製品の在庫過剰が発生し、乳価が急落した際には、多くの酪農経営が非常に苦しい状況に追い込まれたとMo Topham氏は話した。当面は中国市場における乳製品需要の急拡大に支えられて、乳価は堅調に推移すると考えられるが、特定の輸出先への過度な依存により再び急激なキャッシュフロー悪化を招く可能性は否定できない^[4]。

図1 NZ 乳価の推移 (NZドル/kg MS)



出所: LIC・Dairy NZ^[7]

(2) 収益構造と変化

NZで安価な乳製品供給を可能にした要素として、第一に物財費の低さが挙げられる。特筆すべきは、安く抑えられた飼料費である。穏やかな気候に支えられ、牧草の生育時期に合わせた季節繁殖と周年放牧による合理的な経営が定着しているため、牛舎やパーンクリーナー等の設備が必要ない。主な設備投資はパーラーとフェンスのみの場合が多く、農業機械も中古市場が充実しているため購入費用を安く抑えられる。採草等の大型機械を要する作業はコントラクターに委託する経営も多い。

第二に、放牧管理の省力化による労働経費の削減である。集約放牧技術や電子耳標を用いた個体識別システムの導入が進んでおり、元国会議員で現在農場経営のEric Roy氏によれば、一人当たり平均150頭の牛群管理が一般的であるという。加えて、以前は人件費が低かったことも大きかった。しかし、最低賃金はわずかこの15年ほどで2倍以上に跳ね上がっており、人件費の上昇に伴って、更なる集約化と省力化に向けた努力が重ねられている^[6]。

さらに、酪農の中心であった北島では、地価上昇と物理的な限界に直面して草地面積および飼養規模の拡大が困難になってきたため、近年は補助飼料や飼料作物の利用による個体乳量や放牧集約密度の向上を図る経営が多くなっている。ただし、補助飼料の代表格であるPKE（パーム油核粕）は、マレーシアやインドネシアから輸入されており、完全な草地型酪農に比して飼料費が高くなる上、今後補助飼料給与が増えれば、国際価格変動に左右されやすい収益構造となる可能性が考えられる。

こうした変化を踏まえた今後の展望について複数の視察先で聞いたところ、「これまでのコスト競争一辺倒の状態を脱し、今後は品質競争に移行すべきである」との意見が多く聞かれた。しかし、そのためには、乳文化の歴史が浅いアジア諸国を主な乳製品輸出先とするNZにとって、価格だけでなく品質を求める需要者を一定数確保することが課題となるだろう。

(3) 農業者のコスト意識

酪農家が利益増を考えたとき、生産量を増やすか、単位当たり生産コストを削減するかという二方向が考えられる。日本の場合は、戦後復興による畜産物需要の急拡大を見込まれたことから前者が選択され、品種改良による個体乳量増、濃厚飼料の多給と舎飼いを基本とした規模拡大路線によって、生産乳量を飛躍的に高めてきた。一方、NZは、

国内需要が少ないため輸出に特化せざるを得ず、徹底的なコスト削減を図ることで国際市場における価格競争力の獲得に成功したという経緯がある。

今回の現場視察やインタビューでも、その徹底したコスト意識の一端を垣間見ることができた。本来、農業経営にも一般企業経営と同様のビジネス感覚が求められて然るべきであるが、日本のような小規模家族経営では経営と家計が未分離である場合が多いのが実態である。しかし、NZでは、酪農家自身が日々の生乳生産に係るコストベネフィットを細かく把握しており、具体的な数字を問う質問に対してもデータを示して明確に答えてくれる姿が非常に印象的であった。



写真1 データを示しながら説明するMo Topham氏

(4) 土地に対する考え方と経営継承

日本の農業・農村は、独自のイ工制度や家業といった考え方に支えられてきた。先祖代々の土地や建物を守るという意識が強く、兼業化や離農しても土地持ち非農家化するケースが多い。そのため、土地の集積が思うように進まず、耕作地・飼料基盤の拡大が実現しなかった歴史を持つ。

その点、NZでも家族内経営継承を望む人も少なくないようだ。中には数世代にわたり同じ家系で土地を所有し、農場を営んでいるところもあるという。しかしながら、日本と比べると、農地は本来の経営資源としての意味合いが大きく、土地との情緒的な絆や繋がり希薄である。そのため、家族内経営継承だけでなく第三者への土地・農場の売買もさかんで、農地の流動性は高い。現地の新聞や業界誌には、販売中の農場を紹介する広告が掲載されていた。

肉牛や羊、鹿など4農場を経営するEric Roy氏は、「今一番の楽しみは様々な農場を作って発展させることであり、そうしてゆくゆくは農場を売却し、老後資金に充てるというのがNZの農場経営者の一般

的なライフプランになっている」と語っていた。起業して、利益を維持・向上させながら事業を拡大し、最終的には事業を売却または譲渡するようなビジネスライクな経営感覚は、日本型酪農経営との大きな相違点であろう。売り出された農場にすぐに新たな買い手が付くことも、酪農がNZの基幹産業であり、一般的な職業選択肢の一つとして捉えられていることの証拠かもしれない。

(5) 農業の担い手確保

とはいえ、農業が身近でなかったり、知識として知らなければ、若者が職業選択において「農業」を選ぶ余地は少ない。NZでも都市と農村の隔絶は徐々に進んでおり、後継者の不足は重要課題の一つだそう。しかしながら、日本に比べ、次世代育成の環境が整っているという印象も受けた。

まず、NZには、Young Farmersと呼ばれる若者の農業コミュニティやTeen Agという高校生農業グループが存在する。Young Farmersは農業従事者でなくても参加でき、メンバー同士での交流や情報交換を行う「横の繋がり」だけでなく、Teen Agの高校生に対してYoung Farmersの年長者が農業の知識についてのレクチャーやアドバイスを行う「縦の繋がり」的な取り組みも実施されている。農業コンサルタント担当の女性銀行員で、自らも農場で働くAlexis Muir氏も、こうした次世代育成の取組みに貢献しようと、学校や若者・女性グループの会合に積極的に出向いて農業を知る機会を提供し、若者のキャリア選択肢に農業を加えてもらえるよう努めているそうである。

他に次世代育成として特徴的なのは、シェアミルク制度である。シェアミルクは、土地や設備を所有する農場経営者と契約し、搾乳等の作業を代行することで報酬・費用を経営者とシェアする。その比率は契約内容によって様々だが⁽⁷⁾、いずれにせよ莫大な初期投資なしに酪農に参入でき、経験を積みながら就農資金を蓄えられるというメリットがある。NZでは、まず既存の農場のアシスタントとして就職し、やがて資金が溜まったら自分の牛群を買い、農場の設備を借りて飼養・搾乳する。そして、マネージャーとして働きながら徐々にその頭数を増やし、最終的には独立して自分の農場を持つオーナーになるという、徒弟制度的キャリアパスが体系化されている。

さらに、銀行によるサポート体制も確立している。NZでは、ほとんどの酪農家が銀行からのフィナンシャルサポートを受けている。銀行では、先述のMuir氏のように農業系の学位を持つ専門家が経営についてアドバイスを提供する。特に、環境マネジメントや家畜の取り扱いについての知識や経験に乏しい新規就農者にとって、環

境マネジメントや安全性の確保は難しく、大きな問題である。彼らのスタートアップをサポートすることも、銀行員の重要な仕事であるとMuir氏は考えている。

同様に、夫婦で農場を経営する傍ら、コンサルタントの仕事もこなすMo Topham氏は、奨学金を利用してリンカーン大学に進み、在学中長期休暇を使い3農場で研修経験を積んだ後、Dairy NZに農業コンサルタントとして就職した。農業を志す学生に対する奨学給付金制度も充実しており、リンカーン大学やマッセイ大学、カンタベリー大学等で農業の学位を修めた卒業生には、こうした銀行員や農業コンサルタントを目指す人も多く、銀行側も積極的に採用しているという。農業経営をサポートする専門性の高い人材と企業が充実していることも、経営安定に大きく貢献しているようである。

(6) アニマルウェルフェアや環境への配慮

日本の酪農・牛乳市場には、アニマルウェルフェア（以下、AW）や環境への配慮といった意識はまだまだ弱い。しかし、世界的な市場の成熟に伴い、AWや環境に配慮した商品に対する消費者の関心が高まってきている現在、海外輸出が多いNZにとっては重要な課題の一つである。NZでは、酪農家自身がそれを認識していることを肌で感じた。

NZ畜産の特徴でもある放牧は、日本ではAWの観点から評価されることが多い。一方、NZの場合はもともと飼料費節減を目的として定着したものが、結果としてAWにも寄与しているという印象である。ただし、視察先の畜産経営者たちは、いずれも「日々家畜にしっかりと目を配って丁寧に育てれば、家畜もその分返してくれる」という考えを持っていた。与えるエサは十分か、体調はどうか、毛並みや行動に異常はないか等、毎日チェックを怠らなければ事故率も下がるし、乳量も安定するからだという。AWは、時に動物愛護と混同されたり、ともすると感情的な議論になりがちだが、倫理的かつ合理的に家畜と向き合い、経済動物として適切に接するスタンスがうかがえた。

そして、同様に、近年ますます重要になりつつある問題として、環境マネジメントが挙げられる。畜産は、土地開拓・草地拡大のために低木を伐採する。根を張る樹木の減少は土地の水涵養機能の低下を招き、さらに飼養頭数が増えるにつれて糞尿による水質汚染や窒素過多が問題視されるようになった。NZでは1991年に資源管理法が成立し、現在は環境省が設けた環境基準やガイドラインに則って各地域行政がモニタリングを行っている⁽⁸⁾。土壌の水分含量が多い地域では、ぬかるんだ状態での放牧は表土侵食による草地へのダメージ

が大きいので、排水対策が欠かせない。過放牧防止のために細かく牧区を区切って輪牧したり、とりわけ表土流失が起こりやすい川沿いの土地にはフェンスを設けて家畜が近づけないようにしたり、草地の一部に植林するなどの対策が実践されている。また、視察先のSouthern Cross Produceの野菜加工場では、野菜洗浄に日量10万リットルの水を使うそうだが、その大半は敷地内の浄化槽で処理された再生水が利用されていた。フォンテラの乳製品工場でも、使用した水をただ溜水するのではなく、塩素処理や逆浸透を用いた新たな再生水システムを導入しているという。土地・水資源に依存した草地型畜産が基幹産業であるNZだからこそ、環境負荷が高いとされる畜産の現場以外でも、徹底して環境対策が講じられてきたと考えられる。

(7) 女性の活躍できる畜産

日本政策金融公庫は、女性の経営者・役員・管理職がいる農業経営は、そうでない農業経営に比べて収益性が向上する傾向があると報告しており、畜産現場における女性活躍への期待はますます高まっている⁽³⁾。しかし、実際には環境整備が十分進んでいるとは言い難い。

NZといえば、世界に先駆けて女性参政権が認められた国として広く知られ、最近では最年少の女性首相が誕生し、任期中に出産、育児休暇を取得したことも大きな話題を呼んだ。では、畜産の現場ではどうだろうか。今回の研修では、5人の女性農業者に話を聞くことができた。

まず、銀行員Alexis Muir氏は、女性農業者の課題に言及し、「Southland農業はもともと高齢男性が多く、男社会で保守的なコミュニティなので、若い女性は酪農に適さないという考え方の人や若い女性からのアドバイスを受入れがらない人も少なくない。自分の場合は、銀行員も農場の仕事も、周りからのサポートや評価を得られたことが大きかった」と語った。また、「自分の仕事には誇りがあるし、銀行員として、また女性として、新しいアイデアを提供できると信じている。確かに、女性の方が力仕事が悪手だったり、労働に時間がかかるといった課題もあるが、それらは一つ一つの仕事をきちんと丁寧にこなしていくことで対応可能であると考えている」と力を込めた。

Mo Topham氏は、「元勤務先のDairy NZをはじめ、フォンテラや家畜改良センターなど、畜産関連企業のマネージャークラスには女性が多く登用されているし、農場経営でも女性一人で管理しているところ

もある」とした。出産・子育てに関する質問には、友人の例を挙げ、「NZでは妊娠中、特に出産が迫った時期まで働くことはない。農家であっても産休を取れるし、既存の他のワーカーがカバーする場合も多い。保育所は地方にはないが、農場ではナニー（ベビー・シッター）に子供を預けて復職も可能」とし、ライフステージに合わせた勤務体制にも柔軟に対応可能であると考えられる。

酪農経営のKatrina Thomas氏は、「女性は仕事が丁寧で、哺乳など子牛の世話に向いていると思う。自分も子牛を担当しているし、他にもそういう農場は多い」と回答した。同じく夫婦で酪農経営を行うLinnet Burns氏は、夫婦とワーカーで農場作業を分担し、子牛管理と得意だという事務仕事を行っていた。また、夫婦で羊・肉牛農場を経営するJackie氏も含め、女性農業者5人全員から「経営における重要な意思決定の場面では、男性と女性が対等に意見する」という旨の回答を得た。以上から、NZの女性農業者は、日常的な作業においては、女性ならではの強みや自分の得意分野を生かしつつ、農場全体の経営管理にも責任と影響力を持っていることが示唆された。



写真2 子牛用牛舎にて Katrina Thomas 氏

3 所感

一般的に言われるように、NZ畜産の成功は、穏やかな気候や豊かな土地資源といった地理的要因に依存した低コストの集約放牧によるところが大きいだろう。条件の異なる日本でそのまま導入するのは難しい。しかし、学ぶべき点も多い。NZ畜産は、輸入飼料依存で収益性が悪化し、規模拡大も頭打ちとなった日本の酪農に、風土に合った低コスト経営という新たな方向性を提示している。

帰国後、間を置かずして発生した北海道胆振東部地震では、高泌乳に特化した大規模酪農経営が電源を失って搾乳が滞り、乳房炎が多発した結果淘汰を余儀なくされたというニュースがメディアを騒がせた。そんな中、道内でもNZ式放牧を取り入れたり、マイペース酪農と呼ばれる低投入型経営を実践する一部地域では、高泌乳型経営に比べて、飼料不足や乳房炎の被害が少なく済んだという。

現在、北海道酪農は、日本全体の生乳生産の半分以上を占めるまでになっている。都府県の酪農経営の廃業に歯止めがかからず、今後この傾向は加速的に進む可能性が高い。そうした点を考慮しても、ある程度まとまった飼養基盤の確保が可能と思われる北海道はもちろん、都府県でも、放牧の可能性について今一度見直す必要があるのではないだろうか。

さて、研修報告にあたり、高校生たちは4つのテーマに沿って成果をまとめた。筆者もそれに倣い、個人的なテーマとして「NZ畜産は、なぜ補助金なしでここまで発展することができたのか」を掲げて現地研修に臨んだ。NZでは、1980年代に大規模な政策転換があり、規制改革により農業をはじめとする多くの分野で行政支援や補助金が打ち切られ、「小さな政府」化が断行された。例えば、日本で同様の補助金全廃が起こったら、今よりも悲惨な状況に陥っていたことは想像に難くない。しかし、NZ畜産は予想よりもずっと少ない後退で踏みとどまり、現在では国際市場を席巻している。その過程に何があったのか。事前準備として自分なりに文献を渉猟したが、結局「補助金農政の廃止と市場原理の導入により、農業も競争化が進み、効率化を徹底せざるを得ない状況に追い込まれたことで、かえって国際競争力強化につながった」という以外に、その試行錯誤の過程について明確な記述を見つけることはできなかった^[1]。そこで、今回複数の訪問先で農場経営者たちにもこの疑問をぶつけたが、やはり「国の援助はないし、求めてもない」と明確な回答は得られなかった。しかし、どの経営者も生き生きとして自信に満ちており、その自立心と自負こそが一つの答えであるように感じた。つまり、補助金が打ち切られても、乳価が下がっても、自分で何とかしようという農業者の自立心とビジネスマインド、そして実際に自力で危機を乗り越えてきたという事実が自信につながり、NZ畜産の発展を支えてきたのかもしれない。ただし、これを当初の疑問に対する帰結とするにはあまりに漠然としているので、所感にのみ記すことにし、今後の課題としたい。今回の研修で見ることができたのは、あくまでNZ農業の一端だが、世界を席巻する畜産大国の底力を肌で感じられたことは、高校生にとっても筆者にとっても得難い経験であった。

[引用文献]

- [1] 昆吉則(2009)「編集長インタビュー ニュージーランドの農業はいかにして規制改革を乗り越えたか」『農業経営者』2009年8月号, pp.26-29.
- [2] 総務省(2018)「人口推計,2018年9月14日閲覧. <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201803.pdf>
- [3] 日本政策金融公庫(2016)「平成28年上半期農業景況調査関連」.
- [4] 根本悠(2015)「海外情報 ニュージーランドの生乳取引の仕組みと最近の動向」『畜産の情報』2015年3月号, 2018年9月22日閲覧. <http://lin.alic.go.jp/alic/month/domefore/2015/mar/wrepo03.htm>
- [5] 農林水産省(2018)「畜産統計」, 2018年9月14日閲覧. <http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/tikusan/attach/pdf/index-5.pdf>
- [6] Employment New Zealand, “Previous minimum wage rates”, 14 Sept, 2018. <https://www.employment.govt.nz/hours-and-wages/pay/minimum-wage/previous-rates/>
- [7] LIC & Dairy NZ (2017) “New Zealand Dairy Statistics 2016-17”, pp.7-8, 20-23, 49.
- [8] Ministry for the Environment, “New Zealand's Environmental Legislation”, 22 Sept, 2018. <http://www.mfe.govt.nz/publications/environmental-reporting/state-new-zealand%E2%80%99s-environment-1997-chapter-four-environment-4>
- [9] World Economic Forum (2017) “Global Gender Gap Report 2017”, pp.10-11.

1 総評

ニュージーランドでの研修はとても有意義であった。参加生徒の成長はめざましく、これから日本で畜産を担う人材育成という観点からもとても充実した研修であった。そこで、第一回目の引率として参加させていただいた立場から、今後もぜひこの事業を継続して欲しいという願いを込めて下記項目ごとに研修の成果と課題をまとめた。

(1) 参加生徒について

JAECが選抜した生徒は全国から20名である。応募総数75名の中から作文、履歴書および電話面接によって選ばれた。3年生10名、2年生9名、1年生1名という割合で、研修中はこの学年バランスがとても良かったと感じる。やはり3年生は知識も畜産に対する将来像もはっきりしている生徒が多いため、質問の場では非常に積極的に動くことができた。また、研修のはじめはおとなしかった3年生も、研修終盤には後輩を引っ張っていかなくてはならない責任感がさりげない動作の中にも見られるようになった。これは、1, 2年生の中には知識が未熟な生徒もおり、そんななかでも必死に追いつこうとする姿が見られ、この姿が先輩を先輩らしくする良い刺激になったように感じる。総じて、それぞれの学年ごとにしっかりとその役割を果たすことができた。

選抜された生徒は、それぞれ知識のレベル、個性はさまざまであったが、誰もが研修に対する意欲は非常に強い生徒達であった。そのため、きっかけさえつかむことができれば質問を積極的に行う姿勢が見られた。しかし、研修終盤になると長旅の疲れもあり、質問の輪から外れてついて行くだけの生徒も見られ、意欲を継続させる声かけが必要であった。また、集団行動についても少し指導しておくべきであったという反省点もある。

(2) 事前研修について

東京オリンピックセンターで行われた事前研修は、全国から集まり今後活動を共にする生徒の初めての顔あわせの場であった。牛や家畜に対する思いをそれぞれ語り、わずか3日間の研修で非常に親密な空気になった。女子高生の団結力は素晴らしい。また、ニュージーランド大使館の訪問については生徒に良い緊張感が生まれ、研修に対する責任感が芽生えたとても良

い機会であったと感じる。

事前研修の課題としては、ニュージーランドでの現地研修中に、予備知識がなく質問が中途半端な回答のまま終わってしまったり、意図していた回答と異なるときに臨機応変に質問を変えることができなくて、消化不良なまま質問時間を終えてしまったりする場面が見られたことである。学習進度は学年や学校によってバラバラであるが、充実した今後につながる研修をするためには畜産に関する最低限の知識が必要である。今回は事前学習を各自に任せていたが、残念ながら自主的に予習をする習慣が身につけている生徒が少ないため、次回の研修では一定の課題などを用意し、自主的に学習する機会を設ける必要がある。

英語の学習については、もう少し時間をとる必要があるように感じた。現地研修では英語力というよりも、会話力が求められた。話し始めるきっかけさえつかめれば、生徒は積極的に行動することができる。たとえば、「これは何ですか」「それはなぜですか」などの簡単な質問から会話が始まり、コミュニケーションへつながる。また、寮生活がコミュニケーション力の自信をつけるために有効であったようであるが、そのきっかけをつくれるかどうか個人差が大きかったため、その手法を身につける必要があると感じた。研修の終盤には自信がついた生徒がつかない英語でも一生懸命話そうとする姿が見られた。そのため、挨拶のしかたや簡単な質問、少しの専門用語をメンターの先生から学習できる機会が欲しい。

また、アンバサダー活動の1つである研修報告会のテーマ選定およびグループワークをもう少し時間をかけて行う必要がある。今回は4つのテーマで動くことができ、生徒は質問内容やキーワードも事前に考えられたり、質問の使い回しができたりしたため分かりやすく、取り組みやすい活動であったため、結果として良い報告ができたように思う。しかし、研修場所によって質問しにくい内容や重複するキーワードもあり、あまり生徒が柔軟に対応できていたとは言えない部分もあったため、運営側で研修場所から考えられるテーマをある程度事前に検討しておく必要がある。加えて、グループワークでキーワードを考えさせるときにももう少しテコ入れができたように思うため、これももう少し時間がとれると良い。また、生徒たちはこの与えられたテーマを必死にこなそうとするあまり、少し視野の狭い質問をする場面も見られ、可能であれば各個人でのテーマ選定もあるとより充実した研修になるよ

うに思う。

事前研修は本研修を充実させるもっとも重要な研修であるため、より内容を精査していく必要がある。

(3) 研修日程について

まずはじめに、寮生活はこの研修においてももっとも効果が高かったように思う。もちろんファームステイなどができれば、異文化体験として良い研修になったかも知れないが、同年代で異国の友人を作り、同じ部屋で生活する1週間は、多感な高校生の時期だからこそ経験して欲しい。もちろん生徒にとってはコミュニケーションや生活、特に食事について辛い部分もあったようだが、それも含めて生徒が一回りも二回りも成長したのはこの寮生活があったからだと感じる。生徒は寮での出来事や会話などを楽しそうに話し、最後には涙を流して別れを惜しんだようだ。この経験はどの生徒にとっても一生の思い出となるだろう。

研修先については、とても良かったと感じる。現地の牧場を見学することはもちろんであるが、なによりも畜産業で活躍し、自分の仕事に誇りを持っている人々の話を聞き、自分の言葉で質問し回答をもらうことがもっとも生徒の成長および担い手の育成に効果的であると感じた。特に女子高校生は、とても影響されやすく純粋な生徒たちばかりであるので反応が分かりやすい。これから畜産業を担う生徒たちが彼らとの出会いによって、現在持っている不安を払拭し、自分もこの業界で活躍したいと思う研修であった。具体的には、高学歴で銀行の営農指導を担当しているアレクシスさんや、自分の仕事をしながら牧場経営をどんどん大きくしようとしているモーさんなど、女性ならではの技能を生かして活躍している方の講演は、女性としての苦労や、現在持っている夢に共感する部分が多く、生徒も「彼女たちのようになりたい」と思わせるような存在であった。

また、チョコレート工場などは畜産の研修に関係ないのでという意見もあったが、畜産の研修がびっしり入っている中で、ニュージーランドのお土産として代表的なチョコレート作りを体験することは良い文化体験であり、良い息抜きになったと感じる。実際、空港などで自分たちが体験した同じブランドのチョコレートを見て生徒は喜んでいて、短い研修期間であるが、このような研修も今後も取り入れていって欲しいと思う。

クライストチャーチでの市場調査については、もう少し自由な時間を作っても良いかも知れない。町の歴史的価値や震災の影響など、ここからも学べるものはもっとあったように思う。この研修の本来の目的ではないかも知れないが、地理的・歴史的背景や日本との関係を知ること

は、農業を学ぶ上でも非常に重要なことだと思うので、今後この研修についても工夫が必要だと感じた。

研修内容は、二転三転したが最終的にはとても充実したものであったと感じる。しかし、事前にどのような場所に行くのかを生徒自身が勉強する機会があれば、より充実した研修になるだろう。

(4) ニュージーランドで研修を行う意義

酪農王国であることはもちろんであるが、ニュージーランドは女性の活躍がめざましい。現在の首相は女性であり、世界ではじめて女性が参政権を持った国もニュージーランドである。そういった点から今回の研修の舞台がニュージーランドに選ばれたようであるが、実際に研修へ参加してみて感じたことは、畜産業での女性の立場はほとんど日本と同じであり、まだまだ男性が主力だと言うことである。講演をしてくださった女性の方も、女性は経理や仔牛の哺乳など女性が得意とする特定分野での活躍にとどまり、古くから経営が続く農場では女性が営農に口出しをすることに抵抗のあるオーナーもいることを話されていた。しかし、そんな中で若い人を中心に、経営について夫婦で率直な意見を言い合うこと、勉強した知識を武器に古い考えのオーナーと対等に話し合うことなど、女性自身が自分の仕事や実績に誇りを持ち、畜産業を活性化させようと奮闘していることが分かった。これらの姿勢は生徒にも伝わり、日本における畜産業の活性化のためには自分たち自ら活動することが重要だと感じとり、非常に有意義な研修へとつながった。

また、事前研修時より生徒の間でニュージーランドのイメージは「放牧」であり、動物にも自然にも優しい畜産をしたいと考える生徒たちはそれに憧れてこの研修に参加した者も多い。その背景に、高校生は「家畜福祉」や「環境問題」を学校の学習活動の中で学び、特に普段から家畜に触れている生徒については動物に対する愛情からかその意識が強い。しかし一方で「経営」についてあまり実践的に学ぶ機会はなく、加えて、世襲制で引き継ぐ日本の経営ではなおさら経営感覚が乏しい後継者も多い。特に女子生徒は男子生徒に比べて畜産を経営していくという感覚が薄いように感じる。そのため、「経営」よりも「放牧」や「家畜福祉」に興味が高い生徒が多いのである。

ニュージーランドではまさに放牧を主体とし、自然環境に負荷をかけずに経営することに重きを置いている。しかし、北海道以外でニュージーランドのような畜産経営は難しく、日本の畜産業にそのままニュージーランドの経営方法を模倣することは現実的ではない。また現地の方も「動物福祉」のために放牧を行っている訳ではないこ

とを生徒たちも研修の中で感じ取り、畜産経営に対する意識のギャップがあることを認識しはじめた。とくにこの研修では経営やお金の話が頻繁に出され、経営ありきの畜産であることを実感する良い機会となった。

また、日本では生乳生産量をあげることが重要で畜産も大規模化が進んでいる一方、規模拡大のできない農家では不安定な単価に対し、六次産業化や付加価値をつけた生乳または乳製品の販売をすることで経営戦略としているところも多く、現代は特にその傾向にある。しかし生乳量で単価が決まる日本に対し、乳固形分で単価が決まるニュージーランドでは生乳生産量へのこだわりが日本に比べて薄く、ここにも大きな意識の違いがある。やはり、ニュージーランドでの畜産業を学ぶことで日本の畜産業へそのまま生かすことは難しいと感じた。では、これらを現場で体験することにどのような価値があるかと言えば、その地域に合わせた経営戦略をしっかりと考えていく必要性を学ぶことではないだろうか。どのような土地に、どんな社会背景や価値観があるかを知った上で社会で求められていることを考えていく。これから畜産業を担う若手として、最も求められるのはそのように幅広い知識と柔軟な考え方である。日本国内では決して学ぶことができないこれらを身につけるのに、ニュージーランドはとても効果的な国であった。

最後に、ニュージーランドで研修をすることの最大のメリットは、ニュージーランド人の優しさに触れることである。サウスランドガールズハイスクールの生徒・職員はもちろん、研修中で出会う人、町の人、誰もが温かい人たちであった。海外が初めてという生徒も多いなか、このような優しさに触れニュージーランドが大好きになった生徒も多く、反対に日本人として負けてられないと奮起する生徒も見られた。

(5) 生徒の成長と指導

誰もが一回りも二回りも成長した研修となった。おとなしいと感じた生徒は終盤には積極的に質問に行くようになり、落ち着きがないと感じた生徒は集団行動を守れるようになった。10日間という期間は高校生にとって非常に長い研修であったと思う。しかし、教員が心配したよりも生徒は疲れを見せず、同じ研修生、JAECの職員、メンターそして現地の方に支えられ、無事に乗り切ることができた時には自信に満ちた表情をしていた。特に、研修報告会という一つの目標に向かってグループワークをする際には、それぞれが質問をしたりまとめたりと誰もが手を抜くことなく一生懸命役割を全うしようとする姿は頼もしく見えた。

研修中は毎日日誌を提出するよう指導した。おそろくこの課題は記録をとることが習慣づいていない一部の生徒にとって負担が大きく、はじめは日記や感想文のみのものもあったが、書き方や疑問点などをアドバイスすることで、1日の研修で学んだことを丁寧に記入できるようになった。また、毎日添削することはかなりの労力が必要であるが、生徒が研修中に感じたことに直接アドバイスをできる機会はなかなかとれなかったため、引率者と生徒のコミュニケーションにとっても有効である。中には罫線をさらに二分して倍量の記入をしようとする生徒もあり、改めて記録の大切さを実感することができた。記録簿を改良し、今後も続けて欲しい。

今回の研修が無事に終了するうえで大きかったのはJAECの職員さんとメンターの方が生徒の心理的サポートをしてくださったことである。課題としては、今後この研修を続けるにあたって、場になじめない生徒が出てきた時の対処である。今回の研修では幸いトラブルがなかったが、長旅となると疲れからトラブルはつきものである。特に寮での生活を辛く感じてしまうと研修自体が辛いものになってしまう。研修が必要だと感じたことは、大人による生徒の表情観察ももちろんであるが、生徒同士がお互いの体調や気分を意識することである。班行動をさせ、点呼を頻繁に行うことで自分の班のメンバーを意識し、様子がおかしい場合は報告する。そのようなシステムを事前研修から身につけさせておくことが、トラブル回避につながるのではないかとと思う。

2 今後に向けて

研修をとおりて感じたことは、現地研修はあっという間だということである。毎日研修計画がびっしりであるため、とてもハードスケジュールであった。そのため、研修報告をまとめる時間はもちろんであるが、事前にきちんと準備をさせることと、学んだことをきちんと消化する時間の確保が今後の課題である。

最後に、第一回目の研修引率者として、この研修は生徒の成長という観点からも、将来の畜産の担い手育成という観点からも非常に良い研修であったと感じる。ぜひ今後も継続し、より多くの高校生にこのような機会を与えていただきたい。また、今回研修に参加した第一期生の生徒たちが、これをきっかけにより多くの研修を積み、畜産業で活躍、さらには畜産業をもっと活性化させようという活動を今後も続けていってほしい。

7 畜産アンバサダー活動結果

畜産アンバサダー活動とは、女子高校生たち（参加者）が、本プロジェクトを通じて学んだことや、考えたアイデアについて自分の言葉で語り、表現することで、畜産の魅力と大切さを広く伝え、畜産を目指す若者を励まし、また、今畜産に従事する農業者には、女性の起用と活躍の場を積極的に設け行くことの重要性を訴えました。

畜産アンバサダー活動



畜産アンバサダー実施期間

2018年10月～2019年3月

実施回数

- 国際化対応営農研究会 5回
※全国5ブロック各1回
- 学校内外 28回

動員数

- 総数 8631人
- 母校生徒 6626人
- その他生徒 325人
- その他の人 1680人

畜産アンバサダー活動内容

20人の畜産アンバサダーは、ニュージーランドに渡航する前に、それぞれがニュージーランドで学びたいことや現地のイメージを考えておいてもらいました。実際に現地の畜産を目の当たりにし、農業者や畜産物関連業者への聞き取りを通じて、自分の思っていたことと比較し、その上で、これからの日本の畜産に必要なことをもう一度考え直してもらいました。その中で、自分なりに畜産に対するアイデアと意を取りまとめ、その考えを発表することとしました。

それぞれ母校では、同級生や下級生たちに対して、ニュージーランドでの学びを通じて考えたことを発表しました。また、学校によっては、新年度入学する予定の中学生たちや文化祭で来校している一般の方々に啓蒙する事ができました。

地域の団体からの依頼に応じて、畜産アンバサダーとして出席し、畜産の魅力をしっかり発表する機会もありました。

そして、全国5会場で行われた、国際化対応営農研究会では、各会場に4名の畜産アンバサダーを派遣し、それぞれ自分言葉で畜産の魅力について発表をしました。

そこで、会場にいる方々にアンケートを取りました。実際に畜産アンバサダーたちの発表を聞いて、どのように感じたかを、そう思う、そう思わない、どちらとも言えない、の3つの項目でお答えいただきました。

その結果、いずれの項目においても、8割以上の人が、畜産アンバサダーの発表に好感を持ち、発表内容にある程度共感したことが分かりました。

本研究会の参加者の多くは農業経営者または農業従事者であり、農業現場をよく知る人が多数いました。個別に話を聞くと、若い女性が畜産を盛り上げようと頑張っている姿に強く心打たれたという感想が多く、こういった事業を通じてますます畜産を目指す人を増やしていってほしいという激励がありました。

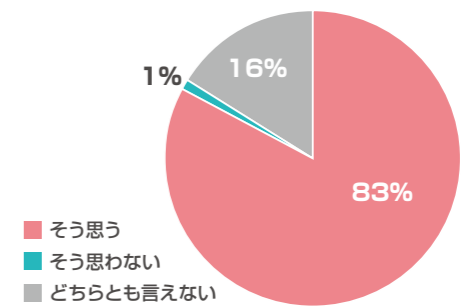
また、一方で、「そう思わない」と答えた方の中には、実際に海外の畜産をよりよく知るためには長期間の研修が必要で、実際に現地で農作業に従事してこそ理解が深まるという意見もありました。

国際化対応営農研究会でのアンケート結果

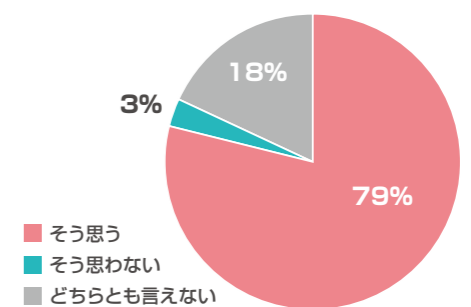
回答数 228

有効回答数 174

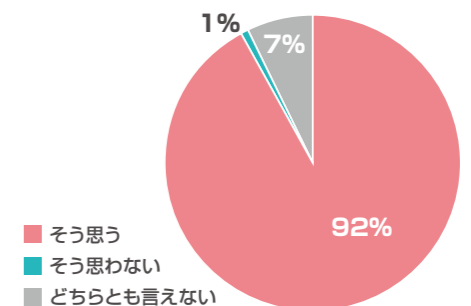
畜産に対する印象が良くなった



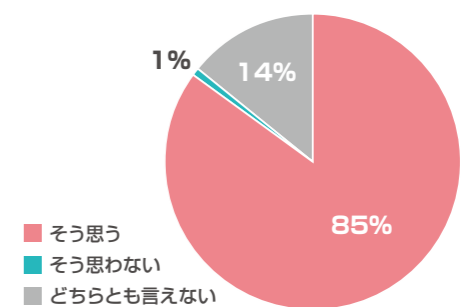
畜産に対する理解が深まった



畜産では女性がますます活躍できる



日本の畜産は変わる必要がある



8 女子高生のアイデア

北海道岩見沢農業高等学校 道端 成美

畜産アンバサダーからのアイデア

北海道岩見沢農業高等学校 道端成美

私の理想は・・・

畜産業が世間的に「素敵なお仕事」と言われるようになること！

・より魅力的に発展させ、畜産のイメージに改革を



・新しい畜産のイメージにしたい3つのこと

女性の活躍
(female activity)



男性の職業という概念を撤廃し、女性も輝ける職業に。

女性ならではの新たな視点を取り入れ、畜産業を発展！

家畜福祉
(animal welfare)

家畜の飼養条件を改善し、日本のみならず世界にも誇れる畜産に。

グローバル化に対応し、世界に負けない強い畜産業へ！

環境に優しい
(eco-friendly)

環境負荷を低減し、持続可能な畜産に。

先を見通す広い視野を持ち、現在と未来の生活の豊かさに貢献！



放牧

広い牛舎

NZの牛 = キウイクロス

小柄

大規模な飼育頭数

ジャージ × ホルスタイン

作業効率UP

搾乳しやすい

幅とらない

日本は地域によって気候の差が入ま
にもかかわらずホルスタインが"ほとんど"を
占めている...。しかも繋ぎ牛舎。

日本でも品種改良してその土地や
気候に合った牛を飼育
牛舎の環境の見直し

放牧しない
アミル
ウエルワ
の推進!

土地が小さい
= 放牧は
日本では
必ずしも
あてはまらない...

牛も人も過ごしやすい
作業もしやすくなれば...
みんなが幸せな酪農ができる!

高橋 六花

健康

家畜福祉 (アミルウエルワ)

牛にストレスを与えず
牛を健康に
飼育するための考え方
動物愛護とはまた違
家畜から命を頂く上での考え方

家畜が
"ここに生まれてこれた"
良かった
と思えてもらえる飼育方法

健康

若手の活躍

アミルウエルワ制度という
第三者後継に似た制度がある。
農家一人一人が若手を育てることに積極的

労働力確保!!

大規模も可能になり、酪農の発展につながる。

女性の活躍

酪農を成功するためには女性の活躍が重要だ

この言葉も NZ によく聞いた。子供の飼育、観察力、おしゃべり
女性自慢を経営に取り入れる → より良い風をもち込めることになる

環境作りの重要性
単に自然環境だけでなく
"働かせろ" "参入しな" "生活しな" 等
"牛にも人に優しい経営" という理想の畜産
このために環境作りをしよう!!

"女性だから..." とは違う! "女性だからこそ!!"
意識を変える

より儲けるためには
女性の活躍が必須

夢を大きく抱き
私は優しい酪農家と成る

H31.3.4

ビジネスについての提案

ニュージーランドでは「放牧」が主流!

放牧のメリット

- つなぎ飼いや、飼育頭数を多くすることが出来る💡
 - 牛達はあまりストレスを感じない💡
 - ストレスを感じない → 乳量・乳質を上げる↑↑
- etc....

日本でも放牧をすることで同じ効果が得られるのでは??

今から放牧を始めるのが難しい! 土地がせまい! そんな方は...

例えば 工夫することで似たような効果が得られるのでは?

- 子牛だけの放牧
- 週ごとで牛を入れかえる

是非、参考にしてみたくねから

嬉しいです♡

牛乳一滴の奥深さを一緒に広げていきたいと思います!



なんといっても **放牧!** ~日本で出来ることは何だろう~

牛舎がいらない
↳ コスト削減

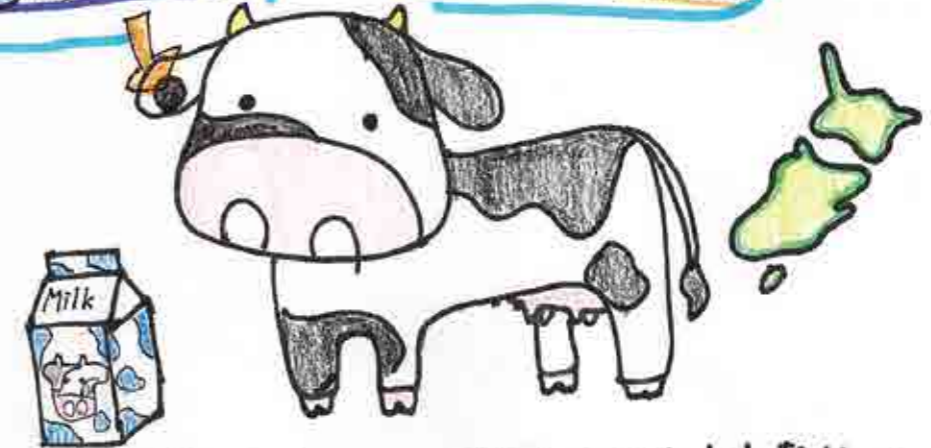
女性の農業
進出!!

牛に優しい...
(除角も麻酔)

就農しやすい!

個体管理は?
↳ ICチップ活用

キウイクロス
ホルスタイン × ジェーシー



日本では、放牧をすることが難しいかもしれない...

でも 学んだことは取り入れたい! ICチップの活用
新規就農応援 などなど



私は、誰でも楽しく働ける、畜産現場が増えてほしいと思っています。
NZでは、そんな環境づくりを自分たちの手で行っていました。私も、自ら動いて、良い環境をつくらせていきたいです。

畜産アンバサダー

栃木県立那須拓陽高校
3年 田中 萌絵

参加の理由 = 那須拓陽高校に入学し、牛部に入部して酪農の魅力を感じ、将来酪農に関連する仕事に就きたいと考えるようになり、NZの放牧中心の酪農経営を実際に学びたいと思ったから。

NZに行くって学んだこと

① 放牧について

- ・ 子牛の頃から放牧しているため、哺乳のタイミングや水分補給が大切
→ カフェテリアとロウは出る機械で哺乳をしている
この哺乳を観察することで日本語を把握
- ・ 日本では搾乳牛に濃厚飼料を多く与え乳量を増やしているが病気も増えている
→ その結果、日本の搾乳牛の耐用年数は約5年、NZは約8年~10年
- ・ 経営に関して、自給飼料中心の放牧は、一頭あたりの乳量は少ないが利益を出すことが出来る。

⇒ 地元、栃木で発展させたい

栃木県の那須地域 農業が盛んな地域 but 牧草地で牛が草を食べている姿を見かけない
観光客が多く訪れる

☆ 放牧によるコスト軽減、キウイクロスのような放牧に適した牛を作る。

☆ 小さくて放牧しやすい牛は乳質を良くし、リゾート地や観光地を利点に、チーズやアイスクリームなど付加価値の高い製品を作ることによって地域全体が活性化するのはないか。

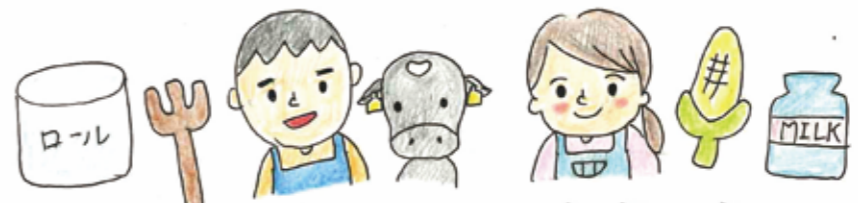
私がこれから出来ること

JA全農ET研究所でAI師とET師の資格を取得し腕を磨き、地元栃木の酪農に貢献したい。

女性でも出来ることを証明する



NZ酪農研修



今をトキメク若者達へ!!

今を全力で楽しんでください!そしてたくさんの方にチャレンジしてください!私は同世代の人に憧れてもらえるような酪農家になれるように頑張ります。皆でこれからの農業を切り拓いていきましょう。



IDEA FROM THE NEWZEALAND

今の日本の酪農は...?



経営者の多くが高齢...
継ぐ人がいない...
酪農家の減少

未来の日本の酪農!

若い人も増えて
安心!
楽しい酪農生活?
牧場が増加?
牛もたくさん?
乳製品の自給率
UP!

それを



『そうするためには...?』

アイデア1 子どもだけでなくウラリーマン(非農家)や、酪農家が積極的に酪農について言及する!
中高生にも酪農という職業をもっと知ってもらおう!
子どもだけでなく大人も酪農体験を!
学校での酪農についての教育を活発に!



NZでの授業の様子

アイデア2 酪農への悪いイメージを減らす
○汚い○臭い○借金がある
○男の人の仕事。もうからない

環境にも優しい酪農経営をする!
○女の人でも大丈夫!ということを知りたい!
○初めて(非農家)でもできることをアピール!
酪農の悪いイメージを減らすように
全体で協力し対策する!

借金



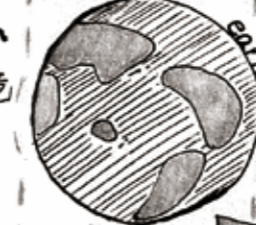
まとめ

NZでは日本では見られない物。体験できる場所をたくさん経験できました。その中でも一番驚いたのはNZの人たちの何にでもチャレンジできる心と、強い自信です。新しい事にも失敗を恐れずチャレンジする事が、酪農の活性化につながると強く思いました。私も新しい第一歩を踏み出すと心に決めました。



動物にも人にも優しく
アニマルウェルフェアを高めたい
ストレスフリーで長生きできる環境に...
放牧

環境にも優しく



ライフワークバランスをとる
機械化を進めて、省力化を図る。
過剰労働しない & 休暇もある

女性の活躍
これからの畜産は...

男の人も 女の人も どちらも主体で

協力してより良い畜産業に
働けると Good



日本の課題
後継者不足
畜産を知らない人にも、
興味を持っている人にも、
もっと畜産に触れる機会を
新しい女性の担い手を
増やす!!
もちろん男性も

畜産を目指す君たちへ
難しいと思っても、萎縮せず
自信を持って挑戦することが
大事! と思います。
一緒にこれからの畜産を
盛り上げていきましょう!

作成者: 春日 鈴音



女性も輝く酪農も!

でかい夢を持つこと!!!

私がやりたいこと
 私がやりたいこと、それは「酪農の魅力」を伝えることです!!
 そのためには、ニュージランドの牧場を放牧し、牛に優しい飼育方法を目指したいです。また、地域の長野県北アルプスの麓で観光牧場として牧場を経営し、地元の方に身体と心がある場所として「酪農の魅力」を伝えたいです。

勇気をもらうきっかけ
 私はニュージランド酪農研修で現地の方から「酪農の魅力」を学びました。そして、自分自身も「酪農の魅力」を伝えることが、私の夢です。だから、私も「酪農の魅力」を伝えることに挑戦しようと思います!!

酪農家を目指すきっかけ
 畜産業界は決して儲けが少なく、楽な仕事ではありません。しかし、大きなやりがいがある。牛が大好きで、常に牛と一緒にいたい。それが私の夢です。そして、酪農の魅力を知り、酪農家を営みたい。酪農は、牛と人の絆を大切にする。仲間と協力して、酪農を盛り上げたい。仲間がいたら、一人では無理です。仲間と協力して、酪農を盛り上げたい。仲間がいたら、一人では無理です。仲間と協力して、酪農を盛り上げたい。

長野県南安曇農業高校 古河 風葉

NEW ZEALAN

NZの放牧のメリット

- ミルキングパーラー等の主要施設が1つで済む。
- つなぎ牛舎よりは労働力が少ない。
- 餌代などの管理費が安く済む。

個体管理は?

NZでは機械化が進んでおり、耳にICチップをつけることで個体別にコンピュータ管理されている。

日本では省カ化をすすめるべき!!

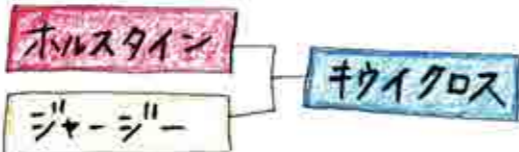
- ★ ICチップの導入により...
 - ・ 病気や治療歴の管理がしやすい。
 - ・ 乳量の管理が正確になる。
- ★ ミルキングパーラーの導入により...
 - ・ 労働力がいらなくなる
 - 人件費による出費の削減。



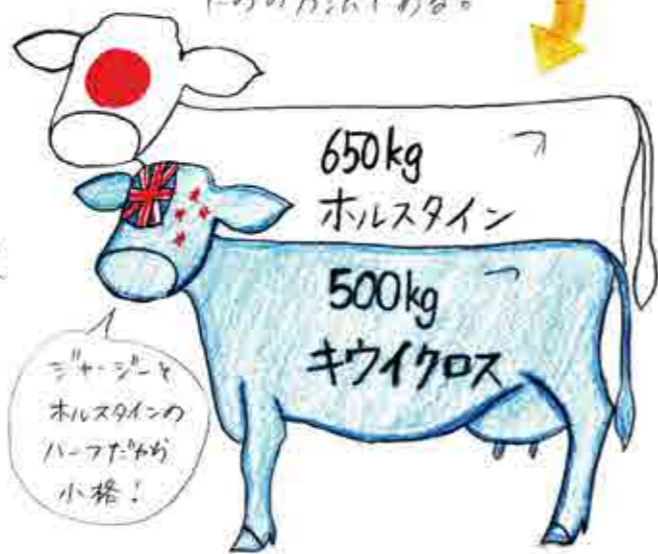
さらに 効率のいい酪農経営 につながる。

＜放牧＞

つなぎ牛舎下でもどうしても運動不足になってしまっている。少し運動できるスペースがあれば運動不足、肥満が解消される。



NZではキウクロスという名の品種が主流になっている。
 日本は乳量で牛の価が決まれているが NZは「ミルクソリッド」という乳脂肪分と乳蛋白の合計で決まる。少しでも乳成分の多い乳を出産するための方法である。



ジャージーとホルスタインのハイブリッドが小格!

目指せ! 新規就農率100%へ!!



日本は、あまり新規就農者への支援も活発に行っていないと思う。だから、就農をしようとしてもその先の見えなさから、あきらめる人が多いのかもしれない。私も、いつかは就農したいと考える身。その時が来たとき、安心して「農業・畜産」という職業を始めることができるように、今の日本に必要だと感じたことを書いておこうと思う。(何も知らない私が書いていいのかわりに配ったか...)

① 農業・畜産のことを知ってもらおう!

農業、畜産を始めるには、近隣の人達の協力が不可欠。農家の人達がいなくていい作業を何のためにしているのかわかってもらい、理解を深めてもらう。命のありがたみを知ってもらう。

② 農地を探しやすくしよう!

NZでは売出される農地の情報が新聞に掲載されている。日本でも手軽に見ることができるようになるべきでは? 太陽光発電も大勢が検討。その農地を必要としている人がないかも一度振り返ってみる。

③ 補助金をもらおう!

就農=借金というイメージが強い。私も思う。でも何より心配なのは、借金が減らなからという点。お金がなくなると何もできないから。収入が安定するまで補助金が必須だと思う。

④ シェアミルカー制度を

取り入れよう! 本当は、それ以外の。従業員止まりの人と、もともと立場に立ち上るべきだと思う。経験は知識と同様に必要。だからこそ、就農したあとのイメージを持ちやすくなるために、この制度は取り入れべきだと思う。

返済不要の補助金制度をもっと増やすべき!!

新規就農者の経験、知識を引上げよう!

日本の農業は、これからさまざまな国際情勢や環境の変化で、目まぐるしく変化していくと思う。そんな中で新規就農者も支援するのは変わらない。一度も夢をあきらめるという事は、とらえ、もたから。なりたいと思ったらなれることができる。そんな世の中にならなければいいな、私は思う。まだ人生の半分も生きていない。知識も経験もない。私ですが、牛の事は誰よりも深い。で、(笑)。私がいかに新規就農者になれる環境を作ってくれたら、とてうれい。この日本の農業のために、私は働いています。



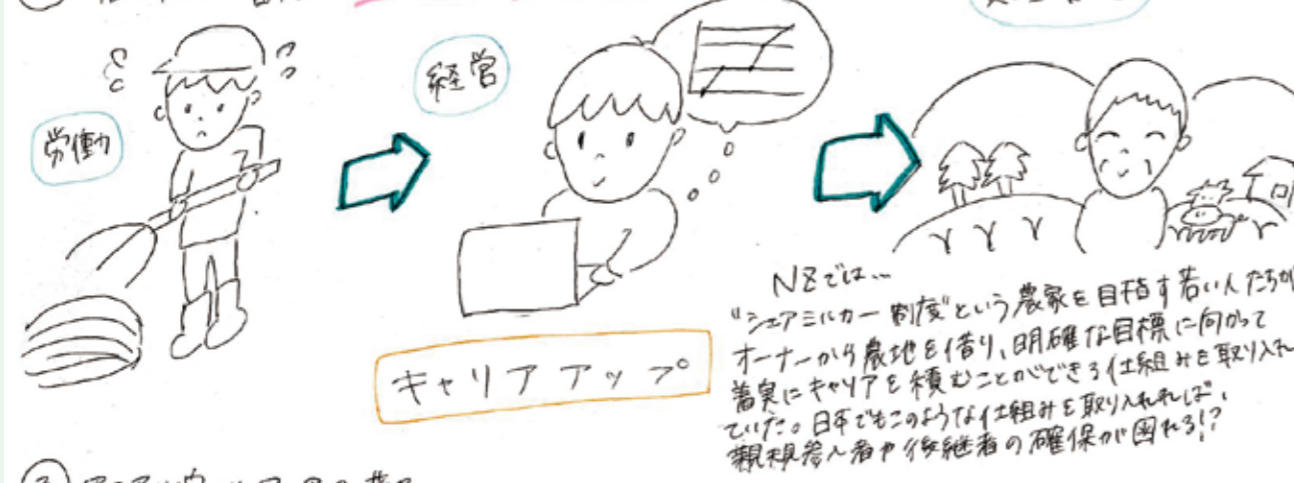
① 女性が働きやすい環境

NZでは...
周囲の理解が十分で、
ベビーシッターやヘルパーの
雇用によって積極的に
サポートする姿勢が見られた。
日本でも意識を高め、この様な
環境作りが大切。



出産
子育て
周囲のサポートが必要!

② 若い人が畜産を始めるに、体系的な仕組み



③ アニマルウェルフェアの普及



WIN-WIN

NZでは...
除角や去勢の際に麻酔を用い
ることなど、様々なアニマルウェルフェアの
法律が定められている。また、放牧ビ
ジネスの生活している牛たちはとても幸せ
そうだった。
牛たちが幸せな生活を少しでも実現
できれば、生産能力も向上し、人に
対しても牛にとっても Win-Win な畜産
を実現できる。

三上 日和

NZのすごいところ!

規模
1000頭、2000頭 当たりの前!
2つだけ多くの頭数を管理している「7」は...
ICチップが内蔵された耳標 があり!
位置情報、体重、牛の投薬量、給餌量、気量、体温
など個別別に管理され、アプリを使ってスマホで簡単に見られる。
1000頭前後の農家や畜産農家、農業経営コンサルタントなど
様々な形で女性の活躍を促進。このように活躍により
男性からは、「農業において女性は必須不可欠だ」とまで!
また、女性自身が自分の仕事に対して誇りを持っていて
とてもカッコ良かった。
自信を持って、力強くあることの大事さを学んだ。

日本の畜産業は...?

- ・人不足
従事者の高齢化による後継者不足。
産業界の物産医師の不足。
マイスター制度が高利人気がない。
- ・魅力発信
まだまだ魅力が届いていない。若い子から中、高校生まで
年代の人に食を愛に付けて欲しい。
- ・女性や若者の活躍
NZと比較すると、女性や若者の活躍は少ない。
女性だと畜産をやるのが日本では難しく見えてしまう。
EX) 産休・育休に対する周囲のサポート、畜産を始める時の周囲の反応

理想的な畜産業にするために

- ① 人不足について
・コミュニティの充実 ▲ 気軽に参加できる仕組み。
・高齢者や若者をつまみ合わせで働き制
・進路を考えた時に中高生に興味を持ってもらう
きっかけを作る (授業、イベント、農展会 ほか...?)
・女性や若者が活躍している業界だと知ってもらう
若い世代の人も興味を持ってもらえるように
- ② 魅力発信について
・「行ってみたい場所」の人に牛などを可愛く思ってもら
ほしい
↓
・食について、畜産について考えたらう事がたくさんある。
・「食の安全」などのマイスター制度から、
「楽しい」「やりがいのある仕事」としてプロのイメージへ!

Message

この研修を通して、改めて「畜産」の大切さ
を再認識しました。現地の
農家のみなさん、とても活き活きとした自分
達の仕事を誇りに感じ、いろいろな話を聞け
ました。今、畜産に興味を持つ、これだけ
畜産に携わる機会を持つ、いろいろな人が
いる。そして「男性の力が強いから...」とは
思いません!! 前例がなくても、とにかく
新しいことに挑戦してみたい!! NZの畜産
分野で自分の活躍の場を創りたい!!
共に胸を張って、畜産の魅力を探してみよう!!
畜産イベントの企画は、本当に社会の良さが
感謝の気持ちで一杯だ。みんなが夢を向けて
頑張っていると思う。これから先、牛を大切に
毛皮を大切に育て、人々は再び幸せにしよう!!
畜産イベントが最高!!



NZでの女性の活躍

NZでは、男性と女性がお互いのことをビジネスパートナーとして経営を行っていた。女性の仕事も多岐、牧場の事務や機械操作などをしていました。女性だけでも農業はできるよ！とおっしゃいました。



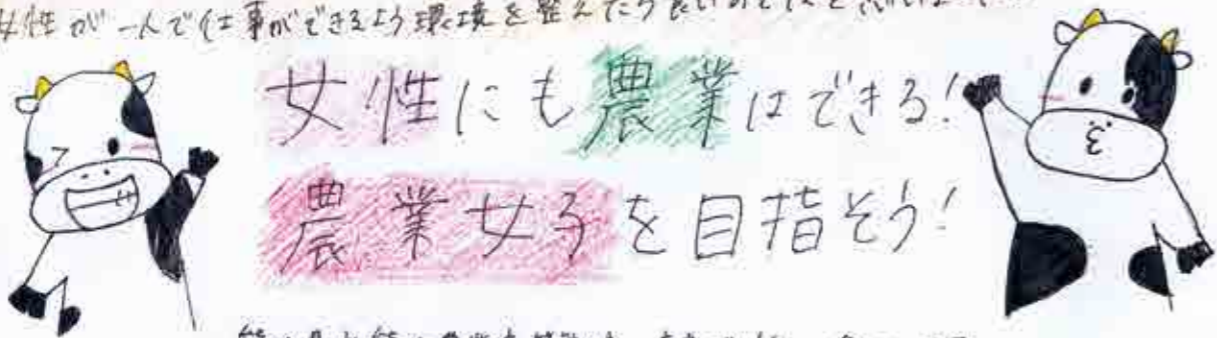
横の写真に写る男性は、農業に女性は必要不可欠だとおっしゃいました。女性は農業の全てに関わっている、女性と男性の考えは一緒だ。農業をしている女性は周りの人から強制されて始めるのではなく自分で「農業をしたい」と思い経営を始めるのが経営をしていくことができる、と教えて下さいました。



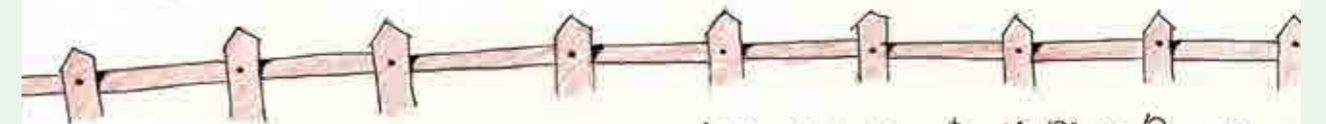
NZでは、放牧が99%道路を2m2999の牛や羊、馬などが放牧をされていました。



畜産業は大変な仕事ではありますがこの研修を通し女性にも畜産業、農業をしていくことができると言っていました。なので、私が思う理想の畜産は「女性一人が畜産業をする人を増やすこと」です。そのためには、畜産業に興味をもってもらい女性が一人で仕事ができる環境を整えたいと思います。



熊本県立熊本農業高等学校 畜産科1年 今林 楓



今回のNZ研修に行き、自分がしたい事、道路を見つけ、決定する事が出来ました!! NZに行けた事で、知識を深めると同時に、**夢**も見つける事が出来ました。
行くべきです! **挑戦**あるべきです! 行きましょう! 畜産国へ。
日本の畜産業をもっと楽しく、活気あるものにするためにも、若い人の力が必要なのです!!

畜産JKのあなた、活躍する時代来ました。
畜産業は

これからの**日本**を支えよう

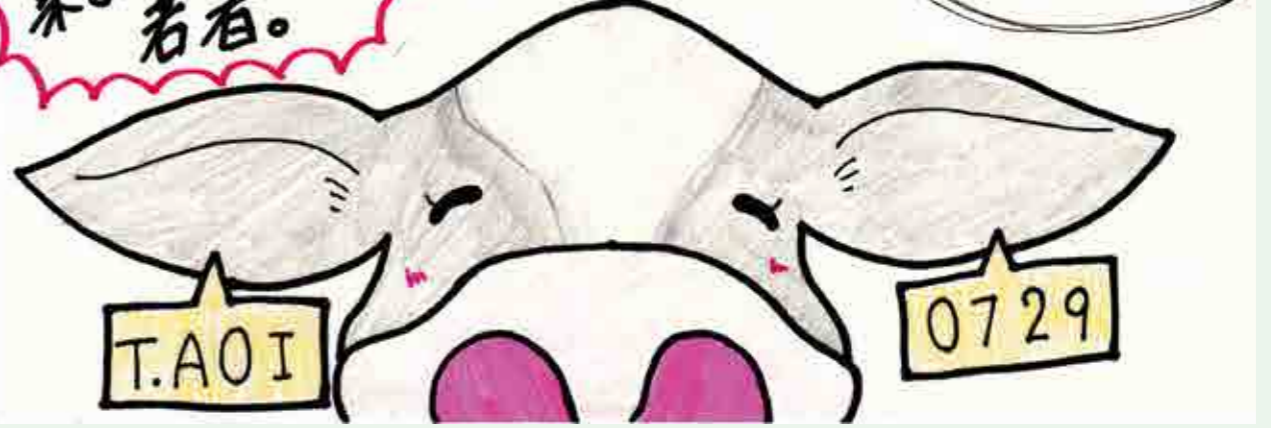
魅力たくさん

酪農は楽しい農業!

儲かる!

離農増えちゃう...
集秋若者。

性別を
何でもできる!



日本中央競馬会平成 30 年度畜産振興事業
未来の畜産女子育成プロジェクト事業報告書

発行 平成 31 年 3 月
発行者 公益社団法人国際農業者交流協会
電話 03-5703-0252
ホームページ www.jaec.org
校正・デザイン 折戸 忍
印刷 株式会社コンゴ商会

【禁無断転載】